

勘違い鬼滅奇譚

まっしゅ(芋)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何故か一族ぐるみで水柱にならねばならん圧力をかけられた。曰く、俺には『記憶による呼吸の伝承』を受け取れる才能があるらしい。はつきり言っておこう、

「そんなもん見たことも聞いた事もねえから!!!」

転生オリ主勘違いモノ。今日も周りの勘違いが加速……してる？

*アニメ派の人にとってはネタバレになる可能性が高いです。

*作者は基本単行本派です。

*オリジナル設定タグを付け足しました。

*基本ギャグ構成、かつ男子学生的なノリが序盤にあります。無理な方は回避して下さい。

*作者の力不足故、たまに勘違い要素が無くなります。

目次

あつさり修行編

事の始まりは | 1

弟弟子が危険すぎる件について | 4

だがしかし、主人公は特に何も言っていないのである。 | 7

最終選別編（本人達は至って真面目です） *勘違い無し

俺は変態ではない。 | 12

宇髄と流の藤襲山冬合宿 | 16

冬合宿折り返し地点 | 19

いまは何年？ | 23

少し貧血で厨二病状態になってる！多分俺はシラフだったらこん

な事を絶対言わなかった!! | 27

重ねて言うが、俺は変態ではない。 | 30

刀が届くまでの二週間編

テンゲンクエストV 天空の花嫁 | 34

俺は女の子が好きだ。決してそっち系ではない。 | 37

戻ってきた勘違い！流は実家に帰りたい！ | 40

流覚醒 | 44

勘違いキャッチボール | 48

キャッチボールは終わらない。 | 52

チベスナ錆兎 | 56

流、心労がすごい編

帰宅 | 60

るる剣にありそうな展開（笑） | 63

どゆこと!?! | 66

村雲宗治という女	70
戦闘開始	73
サゲポヨ流	76
(偶然です)	79
朝	83
お前ら!!派手に不評だった村雲事件に一段落つくぞ!	87
水柱就任編	
放課後お八つタイム 前編	90
放課後お八つタイム 後編	93
そこで止まれば凧なのに……	97
水柱とは	100
流、それ水の呼吸やない。霹靂一閃や……。	104
竈門炭治郎立志編	
炭治郎は唐突に覚醒す	107
母のこえ	112
さらば富岡義勇、胡蝶しのぶにぶっ飛ばされるの巻	116
本家	125
水の呼吸カウンセリング(鱗滝)	130
九ヶ月経過	134
真菰さんと炭治郎	138
感謝	144
ヘタレ柱	150
一門家が予想以上にベリーハードだった件について。	154
炭治郎は悪くありません。彼は素直なだけです。	159
彌豆子	163

那田蜘蛛山から柱合裁判編

寝坊柱

人か鬼か

ぎゆしの（物理）

すれ違い 前

すれ違い 後

蝶屋敷修行編

水の呼吸だからね。しょうがないね。

一門流がモテない理由

証明

富岡先生

169

172

177

183

189

195

201

212

219

あつさり修行編 事の始まりは

その日、俺は実家の寂れた道場で一族の当主、オトウサマにこう言われた。

「流！お前には才能がある！お前は一族の意志を継いで四代ぶりの水柱になるんだ！」

（おいまじかやっぱり転生テンプレ『鬼殺隊に入る』から逃げねえのかよ。ハ、死んだわ）

前世のある俺は、オトウサマの言葉を聞いて気絶したのであった。



『鬼滅の刃』とはジャンプで連載中（俺生存時）だった、大人気マンガだ。主人公、竈門炭治郎が鬼となった妹、竈門禰豆子を人間に戻すべく冒険する的話であったのを覚えている。ダークファンタジーでありながらギャグもテンポ良く噛み合わせり、アニメ化を切っ掛けに一気にブームになった。

俺はそんな鬼滅世界に転生してしまったのである。

何言ってるの笑??とか、頭大丈夫かお前？病院いった方がいいぞ?とか思った人もいると思う。激しく同意だマジで。でも俺は転生してしまったのである。死因はぶっちゃけどうでもいい。ともかく、ここが鬼滅である事がヤバイ。

簡単な話、鬼滅はポンポン人が死ぬ。

鬼殺隊の面々は勿論、普通のひともサクッと食べられるし、そもそも鬼の強さは異常だ。

怪力で、回復力えげつなくて、太陽にあてるか日輪刀で頸を斬らなければ死なない。しかも日輪刀は普通に折れる。

これなんの無理ゲー？

思わず天を仰いでしまうのも仕方がないだろう。

そんじよそこらの平鬼殺隊士だって、大体は二、三年の修行は積んでる上、殺る気満々の最終選別を抜けてきた猛者である。なのに死ぬ。普通に死ぬ。でも俺は死にたくない。

だから俺は決意したのだ。一般人として、生きようと。

確かにせっかく鬼滅世界にいるのに原作キャラに会わないのは損してると思うし、俺だって本音を言うのと前世の推しであった柱とか、めっちゃめっちゃ会いたい。でも命には換えられないのである。

そう決意してから俺の行動は実に素早かったと思う。家の庭にコツソリ藤の木を植えたり、夜中は絶対に藤の香を焚いて寝るようにした。自分が考えうる限りの鬼対策をしていたのである。

家は華族で、没落しかけてはいたものの道場であった。だから俺は少しでも生き残る可能性を高くするために稽古に励んでもいた。

同年代にも「お前の稽古は命を懸けてる感じがする」とまで言われた。実際命かかってんもん。

そんな俺が何故冒頭の様になっているのか？

それは、俺が十三の時である。俺は道場の師範代であった叔父さんを倒したのだ。

一回国が離れていたとは言え、所詮は実戦なんて到底意識していない道場。死にもの狂いで稽古に打ち込んでいる俺からすれば隙だらけのおっさんだ。まあ勝てた時は嬉しかったけど。

その日の夜、俺はオトウサマから呼び出された。なんとも「お前に話がある、」とか。

俺は上機嫌でオトウサマの元へ向かった。ご褒美とか、俺も今日から師範代とか、そういう話を期待してたのである。

まあ、冒頭の通りだがなっ！！！！

「今まで内緒にしていたが、我が一門家は戦国時代から代々、鬼殺に従事する家だったのだ」

「……」

「今は途切れているが、四代前までは炎の煉獄家と並び、水の一門家として名を馳せていた。炎、水、というのは呼吸法の事だ。何でもその呼吸をすると鬼の様な強さを誇るらしい」

「……………」

「水柱であった三代前当主が鬼に殺されて亡くなった時、俺の父は家にあつた鬼殺の資料、痕跡、証拠を全て消した。そのせいで今この家には何も残っていない、らしい。俺も自分の叔母から聞いた話だが」

「……………」

「だが俺は悔しかった。先祖代々継いできたお役目を放棄していいのか？と。そして剣の才能が全くない自分にも！」

放棄していいと思う。

「しかしそこでお前を見て思つたのだ。お前は鬼の苦手とする藤の木を植え、藤の香を焚き、稽古にはまるで鬼に対するが如く取り組んでいた！」

【悲報】俺氏。まさかの自業自得。

「なぜ鬼の存在を知らないお前がそんな事をしたのか？」

オトウサマはダンツ、と床を叩いた。

「記憶の遺伝だ!!我が一族に伝わっていた秘術『記憶による呼吸の伝承』がお前を鬼殺へと導いたのだ！」

『記憶による呼吸の伝承』？」

「そうだ！先祖が修めてきた武を衰えさせることなく後世に伝える術だ！」

(いやナニソレ!?)

次の日俺は替えの服数枚と木刀、それに非常食とシヨボい地図を持たされて家を追い出された。

地図には狭霧山『鱗滝左近次』と書いてあつた。

どうやらパンピルートは歩めないようである。

弟子が危険すぎる件について

「二年修行してその程度か！弱い！自分を守れるのは自分だけだ！ましてや己を守れぬ者に他人を守れると思うなよ！」

俺は今、目の前で転がっている富岡義勇と錆兎を叱咤していた。なぜ彼らは苦しそうに蹲っているのか？

二歳下の少年達を体格、修行歴その他諸々で勝っている俺が徹底的にボコツたからである（白目）

しかもあいつら修行はじめて一年しかたつてないのに強いしき、手加減とかできねえわ。端から見たら完全に嫌な兄弟子、ごめん二人とも。だから俺に近寄るな。

「お前なに年下いじめてんだよ!？」とか「義勇と錆兎をいじめるウ？寝言は寝ていえカスが!!」とか言われそうだが、これにはれつきとした理由がある。

『鬼滅の刃にて、鬼殺隊士でありながら生き残る方法』

俺が毎夜必死になって考えている、俺の俺による俺のための人生プログラムである。それにはこう書かれている。

——主要キャラと仲良くなつてはならない！（主に炭治郎）

なぜなら、彼らは尽く強い鬼に遭遇するからである。世の中に十体しかいない鬼、十二鬼月に会いすぎだろ。特に上弦、何で柱の奴より一般隊士の方が会ってんだよ。

主要キャラには勿論目の前の富岡義勇が入る。錆兎は対象外だが、富岡だけを一人省く事はできない。

別にボコる必要は無い、やみくもに関わらなければ良い——。そう思っていた時期が俺にもありました！

「今日こそは貴様に勝ってみせる！」なり「強者に挑まずして何が男か！」なり（主に錆兎が）言つて向こうからめちやめちや絡んで来るのである。勿論富岡義勇もついてくる。あと、絶対後者のセリフは間

違ってる。

錆兎はまだ良いよ？アイツ襲いかかってくる前に口上述べろし、嫌いから直ぐに分かる。

やべえのは富岡義勇だよ。何も言わずに後ろから斬りかかってくるんだよ。気配消すのも異様に上手いし。お前だけ暗殺技術仕込まれてんだろ……！

途中で彼らの得物が真剣に代わって、本格的に死ぬかと思ったが、なんとか俺は生きている。

ただこれは避けるだけでは永遠に終わらないので、俺は仕方なく――本当に、仕方なく!!ボコツてるのである。

別に、日々の恨みなんか込めて無いんだからねツ!!

……………。

しかし俺も得物が切り替わった時に反省した。

嫌われるのは全然良い。むしろ嫌われたい。

だけどこそのままじゃ俺、鬼以前にコイツらに殺されるんじゃないやね……

？

生きるために嫌われ大作战をしているのに、作戦のせいで殺されるなど言語道断。やはりアメとムチは使い分けねば！

俺は言葉をかけることにした。

「錆兎、お前は力を入れ過ぎだ！水の呼吸の真髄は何物にも変化し、それでいて本質を見失わない事だ！先生の教えをもう一度洗い直せ！」

水の呼吸の真髄？まだ習って二年目ですが。

「義勇！気配の消し方はなかなか様になってきたが、奇襲が失敗した時にどうするべきかしつかり考えろ！」

お前は一体何になるんだ。そして俺は何を言っているんだ。

「はい！」

何故か返事だけはしつかりしている謎。俺適当に言ってるだけだからね？覚える必要全くもって無いからね？むしろお前らには『人に暴力を振るってはいけない』という社会常識を教えたい。

だが、俺が今直面している危機はこんなものではない。なんと『殺る気満々最終選別』行きが決まってしまったのである。

しかも俺、岩とか切ってないんだぜ？そういう試験とか無しに、さらつと決まった。

いつも通り錆兎と義勇を転がして、「剣が無いなら鞘で戦え！鞘が無いなら拳で戦え！」と言ったのを切っ掛けに、ステゴ口勝負を繰り広げていた途中である。

先生がスタスタと歩いてきて「お前はもう合格だ。二週間後の最終選別へ行け」とアツサリ言ったのである。

俺は錆兎を殴りながら「マジか」と口を開けてしまった。

だって俺、伍ノ型までしか出来ないんだもん。

才能がないのか、俺は陸ノ型以降の技がこれっぽっちも使えないのである。先生が途中で匙を投げてしまうほどに。

だがしかし、主人公は特に何も言っていないのである。

『記憶による呼吸の伝承』

水の呼吸の名門、一門家にいにしえより伝わる業。

言い伝えによると、その業は先祖の水柱が極めた技をそのまま記憶として受け継ぎ、体現する事ができるのだとか。

水の呼吸の存在さえ知らなかった者がまるで体に染み付いたように技を繰り出す事はおろか、剣を握った事の無い者が突然流麗な剣裁きを持って鬼を制すとか。彼らの逸話は枚挙に暇がない。

記憶が発現する時期は多種多様で、十になる前の者もいれば二十を過ぎてから発現するものもあるらしい。

引き継ぐ記憶は先祖水柱の内の誰か。時代にはかなり幅があるらしく、それも一門家の歴史の長さを語っている。

鱗滝がかつて鬼殺隊に属していた頃、鱗滝の前前にあたる水柱が正に一門家の者であった。その水柱について、鱗滝の師範はよく酒の席で語ったものだ。

「二門殿は水の呼吸を捌ノ型までしか修めていなかった。『才能が無い』などと本人はその事を恥じていたが、彼の剣は非常に素晴らしく、私なんぞでは足元にも及ばないものであった。おそらくあれは一門家の秘技が関わっているのだろう。呼吸の型は時代と共に付け加えられていく。もし彼の人の受け継いだ記憶が、まだ捌ノ型までしか無い時代のものであったならば？説明がつくのではないだろうか？」

『記憶による呼吸の伝承』——それを引き継ぐ者は皆揃って柱と称される剣士になり、鬼殺の歴史に大きな跡を残していった。

しかし血による業は時と共に廃れていくのが定め、一門家は時代に埋もれ、今ではこの話を知っているものも数少ない。

鱗滝は十年ぶりに自分の記憶を掘り起こしていた。

——なあ、流。

「諦めるな、お前たち！すぐに立て！鬼は待つてくれない、助けも無い！いつだって自分自身を助けるのは他でもない自分だ！」

お前のその言葉は、一門水月の言葉なのか？

かつて五つの型を持って水の呼吸を確立した、初代水柱の。

|| || || ||

錆兎にとって兄弟子、一門流は常に自分の前に立ちはだかる大きな壁である。

何もしなければすぐに遠のいて行き、見えなくなってしまう壁。圧倒的なまでの格上。

常人であれば諦めてしまいそうな程の実力差に錆兎はかえって高揚していた。

錆兎は孤児である。八の時に親を亡くし、鱗滝左近次に拾われた。

彼はすぐに鬼狩りとなることを心に決め、鱗滝に教えを乞うたが、しかし鱗滝は錆兎が十になるまで教えないと言った。

「焦ることはない。他の弟子達の稽古を見るだけでも、それは立派な修行となり礎となるだろう」

それが師の口癖であった。

錆兎は鱗滝の言葉の通り、常に兄弟子達の修行に付き添い、時には言葉を交わしながら日々励んでいた。

実際、彼が十になり鱗滝から手解きを受けた時も錆兎の成長速度は凄まじく、錆兎自身も自らがかつての弟子の中でも特に優れていることを確信して疑わなかったのだ。

一門流に会うまでは。

『お願いします。俺に呼吸を教えてください』

一門流は錆兎が十一の時に狭霧山へ来た男だ。

彼は見るからにボロボロで、顔もやつれていたが、その目にはハッキリとした意志が宿っていたことを覚えている。

恐らく、俺と同じように大切な者を鬼に殺されたのだろう。

その風貌から、錆兎は推測する。

だがしかし鱗滝がその理由を尋ねた時、その答えに錆兎は怒りを覚えた。

『鬼を滅する為に剣を握るのではなく、大切なものを守るために握りたいのです』

なんと軟弱な！錆兎は叫びたかった。鬼は例外なく人を襲う。そこには情けも憐れみもない。

守るために戦う？そんな受動的な理由で鬼を殺せるものか!!

鱗滝がその返答を認めた事も、錆兎は気に食わなかった。

こんな腑抜け、修行の厳しさについて来れずに直ぐに家へ帰るだろう——。錆兎はそう思い、修行中も一門流を無視し、一切口を聞かなかったのだ。

視界に入れる事すらも嫌だった。

それを見たのは、一門流が来てから半年が経過していた頃である。

一門流は鱗滝の指示の下、型の練習に励んでいた。

呼吸を学び始めたと言うことは、剣術の基礎を修めたという事である。

半年は……認めたくは無いが、かなり早い。

鱗滝が手を鳴らすと、一門流は静かに剣を抜いた。

水の呼吸、壺ノ型・水面切り。

放たれた技は重心が露程にもぶれない。

式ノ型、水車。

真つ直ぐ、降り下ろされる剣筋。

参ノ型、流流舞い。

足さばきは今まで見たどの弟子達よりも見事なもの。

肆ノ型、打ち潮。

流れるように繋がられる剣。

伍ノ型、干天の慈雨。

横なぎ。速度も、高さも、完璧だ。

一門流は残心を取ると、暫くしてから剣を納めた。

流麗。

天才とはこのこと、彼の剣は本当に素晴らしかったのである。息を止めて見つめてしまう程に。

「錆兎、分かったか。お前に足りないものが」

錆兎はいつの間にか横に居た鱗滝を見つめた。

「流は最初から剣術を習得していた。儂がしたことは型を教える事のみ。この半年間、彼奴はひたすらに型のみを練習し続けていた……剣は才能に依るものであっても、型は努力によるものだ。才に溺れず、ひたすらに技を磨く……簡単ではない」

錆兎は自覚した。そして恥じた。

自身が井の中の蛙となっていた事、周りが見えていなかった事に。

錆兎は鱗滝の言わんとしていることを察した。

目の前に大きな壁が在るのに、それを越えずして何が男か。

錆兎は木刀を握った。

「一門流！俺はお前を越える！」

錆兎は振り上げた木刀を一門流に向かって振った。

『鬼を滅する為に剣を握るのではなく、大切なものを守るために握りたいのです』

錆兎はもう、その言葉を軟弱と揶揄したりはしない。

錆兎と同じ境遇でありながら、その考えに至った彼を、心の底から認めていた――。

「いやそいつ六ノ型以降は難しくて、練習サボった挙げ句に伍ノ型までばかり半年間やり続けただけだから」とか「実家が道場だから、物心ついたときにはもう稽古始めてたから」とか「そもそも家族みんなピンピンしてるところか鬼に会ったことすらないから」と彼らにツッコむ人間は一人も居ないのである。

そして後から話を聞いて鵜呑みにした富岡義勇も言わずもがな。

ちなみに流の言う『大切なもの』とは自分の命と名誉である。

「鬼殺隊に入るまで家に帰るんじやねえぞ（意識）」と言われた彼は泣く泣く狭霧山へ向かったのである。

方向音痴故に数日間他の山をさ迷ったすえ。

最終選別編（本人達は至って真面目です） *勘違い無し

俺は変態ではない。

道のりは長かった（物理）

藤襲山までの道のりを教えてもらって、先生にGoogle先生顔負けの地図を書いてもらい尚、本来の時間の三倍をかけてやっと着いた。

地図が詳しすぎたのが逆にダメだったのかも知れない。反省。

とりあえず遅刻にならなかつたのを喜ぶものの、反面悲しい気持ちがある。

つ、着いちやつたー……最終選別。もう俺死ぬかも、ムリムリやばい膝が震える。

顔は至って平静を保つ、ここで小物オーラを出しても死亡フラグにしかない。

『流！武運を祈る！』by 錆兎

『流、死ぬな……』by 富岡義勇

『お、おう。帰ったらまた稽古つけてやるよ……』

なにを言ってしまったんだ俺はアア!!『これが終わったら……』系は立派な死亡フラグだろうが!!

弟子達も意外と可愛いじゃねえか、何て欠片も思ってしまった自分を殴りたい。アイツらは数ヶ月もの間、俺の首を狙っていたんだぞ。

気を許したら殺される事を忘れていたのか!?正しくは、

『流！武運を祈る！（そして俺は貴様を倒し、更なる高みを目指す！）』

by 錆兎

『流、死ぬな……（何故ならお前は俺が暗殺するのだから）』by 富岡義勇

だろうが！

真剣で襲われた恐怖を思い出せ！ 厳しい事を言ってくるが実は優しく人情に溢れた二人は年上の俺には適用されない！

ムカムカで緊張がほぐれてくる。今まで嫌われ過ぎを避ける為に自分から襲う事は絶対にしなかったが、よく考えたら俺の嫌われ度限界に達してない？ 俺から襲いかかっても良くない？ 富岡義勇の奇襲もキャンセル出来るんじゃない？

よし、やろう。

俺は絶対に生き残る。そのための戦略も組んできたんだ。

『鬼滅の刃にて、鬼殺隊士でありながら生き残る方法（最終選別編）』

・ 団体行動

・ 年号鬼全力回避

・ 予備刀の確保

——この三つである。

団体行動、言わずもがな。なるべく強い奴が好ましいが、せめて二人以上で行動したい。水の確保など、野営にも人手があればあるほど良い。

年号鬼全力回避。ぶっちゃけ俺には勝てる気がしない。狐面は懐に隠してある。錆兎の死亡フラグだが、一年後の事だ。頭から除外する。

予備刀。一応自分のは研いでは来たものの、古いのでいつ折れるかわからない。今までの選別に落ちた人間の刀が一本位残ってるだろうし、それを拾っておく。

よし、安心！

んなわけないだろ早くお家に帰りたい。鬼ってリアルで見たことないけどどんな見た目してんだろうか。SAN値大丈夫かな。正直今もゴリゴリ削られてるんだけど。

「皆様、今宵は鬼殺隊の最終選別にお集まり頂きありがとうございます
す」

白髪で丸い目の女性がどこからともなく現れた。

産屋敷あまねだ。御屋形様のご内儀。時透無一郎をもつてして「白樺の精かと思つた」なんて言わせしめた人。

いや、白樺は無いだろ。チヨイスが謎過ぎるよ時透くん。せめて花で例えようよ、なんで木なんだよ。

「最終選別は、この山で七日間生き残ること。七日目の朝に、再びこの広間へお集まり下さい」

産屋敷あまねは深々と頭を下げた。

「それでは皆様。武運長久をお祈りしております」

空気が張る。俺は呼吸を使い、足に力を込めた。

こういうのは勢いだ。最初が大事なんだ。

力を一気に放つ。そして前へ——行かなかつた。

「ゲェ!!」

首が勢い良く絞まって苦しい、すごく痛い。と同時に服がはだけた。胸が丸見えになる。

こんなことつてある!?

たまたま俺を見た産屋敷あまねが顔を袂で隠す。最終選別で真っ先に半裸になったやつは俺が初めてなんじゃないかな、ウン。

俺を半裸にした主は、俺をヒョイと持ち上げた。どうやら襟を掴まれていたらしい。

足が宙に浮く。後ろにいるため顔は見えないが、背が高い事は確かだ。

「悪いな、いきなり止めて。直前まで迷ってたんだが、さっきの気配でお前に決めた」

ん?この声?どこかで聞いたことがあるような……。いや、そんなことより——。

重力で上衣が袴から抜ける。俺は完全に上半身裸になった。だからそんなことより——。

「俺は宇髓天元。お前、地味に強いだろ。俺と組め！」

効果音が着きそうなキメ顔に立ち姿。頭にはジャラジャラと宝石が付き、まさに派手の権化だ。いやでも、

「そんなことよりまずは俺に謝れよ」

主に俺の名誉に対して。

宇髓と流の藤襲山冬合宿

結局、俺は宇髓天元と行動する事になった。

「つまり、この選別の目的は『生き残る事』だ。別に鬼を倒す必要は無いし、逃げ回っていても構わない。要は最低限自分の身は守れる位になれよ、って事だな。それすらできない奴は任務の足を引っ張る」

宇髓は俺を見下ろす。

「ぶつちや俺がここで死ぬ可能性は派手に無いが、最低限の事はしとこうってワケだ。誰かと一緒にいるだけで死ぬ確率は段違いに減る。この山には雑魚鬼が集められているし、良い鍛練にもなるだろ？そこであのなかじやまあまあ強そうなお前を選んだんだ」

さすが未来の柱になる人間は言うことが違いますわー。俺がビビりまくってる間にこいつは超堅実な計画を立てていた。

そんなんだからお前『音柱って周りに比べて地味じゃね？』とか言われるんだよ。ハッ！

「一門、お前さんはどうなんだ？こう言っちゃあ何だが、初対面の人間を訳もなく信用するのはどうかと思うぞ？」

「別に、お前強いだろうし。良いよ。俺も誰かと一緒に行動する事は予定していた」

実際、宇髓天元は今回の選別に来た人間の中でダントツ一位に強いだろう。彼が居ればだいぶ安心である。いいやつだし。ケツ！

「お前、服を剥かれた事、まだ怒ってるのか？」

「別に怒ってなんかねえよ。全然普通だよ。俺超冷静」

なんだその哀れみの視線は……！！

数年後……産屋敷邸にて。

『お母様。最終選別の儀式は今年から私が行きなさいと、お父様が仰っていました』

『心して掛かりなさい。最終選別はとても過酷。追い込まれた受験者

が変態行為に走ることもあります。くれぐれも気を付けるのよ』

アーーーーッ!!!!

いや落ち着け流。平常心、平常心。

あの良妻賢母、産屋敷あまね様が子供の教育に悪いことを言うわけがない。俺の弱みを握るのは実質宇髄天元のみ!

宇髄天元を抹殺できれば俺の黒歴史は永遠に葬られる。

でも、どう考えても殺る前に殺られるわ。

「別に上半身をさらけ出したぐらい、大したことないだろ。逆にその位が派手でちょうど良い!!そのまま脱いでいるのはどうだ?」

「お前……今は十二月だぞ?」

寒いわ!

俺は素直にバカだなこいつと思った。

「で、さつきから何処に向かっているんだ?」

「どこって、川だよ。水が無きや死ぬだろ。お前バカか?」

……………。

「事前にこの山の地理は把握しているからな。取り敢えず水辺で今日は待機だ」

お前やっぱ地味だよ(褒め言葉)。

「作戦会議だ」

空が白んできたが、鬼が全く現れないので俺たちは警戒を解いてどっかりと座った。

そろそろ大丈夫だろうと、宇髄が火を着ける。あー暖かい。

「運が悪いことに俺らは全く鬼に遭遇しない。これじゃ時間の無駄遣いだ。仮眠を取ったら仕掛けに行くぞ」

「え、なに言ってるのお前」

「事前の調査で鬼が居るであろう洞窟、洞穴は確認済みだ。俺たちが

優位な昼にそこに飛び込む」

「アホだろ」

「穴に火を投げ込もう。そうしたら熱くて入り口に出てくるだろう。既に検証済みだ」

「え、ちよ、人の話を聞いて」

「ざっと入手した情報によるとこの山にいる鬼は五十体ほど……。一日十体、それで最終日は森の中心で派手に焚き火をあげる。残りの奴らはそれが集まって来るだろうな」

「お前、頭おかしいわ」

「そして朝焼けと一緒に祝砲だ！デカイ花火を上げるぜ!!そりやもう派手派手にな!!」

今までこんな計画を立てて最終選別に挑んだ馬鹿がいただろうか、いやいやない。

宇髄はビシツと俺に指を向けてウインクをした。

「もちろんお前も強制参加な」

俺、こいつと組むんじやなかった……。

冬合宿折り返し地点

「オラア!!奥に潜んでるんだろ?出てこいやあ!」

音の呼吸、壱ノ型・轟。

大爆発と共に宇髓は洞窟の入り口を叩いた。洞窟内では音が反響しなくなり、中にいる鬼はたまったもんじゃないだろう。

恨み事を口々に、ワラワラと俺達を殺しに来る鬼たち。鬼は普通群れないものだが、ここにいる鬼たちは一年に数度しか餌がない事もあり、少し習性が違うらしい。

響き渡る音は俺の頭をも揺さぶるが、正気を保って刀を振るう。

水の呼吸、肆ノ型、打ち潮。

二人の鬼の首が一太刀で吹っ飛んだ。

「水の呼吸は綺麗すぎて逆に地味だな!もっと派手な技は無いのかよ!」

「あるけど難しくて使えないんだよ!というかお前の技はもうちよつと地味に出来ない?俺の髪に何度火がついたことか!!」

「十三回!!」

「数えてんのかよ!」

二人で五体の鬼を斬った所で洞窟内が静かになる。

宇髓は爆竹に火を点けると念のために洞窟の奥に投げ込んだ。強大な音をたてて洞窟が瓦解する。

「よし、次いくか」

最終選別三日目、俺達は誰もが恐れる爆殺鬼狩りーズとなっていた。

宇髓が調べたという地図は正確で、行くところには必ず鬼が居り、俺達に襲いかかってきた。

いや、俺達が襲いかかったという方が正しいかもしれない。

宇髓の攻撃は全てが喧しく、周り(主に俺と土地)の被害が凄い。ド派手な環境破壊だぜ。

俺が何度髪に火がついて全身火だるまになりかけた事か、何度山火事がおきそうになった事か……。

途中から俺が鬼よりも火事防止に気を配り周辺の木を斬り倒していた事に宇髄は気づいて……いるな。ガン無視してやがる。

俺達があまりに派手に爆発をさせているものだから、何度か他の受験者も見に来たのだが、全員笑いながら鬼を殺す宇髄にドン引きして帰ってしまった。

俺は同類と思われていないから！思われて、無いよね？

「三日で三十五体討伐か。思ったよりも良い調子だな！よし、昼飯食って夜まで寝よう！」

何度宇髄と離れようと思ったか知れない。しかし、ぶつちやけ彼といると凄く安全なのは確かだ。野宿も手慣れているし、時間感覚がきっちりあるから互いに睡眠をしっかりとれる。忍びって凄いなだね。

「警戒頼む。おやすみ」

焚き火の横で毛布にくるまる俺、俺が二時間寝たら宇髄が二時間寝る。そういう約束だ。

太陽がガツツリ上がっているが、疲れた体は直ぐに俺を眠りへ引き込んでいった。

「起きろ！」

顔を思い切り蹴られる。痛い。

「山の天候は変わりやすい。霧が出て太陽が隠れた……鬼狩りの時間だ」

さっきまで太陽の下で爆殺しまくってた人間が何を言っているんだ。オールウエイズ鬼狩りの時間だわ。

「何時も以上に騒がしいな。警戒しろよ」

「耳が良いんだな」

俺は半ば察している。もうここまで目立つといて年号鬼が来ないわけ無いことを。どうせ見つければ殺されるのだから、覚悟を決めよう。正直このギャグテンションであれば乗りきれれる気がする。宇髓いるし。

懐から取り出した狐の面を眺める、狐の頬に雫の形の模様が彫ってあった。

「それは？」

「厄除の面だ。俺の先生が彫ってくれた」

「なんか雑な模様だな。地味地味だ」

人が気にしている所を抉るんじゃない!!

「お前、もしかして探してる鬼でもいるのか？さつきからキョロキョロしてるが？」

「どうしよう言っちゃう？でも言ったら確定エンカウントになるよな……。」

「もしそうなら別行動にするか？仇討ちは一人でしただろ」

「それはヤメテ」

一人にされたら死ぬ、何があっても死ぬ。

俺は息を吐いた。

「先生にたいそう恨みのある鬼がこの山に居るらしくてな……俺より先に最終選別に向かった人間が全員そいつに殺されているらしい。人を食いまくってるようだから、相当強いんだろうな」

「お前の先生何て言うの？」

「鱗滝左近次……」

この時の俺は疲れていた。何時もならこんな素直には答ええないし、今までの宇髓の行動からして確実に予測できていた筈なのだ。

「よっー」

宇髓は両足で確り立ち、全集中の呼吸を使った。

「鱗滝左近次の弟子がここにいるぞおお!!!」

遠くの方で、山の一部がズズツと動く。

「……………」

「でかいな。人を何人食ったんだろう」

「凄いな。良い経験になりそうだけ。けどお前に譲ってやるよ！」

俺はスタコラサツサと逃げようとする宇髓の襟首を掴んで思い切り後ろに引いた。宇髓の服が抜ける。

「お前も一緒に殺るんだよ！」

上半身裸の宇髓を俺は踏みつけた。

いまは何年？

走る。

俺は呼吸を整えながら手鬼の後ろに飛んだ。

水の呼吸、式ノ型・水車。

縦に振りかぶった刀は手鬼の頸にまわりつく腕を切る。落ちる腕に乗り、もう一度飛ぶ。

水の呼吸、壱ノ型・水面切り。

距離があつたためか、刀は頸の表面を削るだけだ。やっぱり硬いな頸。

「おお、狐の面だア……。今年も鱗滝の弟子が来たんだな」

手鬼はギョロリと目を回して俺を視認する。俺は数メートル離れて着地した。ガクブルである。

もう逃げる事は許されない。

「自分から挑んで来るなんて、勇気があるなあ！少年、今は何年だ？」
きつ、来たー！！奮い立て自分！

「今は、明治——」

アレ……。何年だ？分からないな……。やっぱり西暦の方が良いと思う。

「何年か知らん」

「ちゃんと答えろおお！！！！」

キレたあ！？数十本もの腕が俺に襲いかかる。

水の呼吸、参ノ型・流流舞い。

全てを見極め、切り落としていく。

腕の全てが遅く感じるのは、弟弟子二人との地獄稽古の成果だろう。人生で初めて二人に心から感謝した。

「イヒヒヒヒッ！！鱗滝の弟子は俺が全員食ってやるんだ！四肢をもいで、なるべく苦しませながらな！」

下品な笑い声を無視して、呼吸を維持させる。今俺がやるべき事は時間稼ぎだ。

炭治郎が一人で出来た事を、俺と宇髄が二人で出来ない訳がない！

数分前――。

「のろいな。地味にデカイ鬼だが、二人でやれば勝てない事はないだろう」

宇髓は上半身裸のまま、鬼を見て分析を始める。百メートル程離れている上に木々が邪魔してるため、俺は大体の輪郭しか掴めない。

いや、それより半裸の宇髓イケメンだわ。

「攻撃は手を伸ばす事、間合いは結構広そうだ。頸らしき所を手で守っているのも地味に面倒くさい」

手鬼がよく見えない俺に情報を教えてくれている。

それより俺は半裸の宇髓がイケメンである事に憤りを感じる。

「一門？聞いているか？現実逃避すんなよ」

「脱がした俺がいうのも何だけど、服を着てほしい」

宇髓のイケメンさはあの派手派手な服でイロモノ化する事により、抑えられていた事に俺は気づいてしまったのだ。

なにか言い様のない腹立たしさが胸の内に燻る。

「肌がピリピリしてて新鮮だ。気分が良いぜ！冬に裸も悪く無いな！」

「それ霜焼けって言うんだよ」

一気に胸の燻りが霧散した。宇髓の心は全然イケメンじゃないぜ。

「取り合えずお前が先に行って時間を稼げ。そうすれば後から俺が隙を作ってやれる。時間さえあれば簡単に頸を切る方法があるんだ」

十中八九譜面の事だろう。宇髓天元独自の戦闘計算式。

「俺、一人で戦うの？」

「大丈夫だ！お前は地味だが派手に強い！この俺が言うんだから間違いない！」

快活に笑って宇髓は俺の肩を叩いた。

「おっと、鬼が俺達の場所に気づいたな！まずは回り込むぜ。お前は左から行け！」

走り出す宇髓の背中に俺は声をかけた。

「それってどのくらいの時間がかかるんだ？」

「三十分だ!!」

「なつつつつが！長すぎるわ!!長いにも程があるわボケえ!!!」

「何分経った？」

口に溜まった血を地面に吐き捨ててぽろつと呟く。何度かかすつたものの、流流舞いでどうにか対応し続けていた。

宇髄はまだ現れない。宇髄の譜面の原理はいまいちよく分からな
いが、俺が戦闘をしてないと、情報を抜くことが出来ないのだろう。
もしかしたら流流舞いで避けるばかりではなく、こっちからも仕掛
けた方が良いのだろうか。

「ウロコダキイ……!!」

手鬼もなかなか死なない俺に鬱憤を募らせている。最初よりも襲
いかかる手の数が増えていた。

宇髄天元は俺の事を『地味だが派手に強い』と言った。見た目と
違って言葉には飾り気が無い宇髄の事だ。信じてみても、良いかもし
れない。

でもなー。

ここで俺の手数の少なさが仇となる。

俺の持つ技の中で一番威力が高いのは今の所、『式ノ型・水車』であ
る。しかしそれは縦回転の水車であって、頸を切るのには適していな
い。

次に『壺ノ型・水面切り』。炭治郎もこの技で頸を切っていた。

非常に不安だが、やるならこの技だろう。

もし切れなかったら逃げて一回休もう！

流流舞いを維持しながら手鬼に近寄る。手を梯子に数回飛び、頸に

近づく。

俺は息を吸い込んで腕を組んだ。

「水の呼吸、壺ノ型・水面切り!!」

鬼の頸を護る手が切れ、俺の刀が頸に食い込む。

「オオオオ!!!」

手を振り抜き、頸を切ろうとした瞬間。

——パキリッ。

刀が根元から折れた。呆然とする。

『刀を拾う? 派手に無理だと思うぞ。刀は遺品扱いだからな。最終選別が終わった後に回収される手筈になっている。研ぎ石なら貸してやるが』

俺が第一の錆兎になるのか……。

少し貧血で厨二病状態になってる！多分俺はシラフ
だったらこんな事を絶対言わなかった!!

水に溺れる感覚がする。

目に映る風景。感覚。これは、一門流が体験したことのないもの。

これは、誰の記憶だ……？

もしかして、これが……記憶による呼吸の伝承——、

『剣が折れたら鞘で、鞘が折れたら素手で！』 C.V. 悠○碧

あ、前世の記憶だわ。

「一門！しっかりしろおお!!」

爆音と共に筋肉を見せつける宇髓の存在で俺は一気に意識が覚醒
した。

右手で鞘を引き抜き、覆い被さるように迫る手を無理やり弾き返
す。

左手に残っていた柄を手鬼の目に突き刺して、俺は頭を飛び越える
ように宇髓の方へ抜けた。上手く受け身が取れずに足を痛める。

宇髓は転がってる俺を脇に抱えて一目散に駆けた。

「ごめんな。無茶させた。これは俺の采配が間違えていた。お前が死
ななくて本当に良かった」

「気にすんな……」

正直嫌みを言うほどの気力も無い。

死の危機に直面するのは初めてだ。たぶん、俺が見たのは走馬灯だ
ろう。

「周囲の人払いをするのに時間をかけすぎた。でもお前のお陰で譜面
は完成だ。本当は俺が奇襲をかけるつもりだったんだが、今ので手の
内がバレた」

人払いなんかしてたのか……。

「悪いな、すぐに助けられなくて」

宇髓のテンションが低い。俺が死にかけたのが相当心に来てるみたいだ。

「逃げるか？正直、今の刀を無くしたお前じゃ勝てる可能性は全く無い。もちろん逃げるなら最終日まで俺が責任を持って守ってやる」

男前だな。本当にいいやつだ。

死にかけたからこそ分かる。手鬼は本当に強い。

だから、錆兎じゃアイツに勝てない。

多分俺がこれから一年間どれだけ『自分の命を優先しろ』と言っても、錆兎はここに来たら周りの人間を庇うだろう。そして刀を折って死ぬのだろう。

そしてそれを基に義勇は自分を叱咤し叩き上げ、まさに原作のような『寡黙で、厳しいながらも人情に厚い水柱』となるのだ。

それが『原作』だ。

「宇髓はさ、後悔した事あるか……？」

「たくさんあるさ。俺は今までやってきた事を死ぬほど後悔して、今ここにいます」

俺は瞼を閉じた。

真剣を持って襲いかかってくる錆兎と義勇の姿が脳裏に浮かぶ。俺の知っているあいつらの表情は笑顔だ。

「俺、弟弟子が二人いるんだ。そいつらかなり危険で、俺の事嫌いまくってるし、実際俺も全然好きじゃないんだけど……。多分俺が逃げたら、そいつら死ぬんだよね」

錆兎が死んで、一人になる義勇を想像する。

確かに強くなれるかも知れない。でも、何かを犠牲にして得る強さに意味はあるのだろうか？

「そいつら親友同士でさ。どっちが欠けてもダメなんだ」

周りの人間を全員救うなんてアホ過ぎる。

けどそんな錆兎だから、優しくして正義感の強い錆兎だからこそ、助けたいと思うんだ。

「逃げないよ、俺。逃げたら一生後悔する」

「決まりだな」

宇髓がニヤリと笑った。

「刀なら貸してやる。絶対に折るなよ」

宇髓は背中引につかけていた二本のうち、一本を俺に寄越す。多分拾い物なのだろう。普通の打刀だ。

「さっき何で折れたか分かってるか？」

「刀を入れる角度を間違えた。俺は斜め下から刃をいれたが、それじゃあ手鬼の頭の重さで折れるのは明白だったよ。刃を滑らせるなら地面と完全に水平にするべきだったんだ」

「よし！譜面は完成した。俺が合図をするからお前が首を切れ！手も全部俺が切つてやる！」

満足そうに笑って宇髓が俺を地面に下ろす。

「俺は派手に首を切る事だけを考えていれば良いんだな？」

「そりやもう派手派手だ!!」

「行くぜ、相棒！」

「おう!!」

俺達は、一緒に駆け出した。

重ねて言うが、俺は変態ではない。

「仲間を連れてきたのかア？一緒に喰ってやるよオオオ!!!」
走る。

宇髓が先行し、伸ばされる手を切っていく。

「乗るぞー！」

その内の一つ、大木程の太さのある手に宇髓が飛び乗った。俺も追従する。

音の呼吸、伍ノ型・鳴弦奏々!!

宇髓が刀を体の前で回すと、手は全て爆散した。視界が晴れる。

「今だー！」

俺は宇髓の背中を蹴って飛び上がった。

「ウロコダキイイ!!!」

無数の手が俺を掴もうとするが、宇髓がクナイを投げるとそれらも爆発して散る。

「水の呼吸、壹ノ型——」

俺が手を交差したその時、手鬼と目が合ったとき。手鬼は笑いを浮かべていた。

「ヒヒツ!!残念だなあ、手はどこからでも出せるんだ」

手鬼の頭の後ろから一本、生える。

宇髓の援護は、届かない。俺が爆発に巻き込まれるから。

その手を切れば、体勢を崩して鬼に喰われる。

「一門!!!」

宇髓が叫ぶ。

俺は決死の思いで体を左に倒した。手がすれすれのところで髪をさらう。

「水の呼吸、貳ノ型——改!」

体全体と地面が水平になる。

今だ!

「横水車!!!」

体に乗った重力をそのまま利用するように俺は回った。

横水車は止まること無く、手鬼の頸を切り離した。

使いなれていない技だったが何とか成功して、安心する。

これ着地が上手く出来ないからなー。

下手したら首折れるからなー。

「あ……」

そう、今のよう高い所ですると、頭から地面に落ちるのである。

「あああああ!!!死ぬうううう!!!」

俺が叫ぶと地面が爆発し、俺は更に爆発に巻き込まれて吹っ飛んだのであった。

「大丈夫か?」

「宇髓が見える……」

目を覚ますと宇髓が覗きこんでいた。

「お前がなかなか起きないもんだから派手に焦ったぜ!」

太陽が上り、隣で宇髓が焚き火をしていた。魚を焼いている。

匂いにつられて俺の腹が音を鳴らした。

「食うか?」

「もらう」

上体を起こして魚を一つ手に取る。

「そっか俺、倒したんだ。手鬼」

「そりやもう派手派手にな!首が凄い勢いで飛んでいったぜ!」

宇髓は興奮しながら語る。あんまりに俺を褒めるもんだから少し照れ臭くなってしまう。

「宇髓のお陰だよ」

「その通りだ!」

いや少しくらい謙遜しろや。

ホクホクと魚を食べていると、上半身裸の宇髓が周りの木を切り始めた。

「夜用にやぐらを組むぞ、なるべくでかいのがいい」
「エ？」
「初日に言っただろ。最終日に派手に火をあげるって」
「俺身体中バキバキなんだけど」
「もちろんお前は安心して寝てて良いぜ！俺が守ってやるからな！」
「すごくいい笑顔で宇髄はのたまった」
「まず前提として鬼を引き寄せんのを止めろ」
「キャンプファイヤーには、誰も来なかった」

朝が来る。

産屋敷あまねは地平線から上がる太陽に目を細めた。
毎回、この瞬間は申し訳なきでいっぱいになる。
大勢の幼い子供が、山から帰ってこない悲しみ。
それでも送り出すしかない、鬼を見たことさえも無い自分。
その思いは母になってより強くなった。

——今年は何人残るのかしら……。
良くて五人、悪くて三人。

誰も帰ってこないなんてこともあった。

鳥居から人の声が聞こえてくる。

ドカドカと足音を立てて誰かがやって来る。

「頼むから服を着てくれ！本当に恥ずかしいから！」

「断る！派手で良いぜ！お前も脱げ！お揃いだあ!!」

「やめてええ!!!服を返せ！返せよ！」

この声は、初日に珍行動をした……

「ヨッシヤア！鳥居が見えてきたぜ！祝砲をあげるぞ！」

「これ以上俺の黒歴史を増やさないでくれ!!」

ぱーん!!

暁に大きな花火が上がり、半裸の少年が二人、鳥居を抜けた。

産屋敷あまねは、驚愕のあまりヘンな声を出してしまった。

——今回の最終選別。

受験者、二十三名。

重傷者、八名。

死者、五名。

合格者、十八名。

今までに無い、異例の合格率だった。

だからと言って鬼殺隊士になったのは結局三名で、いつも通りだったのだが。

この最終選別の逸話は後に一門流が水柱となった際、急速に（同期から隠になった者たちによって）広まる事になる。

やめてあげて！流のライフはもうゼロよ！

刀が届くまでの二週間編
テンゲンクエストV 天空の花嫁

鎧鳥とは、鬼殺隊の情報伝達及び隊士へのお目付け役として一人一人に支給される鳥の事である。

知能が非常に優れていて、人語を話し、理解する特殊な訓練を積んだ鳥達だが、それゆえに性格も千差万別。

好き嫌いが激しいものも多い。

まあ、なんとというかその……、鳥にだって主を選ぶ権利くらい有るわけで。

上半身裸で寄声をあげながら走る変態とかを相手にするのは、同じく変態な鳥なんだろう。

「ワタシハ、カラス。オマエノ背筋ガ気ニイッタ」

首を少し傾け、澄ました顔の鳥。いかにも出来る奴オーラが凄い。

「ワタシノ好キナ筋肉ハ細ク、シナリノアル筋肉。太イダケデハ品性ニ欠ケル。オマエハ子供ノワリニ見込ミガアル。ヨロコベ」

ツツコミ所満載すぎて最早付いていけねえよ。そもそも自己紹介から可笑しいよ。何だよ『ワタシハ、カラス』って。

「お、雌じゃん。めずらし」

「女の子かよ」

筋肉フェチが鎧鳥になった。

玉鋼を適当に選んで下山している途中、今まで一言も話さなかった鳥がいきなり言葉の爆弾を投下してきた以外は特に問題もなく、俺と宇髄は治療を受けるために麓の藤の家に来ていた。

どうやらそこで宇髄は嫁達と合流する事になっていたらしい。

「天元さまああ!!!無事で良かったですうう!!!」

「ガフツ！」

女将さんに案内されて部屋に向かうと、いきなり天井板が飛んで人が降ってきた。さすが忍び。予想の斜め上を行くぜ。

ちなみに『ガフツ!』というのは天井板が俺の顔にクリティカルヒットしたときの効果音である。

「煩いよ須磨! 宿屋で騒ぐんじゃない!」

穴が空いた天井からまた一人降ってくる。そのまま宇髓に飛び着き、宇髓の前に引っ付いていた女の子の頭を蹴飛ばしていた。

うるさい以前に屋根裏に潜むのってどうなん?

「おう! ただいま! 須磨、まきを!」

宇髓はニッコニコしながら二人の女の子を抱きしめた。

なるほど、未来の巨乳くの一は小さい時から巨乳なのか、これは良いことを知ったぞ。

「おかえりなさい。天元さま。ご無事で何よりです」

「雛鶴! ただいま!」

二人よりは大人びて見える少女が奥の部屋から出てきた。

この空間、俺以外の皆がイチヤイチャしている。

宇髓と三人の嫁達。

須磨。ドジっ子後輩タイプ。

まきを。ツンデレ幼なじみタイプ。

雛鶴。優しい先輩タイプ。

王道ヒロインタイプが全て集まっているハーレムだと……?

家では道場でガチに剣術に打ち込み、打ち込みすぎて友達すら出来ず。唯一話していた女の子が妹達である俺との圧倒的格差よ。

狭霧山? 野郎の巣窟だぜ。

「ところで宇髓さま。そこにいらっしやる方は?」

やっと気付かれた俺。人生初! 同年代女子との会話。第一印象は大事だ。

「俺は——」

「こいつは「一門」！俺のダチだ！最終選別と一緒に飯食ったり花火あげたり裸になったりしてた！」

うずいによる悪意なきはつげん!!

——流に1000のダメージ!

「裸?」

まきをによる変態を見るめ!!

——流に500のダメージ!

「て、てて天元さま!?!もしかしてそっちに目覚めちやったんですかあ!?!?!わたし、変装は出来ても性別は……ムリですう!!」

すまによるぶつとび思考!!

——流に1000のダメージ!

「え……。最終選別、合格、おめでどう……。ございます」

ひなづるはホイミをかけた!!

——しかし 流はアンデッドけいモンスターだったので たおれた!

俺は女の子が好きだ。決してそっち系ではない。

「へえー！じゃあ一門さんは最終選別中はちゃんと服を着ていたんですね！良かった……」

『最終選別どうでしたか？』と聞かれ答えたら、ご覧の反応である。手鬼の事とかも話したのよ？反応するのそこ？

服を着るのは人として最低限の常識であると思うのだが。

宇髓は今風呂に入っている。

「本当に大変だったんですね。ご苦労様です」

雛鶴さんの反応が心のオアシス。

大浴場なのに風呂の時間を宇髓とずらしたのも、一人の方が寛げるとかそういう理由だろう。絶対。

久しぶりにまともな食事を取り、寛ぎながら俺は足を包帯でぐるぐる巻きにされていた。地味に折っていたらしい。

普通に走ったりできるが、変に骨がくっつくとか大変なので二週間は絶対安静との事だ。

「大事にしてくださいね」

「ありがとうございます」

雛鶴さんは優しく微笑んだ。お姉さんタイプ、好みです。

俺が感謝を伝えると、少し声を潜めて話しはじめる。

「天元さまがご友人をお連れしたと聞いて、実はとても驚きました。あの人はいつも私達の事ばかりで、自分は二の次ですから。『友人』というのも実はあなたが初めてなんですよ？」

宇髓天元、実は友達のいないリア充だったことが判明。

「そうそう。わたしも驚きましたー。天元さま、里を抜けてからずっとわたしたちの安全確保に奔走していましたからね。鬼殺隊の選別を受けたのも、もちろん鬼から人を助けたいっていうのもあったんですけど、組織に属する事によって立場を安定にするという目的もあってですねー」

「須磨っ！」

まきをさんが咎めるような声を出した。里とか、あまり初対面の人間に話しても良い内容では無いのだろう。

「故郷には同じ年の人間がいなかったんですか？」

「いるにはいるんですけど……私たち、少し特殊な事情でして。友人とかは、あまり歓迎されるものではありませんでした」

雛鶴さんは悲しそうに目を伏せた。

「だからとても嬉しかったんです。あなたの様な人が友となってくれて。ご迷惑をおかけするかもしれませんが、どうか夫をよろしくお願いします」

なにを言えはいいのか困ってしまう。

そもそもボツチの理由がかっこよすぎるんだが。

『実は俺もずっとボツチだったんです。周りからなぜか遠巻きにされていて、旦那さんと同じですね（笑）』とか絶対に言えない。

というか出会いの状況からして、俺が友達になってもらったという方が正しい気が……。

やっぱり変態でも宇髄は根っから優しい奴なんだな。

「あ、雛鶴さん！今すぐく奥さんぽい事してる！わたしからも夫をよろしく願います！」

須磨さんが慌てたように割って入って俺に頭を下げた。なんかなー、この子だけ宇髄の娘感すごいよね。

「旦那の事……よろしく」

まきをさんがデレた。『旦那』と敢えて言葉を変えている。

「随分仲良くしてるな」

ホクホクと湯気のたっている宇髄が上機嫌で襖を開けて入ってきた。

「一門、明日帰るのか？」

「ああ。歩いて一日かからない位だし、明日の朝に出るよ。向こうには既に伝えてある」

「狭霧山だよな。少し遠回りになるが俺達も着いていくぜ。足、痛めてるだろ？」

やだ宇髓優しい。嫁達から溺愛されているのも、悔しいが納得だ。

——その頃、狭霧山にて。

「錆兎！流が明日帰ってくるって！先生が言ってた」

「良かった。流は最終選別に受かったんだな！よし。明日、早く起きて手順を確認しよう」

「うん！俺は先生と作った罫を確認してくる。猪とかが掛かってたら可哀想だし」

「俺は型を最後まで練習する」

錆兎は水色の刃に反射する己の顔を見つめた。

「水の呼吸、捌ノ型・滝壺改——濁流。俺はこの技で、明日こそは流から一本取る！」

戻ってきた勘違い！流は実家に帰りたいたい！

「流、狭霧山ハ今や魔ノ山トナツテイル。決シテ油断スルナ……」
昨日の夜、文を届けて帰還したおつうちちゃん（鏝鴉）の言葉がよみがえる。

響き渡る獣の叫び。

俺が出発した時には絶対に無かった罫の数々。

——狭霧山って、こんな不穏な気配がする魔境だったっけ……。

「これは……故郷のからくり屋敷を思い出します」

「死亡率六割を越えた修羅の山が他にもあるなんて……」

「一門さん。あなたも相当厳しい訓練を積んでいたんですね」
顔を真っ青にして俺を見つめる宇髄の嫁達。

「一門。頑張れ」

今までで一番神妙な顔で宇髄が肩に手を置いた。

鱗滝は小屋の外に人の気配を感じ、扉を開けた。
「先生。ただいま戻りました」

扉の前で、一門流が疲れながらも笑みを浮かべる。

ああ、帰ってきた……。生きて、戻ってきた。

「お帰り、流。よく戻ってきてくれた……」

鱗滝は流を抱きしめた。流は少し驚きつつも小さく声を出して笑った。

この子はこんな風に笑う事もあるのかと意外に思う。弟子達を見て、小さく笑みを溢す事はあっても、あまり人前で感情を表に出さない人間であったから。

しばらくして流を離す。

「先生。すいません、刀を折ってしまいました……」

流は頭を下げた。

流が刀を折る。それほどの相手は藤襲山にはいない筈だ。流の剣技は水の呼吸をしつかり掴めている。

「山で何があった？」

流は俊巡し、言葉を紡いだ。

「鬼を切るときに、刃を入れる方向を間違えてしまいました。俺の不手際です」

嘘では無いが、何か隠している匂いがした。

——最終選別中、流は誰かを庇って刀を折ったのでは無いか？

そんな考えが鱗滝に浮かんだ。

今年の死者が異常に少ない事は、鱗滝の聞き及んでいるところにある。

流は弟子達の中でも頭一つ抜けて強かった。守る為に鬼殺隊を指す心優しい子だ。そんなことがあっても不思議ではない。

しかし流はそれを『己が未熟だから』と思い、口にしない。

これ以上尋ねるほど鱗滝も野暮ではない。

「そうか。とにもかくにもお前が無事でよかった」

流はホツとした顔を見せると居間に上がった。

「あの、先生……これは？」

「その文は錆兎と義勇からだ。あの子達も、お前が居ない間に鍛練を重ね、より強くなった」

兄弟子の存在がどれほど彼らの礎になっただろうか。

義勇が罫の作り方の教えを乞うてきたのも、流のあり方に起因している。

『流が言っていたように、俺も誰かを守れるように強くなりたい。その為には俺が出来ることは何でもしたいです』

鬼に全てを壊された義勇がこの言葉を言った。義勇は大きく変わったのだ。過去を受け入れ、前を見つめた。

過去に拭いきれる深い悲しみや怒りがあったとしても、大切なのは今だ。

復讐心で鬼を滅する者は早々に身を滅ぼす。

流は一人でいることが多かったから気づいていなかったかも知れないが、罨のいろはを習得した義勇は訓練用の仕掛け作りも出来るようになってる。

特にここ数日は凄い。

そろそろ彼らが流から一本取る日も近いかもしれない。

流は文を開き、目を丸くする。

本当に表情を見せる子になった。

何か良い出会いがあつたのだろう。

いつも孤独であるかの様だった流を変えた『誰か』に鱗滝は感謝した。

とうとうこの日が来てしまったか。

錆兎と義勇からという文を開いて俺は他人事の様思った。

『山頂の訓練場にて待つ』とだけ文には書いてある。

これ絶対果たし状だわ。とうとう本気で命を取りに来たんだ。

なぜか俺の方を向いて幸せオーラを出している先生。俺、先生にも嫌われてた感じ？さつき『無事でよかつた』つて言つてたじゃん。あれは嘘なんか？

しかし思い返せば納得できる事が多々ある。

型を全て修めてないのに最終選別に送り出したこと。

錆兎と義勇に真剣を持たせて俺を襲わせたこと。

襲われた俺は容赦なく二人をボコボコにしていたこと。

極めつけは『最終選別に行け』と言つた時だ。

何の脈絡もなく言われたが、あの時俺は錆兎と義勇をぶん殴つていた。最早稽古でもなんも無かつたのである。

当時の俺は嫌われる為に色々努力をしていたが、全て悪手だった。

もう宇髄にダチ認定されたから『原作キャラに関わらない』もなにも無くなつたが……。

だが、優しい先生はそんな俺を見て、とうとう我慢できなくなったのだろう。

俺を合法的に抹殺しようとし、それでもしぶとく生き残ったので、訓練中の事故に見せかけようとしているのだ。

いきなり増殖した罫も暗殺計画の一つに違いない！

俺は新しい刀を断りを入れてから手に取った。

体がガタガタの今、訓練場に行くのは止めた方が良いのだろう。しかし、寝ている間に殺られれば抵抗もできない。

——今までの事を謝ろう！そして、すぐに山を出て実家に帰ろう！

藤の家で隊服と日輪刀を受けとれば問題無いだろう。

今の俺はもう鬼殺隊士と言っても良いし、家の敷居を跨げるはず。というか久しぶりに妹達に会って癒されたい。殺伐し過ぎなこの世界の数少ない平和を数日くらい堪能しても、バチは当たらないだろう。

流覚醒

「ようやく来たか……」

鑄兎はまっすぐに流を見据えると刀を抜いて立ち上がった。

夕焼けを反射して刃が赤く光る。

「最終選別合格おめでとう。流」

義勇も鑄兎の横に立つ。

「この日を待っていた。貴様が七日間いなかった間、一度も俺は貴様を忘れた事はなかった……」

「俺もだよ……鑄兎、義勇」

流も刀を抜き、刀を平正眼に構える。鑄兎は驚きに目を見開いた。

流はいつも鑄兎と義勇より先に剣を構えることは無かった。彼らに襲われれば正当防衛として地面に転がす事はあっても。

鑄兎は歓喜する。

自分たちは今、やっと彼と同等の弟子として認められたのだ。

「鑄兎……」

義勇は鑄兎と目を交わした。二人の心は通じあっている。

小手先は無しで、お互いの本気をぶつけあおう——。

義勇は訓練場にある仕掛けを一切放棄する事を今決めた。相手が己を認め一人の人間として相手をしてくるのなら、己もまた相手に敬意を払わなければならない。

これは稽古ではない。

純粹にこれまでに修めた剣技を競う、大事な試合だ。

「勝負は一本、寸止めで行う。この石が落ちた時が開始の合図だ」

鑄兎は石を投げた。

石が回る。

そして地面に着く。

しかし、流は動かない。

「ごめん。鑄兎、義勇——」

「どういう事だ！流！」

錆兎は慟哭した。

「何故だ！何故俺と戦わない!？」

あろうことか。一門流は刀を下ろし、横に開いたのだ。

それは試合において、構えを解く、すなわち試合を放棄する事を意味していた。

「勝負は一本。寸止めで行う。この石が落ちた時が開始の合図だ」

え……？

どうやら、俺は別に命を狙われているわけでは無いらしい。

今まで彼らに酷い事をしてきたぶん、安心がどつと迫る。

実を言うと……手鬼の時に走馬灯を見て以来、俺は自分の信念に疑問を感じていた。

俺は今まで自分が生き残る為に『水の呼吸』を修めてきた。

しかし手鬼の強さを目前にして、錆兎は勝てないと確信したとき、言い知れようのない喪失感無力感に襲われた。

このままで良いのか？

自分の命だけ守って一人で生きていくのか？

今なら分かる。俺は周りを捨てて一人生きていけるほど、心の強い人間ではない。

自分が転生者という特殊な立場で誰にも言えない秘密を抱えているから、周りの人間と隔絶されたような感覚をずっと持っていた。

どれほど親に愛されていても、妹に構われていても俺はどこか他人を見つめるような目で見ていたし、もちろん友達なんて作る気も起きなかった。当たり前前だ。前世の家族も友人も俺はすっかり覚えていたのだから。

どうしても生に執着したのも、無意識に前世の人と会える事を期待していたからかも知れない。

でも、最終選別で宇髓が俺を変えた。

人生で初めて心の底から笑って、叫んで、全力を出した。

第一印象は思い出したくも無いが、宇髓が俺の壁を無理やり壊した。そして俺と一緒に命をかけてくれた。

そうして俺はやつと『周りの人間が俺という異常者を好きになるわけがない』という思い込みを壊す事ができる様になった。

今まで意固地になっていたかも知れない。

錆兎と義勇は別に俺を殺そうとしていない。稽古が俺からしてみればもの凄く危険に見えていただけで、これが普通だったのだ。

先生も普通に指導して、下手したら半殺しものの稽古をしていただけである。

鬼殺隊士になることがどれほど危険であるか、身をもって体験させていただけだ。

気づくのが遅すぎたかもしれない。でも気づけて本当に良かった。

よし！

錆兎と義勇は本当に本気を出せる試合を望んでいる。

なら俺も万全に体調を整えて臨むべきだ。

試合開始の合図が出たが、俺は構えを解いた。

「ごめん。錆兎、義勇——」

「何故だ！何故俺と戦わない!?!」

——俺骨折してるから試合は後日してくれない？

という言葉は錆兎の怒鳴りに掻き消された。

ええ……。

「流はやつと俺達を認めてくれたんじゃないのか！あれは俺達の幻想だったのか!?!」

それはどんな幻想だ。

どうしよう……錆兎がすごく怒ってる。

「錆兎!?!」

コミュ障じゃない富岡義勇が錆兎の手を掴んだ。

「流をよく見るんだ！全集中の呼吸を維持し続けている……。流は試合を放棄したんじゃない！」

うん？

「流は敢えて刀を下ろした。あれは、あの構えは……。新しい型の構え！流は拾壱ノ型をうみ出したんだ!!」

いったいお前は何を言っているんだ富岡義勇！

藤襲山にて昼も夜も鬼の頸を切っていた流、肺が発達し、さりげなく『全集中の呼吸 常中』を獲得す。

勘違いキヤツチボール

「流は拾壺ノ型をうみ出したんだ!!」

親友の言葉に鑄兎は目を剥いた。

鑄兎は流を見つめ、警戒を高める。

流は構えを解きながらも、確かに全集中の呼吸を続けている。目を閉じ、集中を高めていた。

「すまない……試合を続けよう」

鑄兎は相手を侮辱しかけたことを詫びた。一方で、己の未熟さが露呈した事に齒噛みする。

流は身動き一つせず、その場に佇んでいた。あまりの緊張に鑄兎は攻めあぐねる。

どう見ても、鑄兎には流が何もしていないようにしか見えないのだ。

やはり流は強い。別次元に彼は立っている――。

鑄兎の額から汗が流れる。

「構えていないからこそ、何を狙っているか分からない……。さすがだ、流。水の呼吸の『柔』を極めている」

水とは、どんな形にも変化する。そして水の呼吸とは、それを表す『柔』の剣。

真に極められた水の呼吸において、対応出来ない技など存在しない。

師の言葉が蘇る。

たった数分の緊張が、鑄兎の精神力をかつてない程に削っていた。

流が目を開ける。

来る――!

鑄兎は身構えた。

しかし流は緊張を解いて、静かに語り始めた。

どうしよう。多分俺はとてつもない勘違いをされている。

俺は驚愕している錆兎と義勇を見た。俺も驚愕してる。

整理しよう。

俺は目を閉じた。

俺、試合を中止するために構えを解く↓錆兎怒る↓義勇がとんでもないことを言う↓みんな驚愕（イマココ！）

どういうことだっばよ!?

気づいて、勘違いしてるよ！義勇はドジっ子なんだよ！錆兎、騙されるな！

「すまない。試合を続けよう……」

ああ!!

「構えていないからこそ、何を狙っているか分からない……。さすがだ、流」

ああああ!!

「水の呼吸の『柔』を極めている」

ああああああ!!!!なんとという、勘違い!!

錆兎、お前なら分かるはずだろう。俺が何もしていないことに！

クソツ！落ち着け、俺！思考を止めるな！そうだ、恥じらいを捨てて勘違いを解くんだ！

俺は錆兎を見据えた。

錆兎の顔は今までにないほどに緊張し、俺に訴えかけるような熱い視線を送っている。

隣には、この状況を作り出した究極のドジっ子、富岡義勇。

瞬間、俺の頭に電撃が走る。

もしかして、錆兎は義勇の心を傷つけない為に、空気を読んでこの状況に乗っている……??

そうだ、それしか考えられない！

優しい錆兎はどう見ても俺が何もしていないことに気づいている

が、親友の心を案じて全力で演じているんだ。そうでなければ試合中に饒舌になつたりする訳がない！

熱い視線は『空気を読め』という錆兎なりのアピールなのだ。急速に頭が冷えていく。

俺は拾壱ノ型を扱う強者を演じればいい。

今ここで必要なのは、対話だ。

まずは義勇を褒める所から始めよう！

流は静かに語り始めた。

「よく氣づいたな……義勇」

義勇は緊張を解いた流を見て、安心した。

やはり俺の考えは間違いでは無かった――。

つつい勢いで言ってしまったが、義勇の推測は正しかったようだ。

「全集中、水の呼吸 拾壱ノ型——『凧』。これがこの型の名前だ」
なぎ、義勇は口の中で転がした。自然と馴染む感覚がする。

錆兎は構えを維持しつつも、流の言葉に耳を傾けている。

「何をしていたか、分かったか……？」

「していた？」

既に技は成されていた？信じられない、何も見えなかった。

錆兎も同じように驚いた風だった。表情が変わる。

「分からなかったか。だが、それでいいんだ。今は理解出来なくても、もう少しすれば俺のしていたことが何なのか、分かるはずだ」

流は微笑んだ。

流が笑っているところを、義勇は初めて見たように感じる。

「それを理解した時、俺の『凧』がどれほど完成から遠いか分かるだろう」

流の使った拾壱ノ型は、まだ完成していないのか。

義勇は呆然とする。

流には勝てないのはもちろん、錆兎にだって負け越してる。義勇は

今ここにいる三人の中で一番才能が無いのを自覚していた。

でもそれが止まる理由にはならない。

だからこそ、先生や近隣の猟師に罠の作り方を教えてもらい、義勇なりに高みを目指していたのだ。

それでもこの領域は、あまりにも高すぎる。

「この『凧』はお前たちが完成させるべき技だ……期待しているぞ、鏑兔、義勇」

義勇は溢れてくる涙を袖で拭った。

結局、試合ではなく稽古になってしまった。そしてこの稽古は、狭霧山での最後の、流との稽古だ。

流は、義勇と鏑兔に、初めて自分から高みを示して激励した。

兄弟子からの深い愛情に、義勇は嗚咽をもらした。

キャッチボールは終わらない。

どうしよう。義勇が泣いてしまった……。

俺がとんでもないデタラメを言っている事に気づいたのだろう。そして自分の失言と、周りのフォローに耐えられなくなってしまうたに違いない。

すすり泣いている義勇から俺は目を離せない。というか錆兎が恐すぎて見れない。

『お前何義勇泣かせてんだよ、フォロー下手すぎだろ（意識）』

的な事を考えているだろう。本当にごめん！俺、友達出来たの一週間前だし……慣れてないんだよ。こういうの。

もう無理。錆兎に任せた!!

俺は二人に背を向けた。

俺がここから去れば二人きりになり、錆兎がどうにかして義勇を慰めてくれるだろう。親友だもんね、君たち。

「待て、流！」

ホワア!?

錆兎に鋭い声で呼び止められ、足を止める。錆兎は刀を構えて、俺に突進していた。

無意識に錆兎の刀を弾き返したが、錆兎は攻撃を止めない。

え？試合続いているの？それとも義勇を泣かせた恨み？

「お前がたとえどれ程の高みにたどり着いていたとしても、俺は足を止めない！必ずお前にたどり着く！」

「錆兎！」

お前——。

なんとという役者精神!!あくまで俺は義勇の事を信じているぜというスタンスを保ち続けている!

そうだ、俺は何を諦めていたんだ。

富岡義勇が言った事は全て正しいと、俺たちは演じ続けなければいけない。

例え道化になっても親友の心を案じる錆兎に俺は深い感銘を受けた。

俺も全力で錆兎に答えよう！

「ならば示せ！お前の強さを！いずれたどり着くというのならば、それを証明しろ！！」

自分の言っている事がハチャメチャだが、強キャラを演じるのならば少し理不尽なくらいが良いだろ！何か楽しくなってきたぞ！

錆兎が攻め、俺は守る。

たまに攻撃を挟むが、錆兎は全て軽くかわす。

鏝迫り合いをし、俺の力に押されつつ錆兎は後ろに飛んだ。

器用に木を蹴り、上段の構えをとりながら、今度は空から襲いかかる。

「分かった!!流、刮目しろ！」

錆兎の呼吸音が一段と大きくなる。

「え、それ」

『滝壺』の構えやん!! やっぱガチなの！俺がしくった事怒ってるの!?

「これはお前が居ない間に作り出した、俺だけの技!!」

まさかの新技!?俺は錆兎の刀に水の青ではなく、茶色い濁りを幻視する。

「水の呼吸！捌ノ型改！」

あれは……、土石流？

「滝壺——濁流!!!」

錆兎の刀を受けた俺の体が、かつてないほどに軋む。その力は今まで受けた錆兎のどの滝壺よりも、強い！

圧倒的な衝撃！あまりにも強すぎて、受け流せない！！

「うおおお！！」

錆兎は雄叫びを上げて、力を込め続ける。

俺の足が地面にのめり込んだ。常なら『流流舞い』を繰り返すところだが、骨が折れて足さばきが満足に出来ない。

てかこれ、斬鉄するんじゃない？刀が折れたらそのまま脳天がかち割られるぞ。

俺は力を入れたまま、持ち手から左手を離して刀の峰を押しえた。左手に刀が食い込み、とても痛い、両腕を開く形で刀を支える。

そうして両足に力を入れ、上半身を前向きに傾けて、全力で錆兎の刀との接地面を――ずらした。

ボキリ。

骨が砕けた音がする。

だが、重心をずらされた錆兎は刀を持ったまま車輪の様に回転して、俺の体を越えて後ろの繁みへと突っ込んだ。土埃で錆兎の姿が見えなくなる。

俺、九死に一生を得たり。

俺の足は完全にひん曲がっている。

義勇はいつの間にか泣き止み、口に手を当てていた。めっちゃ俺の事を見ている。

「さすがだ。錆兎……」

錆兎を讃える。

ここで錆兎が『フツ！貴様こそ、なかなかやるでは無いか』とか言ってくれば、いい感じに試合が終わって皆で山を下れる。

土埃が晴れた先には、白目で気絶している錆兎の姿があった。

ちよっ、おま、マジかよ……。

ここで気絶は無いんだけど。俺死にかけたのよ？何でお前が気絶すんだよ。

ハアー……強者ロールプレイなんて一生やるもんか!!

チベスナ錆兎

結局、足の骨が砕けたので歩くのにも一苦勞し狭霧山で二週間を過ごす事になった。

瞑想をしていつの間にかできてた『全集中の呼吸 常中』の精度を高めたり、素振りしたり、弟子達の稽古に口を出したりしてたらあつという間に時が過ぎ、刀鍛冶の人が狭霧山に来た。

先生は俺の隣に座り、錆兎と義勇は玄関からその人を観察している。

ひよつとこ面をつけたその人は鋼山銘鉄というらしい。結構なお爺さんだ。

「これがお前さんに打った刀じゃ……抜いてみいや」
箱から一本の刀を出して、俺に持たせた。

藤の花を彫った丸い鉄鏢に、青い紐が巻き付けられた持ち手。正銘、俺の日輪刀だ。

息を飲む。伍ノ型までしか使えない俺には、本当に水の呼吸は合っているのだろうか。

俺はすらりと刀を抜いた。縦にして、刀身を見つめる。

「おお……」

そう洩らしたのは誰か。

俺の刀の刃は根本からじわじわと深い藍色に染まっていった。

ヨッシャアア!!!

内心、盛大なガッツポーズを取る。藍色とか、すごいカッコいい。どうだ見たか弟子らよ。

「さすがじゃな。一門の男の子なれば、記憶の遺伝もあるのじやろう

……」

「え?」

え?..それ、一年前に聞いたやつ……。

『記憶による呼吸の伝承』てガチにあんの? 親父のでまかせじゃないの?」

「あと、お前さんにこれを」

俺の困惑を他所に鋼山さんはもう一本、刀を差し出した。

「お前さんの同期の村雲宗治という女の刀じゃ。居場所が分からんのでな。お前さんの次の任務で一緒になるというから、渡しておくれ。くれぐれも抜いてくれるなよ……」

「はい」

むねはる？ 最終選別の時に居た女の子か？ ものすごい男みたいな名前だな。

宇髓と俺を見ても表情一つ変えなかった事くらいしか覚えていない。

「頼んだぞ……」

ヨボヨボしながら鋼山さんは帰っていった。

錆兎と義勇はいつの間にか先生に追い出され、小屋には二人だけになる。

「流、これからお前はそのまま任務に行くのか？」

「いいえ。一度家に帰ってから、向かう予定です。任務は一週間後になると思います」

「そうか……」

先生は少し間を開けた。

「お前は同年代の中でも優秀な男だ。これから危険な任務に赴いても、必ず生き残るだろう。ただ、辛くなったらいつでも狭霧山に帰ってきなさい」

「先生……！」

「先祖の記憶を持つお前は確かに周りから浮くことも有るだろう。だが覚えておいてくれ、儂は流を錆兎や義勇と同じように大切に思っている。例え孤独を感じても、自ら周りを拒絶する必要は無いんだ」

「先生……!?!」

「行つていー!」

先生が背中を押す。

持つてるのは先祖じゃなくて前世の記憶です！

というか俺は孤高に振る舞っているように見られてたの？ 厨二病を無意識に再発してしまつたの!?! 中学時代に『俺は周りとは違う

ぜ』って言ってクラスで浮いたの人生最大の黒歴史なんだけど!!
というより地味に『記憶による呼吸の伝承』なんていう謎設定が有名になっていくのだが。絶対知られたら面倒臭いことになりそう。
唐突な言葉の衝撃がヤバイ。

「流!」

外に居た義勇が駆け寄ってくる。

「俺達、来年には最終選別受けて、鬼殺隊に入るから!それまでたくさん修行して、絶対に『凧』を習得して見せる!」

いや、この前の『凧』は記憶から消していいから。というか先生の前で言わないで、絶対。

俺は誤魔化すために義勇の頭をぐしゃぐしゃとかき混ぜた。

ついでに遠くでチベツトスナギツネの顔をしている錆兎が目に入る。

——え……?なにその顔……?

「流、俺は頑張る」

錆兎はそれだけ言うのとちと山へ向かった。

錆兎のチベスナ顔が頭に焼き付く。一瞬頭が真っ白になった。

「流、元気でね!流は強いから、絶対大丈夫だけど!」

義勇が大きく手を振った。お前は錆兎のチベスナ顔が気にならないのか?

「義勇。ありがとな」

俺はチベスナ顔を頭から追いやった。

「錆兎も!!」

大声を出して錆兎に呼びかけると、錆兎はいつもの表情に戻っていた。

「武運長久を祈る!!」

そう一言叫んで、山へ走っていく。

元気になったららしい錆兎に俺は満足して、鏖鴉の後を走って追っ

た。

流、心労がすごい編 帰宅

少女は孤児だった。いや、最近孤児になった。

貧しいながらも兄弟が沢山居て、幸せであつたのだ。しかし、その幸せは1日で壊れたのだ。

ある日、町にお使いをして家に帰った。家は山の中にあつて町から遠かつたから、もう既に辺りは真つ暗になつてしまつていた。家には灯りがついてなくて少女は不審に思つた。賊でも入つたのだろうか？震える体を必死に抑えて窓から様子をこっそり伺つた。

そこにいたのは――、

「もう言わなくていい。それは十中八九鬼だ」

女は言葉を遮つた。少女の肩を優しく抱き寄せ、背中をさする。

「この世には鬼が存在する。闇夜に人を喰らう化け物。辛かつただろう……お前の家族は不幸にもその化け物に会つてしまつた」

少女は嗚咽を洩らした。家族が居なくなつて数週間、食べ物も録に食べれず盗みをしようとした時に会つたのが、この鬼狩りを名乗る女だった。

「私は村雲宗治。お前は？」

「真菰……」

腰に古い刀を差し、長い髪を一つに結び上げた女の年は十六。本来ならばまだ子供ともいえる。しかし月を背に立ち上がった女の姿は凛々しく、風に山吹色の羽織をはためかせる様はまるで狼を思わせる。

さつきまでこの女が下着姿になつて崖から海へ飛び込みをしていた事などすっかり忘れ、真菰はその姿に見惚れたのであつた。

俺ってば方向音痴なのかも知れない。

行きには数日かかった狭霧山。帰りは半日で家に着いた。

おつうちゃんが先行して飛んでくれるから、俺は付いてくだけで何も考えずに歩いていたが、朝出発して昼過ぎにつくとか……。

「ワタシニ話シカケルナヨ。変ニ思ワレルゾ」

去り際に注意までしてくれる俺の鎧鴉、すこぶる優秀。遠目に見かけた人の筋肉を批評するのはやめて欲しいが。

帰ってきたなあー。

家の門に立って、感傷に浸る。中から元気な声が聞こえる。道場で稽古をしている最中なのだろう。俺の今の立ち位置ってどうなってるんだろう。

自分の家に入るタイミングを掴みそこねてうんうん唸っていると、後ろに気配を感じて振り返る。

「兄さん？」

後ろには将来有望そうな美少女が呆けた顔で立っていた。

えーと、どっち？

「ただいま。妹」

「攸花ですー！」

双子の妹ズの下の方、攸花ちゃんは俺の手を掴むと、ずんずんと門をくぐった。この双子、本当に顔が似すぎて母親しか見分けられないんだよね。喋ればすぐ分かるけど。

「お姉ちゃん！みんな！兄さん家出から帰ってきたよ!!」

聞き捨てならんのだが。

俺って家出した事になってるの？マ？

どう考えても家を追い出されたんだけど。

「もう、兄さんが家出してから本当に大変だったんですからね！お父さんは『流は鬼狩りになるんだ』なんて意味分かんない事を言ったりして」

あ……（察し）

「で？一年間何をしていたんですか？」

「修行」

お願いだ妹よ、そんな心底蔑むような目で俺を見ないでくれ！

るる剣にありそうな展開（笑）

「なんだア、テメエ……、俺達に喧嘩売ってんのかあ？」

「こんにちは☆おっすオラ一門流!!今すごい柄の悪い兄ちゃん達に喧嘩を売っているぞ！」

……………。

どうしてこうなった。

家に帰ったら『流家出からお帰りなさい祝賀会』が開かれ、俺の日輪刀を見た露葉ちゃん（上の妹）がぶっ倒れたり、何やかんやあった。お祖父様には家出をめちやめちや怒られたりしたが……いやそもそも家出じゃないんだけど。あらゆる説明を求めてオトウサマの元へ向かったのである。

「なんか刀持ってたし、どうやら鬼殺隊士になったようだな」

オトウサマは家族に説明する努力はしたらしい。しかし、どうにも最近周りからナメられて信じて貰えなかったようだ。なにそれワロタ。

オトウサマから俺は家の厳しい現実を知らされた。

「半年前に道場破りが来てな。抵抗したんだが、破られた。それ以来、門下生が三人に減ってしまい、非常に苦勞している。家計が傾き、娘たちも頑張って稼いでくれるが、どうにもな……」

「まじかよ」

思わず素が出てしまった。この父親無能じゃね、って思った。

一門は曲がりなりに地主の家であり、道場だけで稼いでいるなんて事は決していない。実際、俺も小さい時にお祖父様からそういう説明を受けていた。

「土地はあげた。だって農民可哀想だったんだもん」

だったんだもん、じゃないんだけど。優しい理由なら何でも許されると思うなよ。妹たちはまだ十三なんだぞ、なに働かせてるんだ。と
いうか三人残った門下生って俺、露葉ちゃん、攸花ちゃんの三人だろ

うが。

遠回しにクソ親父を非難すると、親父は一言「すまん」と言った。

「だから道場の再興をするために道場破りをした奴らを蹴散らして『一門古流剣術』を宣伝しつつ、看板を取り返して来てくれ」

看板取られたんかい!!!

妹たちが働いている分、何もしないのも気が咎めた俺は、一門の家紋をデカデカと書いた羽織を着て、道場破りのすみかに突撃していた。こんなことして本当に大丈夫なのだろうか、隊服は着ていないが隊律違反じゃなからうか。というか仮に看板を取り返せたとして、後からまた復讐されないかがとても心配。

ここらへんは昔から剣術が盛んな地域で、一門古流剣術道場以外にもいくつか道場があったらしいのだが、全部潰されてしまったみたいだ。道場破り達の中には地元出身で、それらの道場の門下生だった人間も複数まぎっているらしい。三十人程の集団だ。最近では破る道場もなくなり、夜中に酒を飲んで周りの人に無体を働くこともある、と。警察もんじゃないか。

教えてくれたお婆さんも孫がそいつらに混ざって悪さをしている事に悲しんで涙を流していた。

明らかにヤバめの集団に一人でカチコミは、正直言うと本当にやりたくない。相手は呼吸を使えないから強く無いんだろうけど、逆にこつちが背骨とか折って重傷を負わせて仕舞うかもしれない。木刀とはいえ、充分に凶器なり得る。

そもそも鬼を倒す為の技術を人に使っているのか相談すると、

「呼吸ハ常人ノ力ヲ倍以上ニヒキアゲル。受身ノトレナイ人間ニ使エバ、木刀トイエドモ危険ダ。オススメハシナイ」

との事だ。使っても良いけど力加減は相当難しいとのこと。

「圧倒的ナ差ヲシメシテ、降伏サセルノガ最良。カー！！」

圧倒的な力って何をすれば良いんじゃない。

だがしかし。

「貴様らが、昨今巷を騒がせている輩か……！近所の方々への迷惑行為、許せん!!この瀬戸内海の風雲児、村雲宗治が叩き直してやろう！」
うだうだしながら移動すると、道場破り達の住みかの前で、鬼殺隊の隊服を着た女が仁王立ちで啖呵を切っていた。この子、隊律って知ってる？というか法律って知ってる？

昼日中に刀を抜くってどういうこと……。

よく見たら同期の子じゃん。本当に俺の同期やべえ奴ばっかだな

!!

どゆこと!?

「よくない風が吹いていると思えば、嘆くお婆様にお爺様。恥を知れ!!」

「公衆の面前で刀を振り回してる奴に言われたくない!!」

まあ結果的に言えばどんちゃん騒ぎ。もちろん仲裁しようにも出来るわけが無いし、新人と言えども呼吸を使う鬼殺隊士にそこらの人間が勝てる訳がない。

この女も刀を逆手にして一応は峰打ちをするつもりらしいが、刀なんて切れなくても鈍器として十分な活躍をする。呼吸込みの一撃なんて死人が出るかもしれないのだ。流石に人殺しはヤバイ。

「なかなかの腕前!だが何故罪無き人をいたぶる!」

「俺はお前を止めようとしてるだけだ!」

俺は道場破りどもを背に、村雲宗治と戦っていた。

道場破りどもは一部気絶、一部傍観、気合いのあつた者は逃げ出している。戦意を喪失している相手に刀を向ける意味がない、と村雲を止めようとしたら敵認定されて今に至る。木刀を持っていたのが悪かったのかもしれない。

「そいつらからは悪い風を感じる!今にでも叩き伏せるべきだ!」

俺は村雲の刀を捌きながら思考を続ける。峰とはいえ、鉄に対して木刀で挑んでいるのだ。いつか折れるだろう。

村雲は振り方自体は雑だが、体力が底なしだ。ずっと全力で刀を振っているのに、全く疲れる気配がない。

「悪い風ってどういう事だ!」

というか、さつきから何でも風に例えて話すのこの子。意味が分からない。

「悪い風は悪い風だ!私がかこれを感じた時は絶対に何か良くないことが起きる!」

村雲の力が一層強くなる。あ、やべっ。

「風の呼吸、伍ノ型・木枯らし風!」

木刀が折れる。薄緑の刀の峰が、俺の脳天に直撃した。

ばたんきゅー……。

「おい皆ー！一門の兄貴が起きた!!」

田中は一門流がうつすらと目を開けたのを見て、仲間に叫んだ。仲間達が駆け寄る。

「すいやせん、兄貴！俺たちが不甲斐ないばかりに……!」

田中が代表として頭を下げる。

一門は布団から体を起こすと、無表情に周りを眺めた。田中と同じ年だというのに、一門は幼い頃から纏う風格が違った。子供の時はその姿を恐れ、遠巻きにしていた田中だが、今なら分かる。その風格は人の上に立つ者として備わっていたものだ。

「頭をあげろ」

一門流はここいらでは知らない者が居ない程の天才だった。十三で実家の師範代を倒したのはもちろん、他にも年齢僅かにして言葉を話し、尋常小学校でも常に成績は一位で、人々はその才を妬みつつも将来を楽しみにしていたのだ。

しかし、一門流は常に一人だった。余りにも成熟していた為、大人でさえも彼には付いていけなかったのだ。

(実際はコミュ力の低さの為です)

実家の師範代を倒し、風の様を消してしまったと聞いた時、田中は絶望した。一門流は周りの程度の低さの為に家を出ていってしまったと分かったからだ。それは田中にかけて経験したことのない悔しさを生んだ。

田中は自分を鍛えた。農作業の傍ら毎日木刀を握り、自分を叩き上げた。全ては一門流と並ぶ為である。

一門流が消えた一門道場は活気が無くなり、田中と同じ様に人から学ぶ事をやめて自分で鍛える者が増えた。心を同じとする人間は意外にも多く、お互いに稽古をつける事もあった。

そんなある時、一門の道場破りをしようと言った誰かが言った。

言われた当初、田中は訳が分からなかった。何故尊敬する一門流の

生家を侮辱するような事をするのか。それを言った人間を田中は詰った。そいつは田中の親友とも呼べる間柄であった。そいつは泣きながら言った。

『一門家は、流さんを捨てた』

一門家は戦国から続く由緒正しい家である。その家が代々継いできた土地をそこらの農民にあげ渡したというのだ。田中もそこらの農民に入っていた。

代々継いできた土地を手放す——、それは一門流に何も相続させないとの意図のあらわれだろう。一門家には他に男児がおらず、家を継げる者が居ない。つまり、一門家はこの代をもって断絶することを選んだのだ。

田中は激怒した。必ず現当主を懲らしめなければならぬと思った。

田中達は最低限の礼儀として、まず周りの道場の看板を奪い取った。田中達に勝てる人間は誰も居なかった。

一門家に行った時、道場には当主しか居なかった。

『看板は渡すから、娘達には何もしないでくれ』

当主は何も持たずにそう言って頭を下げた。田中は熱が急に冷めるのを感じた。ただ、聞きたかった。

『何故土地を明け渡した？』

当主は何も答えずに、頭を下げ続けていた。

その頭を踏みにじろうとする奴も居たが、田中はそれを止めた。

そのあとは皆燃え尽きていた。何をしようにもやる気が起きず、町に繰り出しては酒を飲んで酔っぱらっていた。

本当に愚かな事をした。田中は反省する。

田中達を叩きのめした女の言っていた事は何も間違えていない。

約二年ぶりに見る一門流が、一門家の羽織を着て、歩いて来た事に田中は感激し目が覚めたのだった。そうだ、一門流は俺たちの予想を遙かに越える人間だ。

そして一門流は田中達を守り、負けてしまったものの、木刀で真剣に立ち向かう偉業を成した。

田中は目蓋に熱が込み上げてくるのを必死に抑える。

一門流に比べて己らのなんたる小さな事か。今までしてきた悪行、到底許されるものではない。

「本当にすいませんでした!!」

「俺に謝っても仕方がないだろう……」

看板を奪い取ったというのに一門流は田中達の事を気にしていないとする。

「俺達は今まで迷惑をかけてきた人全員に謝りたいと思います。でも、それでも俺達を助けてくれたあなたに」

「なんの事か分からないな」

「気遣いは無用です。この人間はかつて、一門家に仕えた者の子孫です。そんな俺達が一門の看板を奪うなど、謀反と同じ。斬首も甘んじて受け入れたい!」

「いや、なんの事か分からないな……」

「寛大なお心で、許して下さいるのですね……」

田中は不器用ながらも、何度も許す一門流に涙ながらに礼を述べた。後ろにいるものたちも、田中と同じようにしていた。

村雲宗治という女

村雲宗治は鏢にてをかけながら夜の町を疾走していた。手には血のついた羽織の切れ端を持っている。

血のおいといふのは普通、風に流されて消えていくものである。しかし村雲は血のおいが消えずに、ある一点へと糸のように繋がっているのを感じていた。俗に言う、血鬼術というものである。

この力は普通の人間には無い、彼女特有の能力。彼女には周りの空気の揺れ、淀みを感じる力を持っていた。風のように見える事から彼女自身はそれを風と呼んでいる。

村雲は中国地方の小さな村で育った。父は元鬼殺隊士で、鬼殺隊に入る為上京し、鬼狩りをしていた。彼はかつて知り合いを鬼に殺されていた。

しかし、鬼殺隊は主に鬼舞辻無惨の動向を探って関東を中心に行動するため、地方の鬼は見過ごされるといのが現状だ。その事実に落胆した彼は実家に帰り、漁業の傍ら鬼の噂を聞けば狩りに行く仕事をしていた。

西の地方は関東に比べて鬼は少なく、弱いものばかりだったので問題はなかった。

村雲はそんな父の元で剣術を学び、父と共に鬼を狩った——とはいえそれは二度しか無かったが。村雲の母は物心つく前に他界していた為、村雲は男手一つで育てられた事になる。

彼女の口調が全く女らしくないこともそれに起因する。

ある日、父は病にかかった。彼は自分が居なくなつた後の村雲を案じて言葉を残した。

『俺はお前を一人にしてみました事を大変悔やんでいる。鬼狩りなどは本当はなるべきではなかったのだ。普通の女としての幸せを与えてやれなくてすまない』

当然、村雲は反対した。

『父上、そんなことを言わないで下さい。私は鬼狩りになつて良かったと思います。この性格では村の女のように身を着飾ることも家庭

を持つことにも生きがいを感じることは無いでしょう。私は貴方が居なくなっても貴方の意思を継ぐつもりです』

父は涙を流して娘に感謝した。

『ならば東京に行き、藤襲山の選別を受けて鬼殺隊に入りなさい。一人で居てはいつか必ず破綻する。志を等しくする友を作りなさい』
『それが父上の望みであれば』

村雲は鬼殺隊なるものが一体どういう仕組みなのかは露程にも知らなかったが、父に言われた通りに藤襲山の選別を受けた。『鬼殺』という文字から鬼を殺す組織なのだなくらいにしか思っていなかった。隊律の存在も知るはずがない。

刀は父の遺品があるし、鬼の場所は持ち前の力で分かる。ならば鋼も鴉も要らないだろうと思ひ、進行役の女性にそれを伝えた。

女性は何かを言わんとしていたが、村雲はすぐに山をかけ降りてしまったので分からない。

隊服だけは黒服男に渡され着用しているものの、生地が硬く、動きづらいので嫌いだった。

そして鬼に家族を殺された少女に会い、そこに残っていた羽織の切れ端から二週間、鬼を追い続けていたのだ。

鬼の風は本当に微妙であったが、村雲は昨日やつと居場所に当たりをつけた。それが件の道場破り達の溜まり場である。近所の人々もだいぶ迷惑をこうむっていた様である。許すまじ、鬼。

鬼がいる、と言つても誰も信じないから『悪い風』と言葉を濁したが、相手は立ち入りを拒否。しかしそこで怯んでは被害が拡大する。そうして村雲は心を痛めつつも強硬突破した。

「あの男、なかなか手強かったな」

村雲は一人ごちた。道場破り共に一人だけ優れた者がおり、そいつに手こずっていたらいつの間にか日が暮れて鬼を再び見失ってしまったのだ。はて、何処かで見たとような気がしたが……。

起きたら周りの奴らが頭を下げてて意味が分からぬンテイウス。

とりあえず反省していたみたいなので、実家の看板だけ貰って帰ろうとしたら『弟子にしてください！』と頭を下げられた。たぶん元は心優しい剣道少年達だったのだろう。こいつらも。最近の刀はオワコンブームに心が挫け、非行に走ってしまったに違いない。

ならば一門道場に来い、とだけ俺は言った。宣伝出来たぜ。

ところが意気揚々と帰路についた所、おつうちちゃんがスピンをしながら俺の眉間を刺したのだ。

「アホカオマエ！コレダカラ新人ハ！今オマエガ守ツテイタゴロツキ共二鬼ガイタノダゾ！！鬼殺ノ妨害、隊士同士ノ私闘！立派ナ隊律違反ダ！！ワタシガイナイ間ニ……！ハヤク鬼ヲ追エ！！」

「鬼の気配なんて全然感じなかった！きつと物凄く強い血鬼術を使うに違いない！！」

おつうちちゃんの言葉に間髪いれずに返し、故意でないことを主張する。

初任務でやらかしてしまった。俺、斬首かな。斬首じゃなくても先生に伝わったら怖すぎて裸で逃げ出す自信あるのだが。

俺は実家に急いで帰り、隊服に着替えて刀二本を持ち、全力疾走した。

おつうちちゃんに連れられたのはとある雑木林。

そこに地面から死体を掘り出す鬼がいた。

戦闘開始

鬼が人を喰っているところを初めて見た。

ソレは、地中に埋めて泥だらけになつていた死体を掘り出すと、丁寧に泥を払う。死体には首が無く、あたり一体に腐臭が漂った。

あまりの刺激臭に俺は吐き気をこらえて、刀を握りしめた。汗が滲むのを感じる。呼吸が乱れている。落ち着け、俺。

これはひどい。ひどすぎる。

家族を鬼に殺された人間が鬼に怯えて生きるのではなく、鬼狩りになる理由が分かった気がする。恐怖を越える怒りが人を突き動かすのだろう。

呼吸を整えろ。藤襲山を思い出せ。鬼を殺すのは初めてではない。

一步踏み込む。土を蹴って跳躍。刀を抜いて構えた。

——水の呼吸、肆ノ型・打ち潮。

鬼の頸を狙って放った刀はしかし狙いを外す。鬼の姿が霧の様に掻き消えたからだ。

「血鬼術!」

俺は直ぐ様その場から飛び退いて周囲を見渡した。鬼は消えた。気配は少しも残っていない。

殺気を感じ本能的に刀を振るう。見えない手に弾き飛ばされるようにして俺は地面に転がった。

どうやって倒せばいい!?

何も見えない、頸の場所が分からない。攻撃には対応出来てもジリ貧だ。逃げられても気付けない。何度も殴られ、切り付けられる。かろうじて致命傷は躲しているがこのペースでいけば数分の内に動けなくなりそうだ。そうしたら死ぬ。

何か対策はないのか。姿が見えなくても、反撃する方法は。

村雲は足を引きずりながら山の中を走っていた。体のあらゆる場所が裂け、血が流れている。鬼の爪でつけられた。

村雲は焦っていた。相手の血鬼術が予想以上に厄介であったからだ。

それは『姿を消す』というもの。ただ見えなくするだけでない、存在そのものが認識出来なくなる。

例えば家族一つを喰ったとしても、周りには気づかれず、鬼狩りに見つかっても簡単に逃げる事ができる。村雲の能力をもつても死角からの攻撃は対応し難く、不覚をとった。

唯一隙があるとすれば、攻撃直前の殺気など、強い気配は僅かに感じとれるところか。

村雲は自らの能力でもって風を掴み、相手を斬る事ができたが鬼の攻撃が止んだのを見るに、逃がしたのだろう。

回復の為に人間を喰うかもしれない。だが、どこにいるか分からない。

先ほどまで使っていた方法は既に使えなくなってしまった。手ばかりの布を戦闘中に落としてなくしてしまったからだ。

村雲は歯噛みする。

このまま山の中を探し続けるか、町に降りて鬼を待つか。

町は空気が淀んでいるため、鬼を探しにくい——誰かが喰われるかもしれないという時にそんな事は言ってられない。

「鬼ハ北東ニイル、馬鹿女」

「誰だッ!!」

村雲は視線を巡らせる。そこにいたのは一羽の鴉だった。

「オレハオ前ノ鏖鴉ダ。アマリニ動キ回ルモノダカラ探スノニ苦勞シタゾ」

「私は断った筈だが……」

「先ホドノ問題行動ニヨリ取り消サレタ」

鴉は呆れた様に羽を伸ばした。

「俺たち鎧鴉ハ特殊ナ訓練ヲツンデイル。故ニ鬼ノ場所モワカル……
早ク動ケ、北東ダ」

鴉は静かに言うど飛び立った。

村雲は黙って鴉の言った通りの方向に走り出した。

サゲポヨ流

俺って意外と弱いかも……。

鬼に切られ過ぎてあらゆる所に傷ができる。血が流れる。意識が朦朧としてきた。

手鬼倒して調子乗ってたけど、よく考えたら宇髄いたし。最終選別の時は宇髄が先行して警戒してくれてたから、俺は鬼を斬るだけよかった。かろうじて錆兎と義勇には勝ってたけど、それは剣術歴の長さというか、むこうは年下だし。

極めつけは鬼に気付かなかったこと。後ろにいたのに分かんなかった。

そういえば水の呼吸も全部使えないわ。『捻れ渦』とかどういう原理？なんであんな水が見えるの？

体捻るだけ？うそーん。

考えれば考えるほど雑魚い理由が出てくるぞ。俺、初任務で死ぬんじゃない？

貧血で頭を持ち上げることさえ億劫だ。がくんと首を下ろしてしま。あーもう考えるのもダルい。『見えない』って強すぎでしょ。どうして癸の隊士に血鬼術を使える鬼をあてるのか。

なんか砂煙でもたてれば形が見えるのか？ってここ森やーん。

……本当に思考が馬鹿になってきている。

とりあえず俺は刀を振り上げて積もっている枯れ葉を飛ばそうとしたが、出来なかった。ついでに鬼の攻撃が当たる。藍色の刃が少し、暗くなった。

ん……？影？

鬼は焦らず、じつくりとこちらをいたぶってくる。何も音を発さないのは能力か、それとも警戒心が強いのか。

思考を一旦止め、平正眼に刀を構えて月明かりで刃を照らした。そのまま横に振る。何かを斬った感触。

「ギャツ!!」

そうか！鬼は月明かりで影を落とす！

地面は暗くて影が判別出来ないが、刀は光を反射するから分かる。

よし、このまま頸を——!!

切れるワケないじゃない。近くに來たら大体の位置が分かるだけなんだけど。

とりあえず刀をぶんぶん振り回して反射光を確認し続ける。

次は、左斜め後ろから！

水の呼吸、壱ノ——。

「危ない!!風の呼吸、壱ノ型・塵旋風——削ぎ！」

ものすごく強い風が俺を巻き込んで吹っ飛ばす。枯れ葉が顔に勢いよく当たって痛い。チクシヨウまたこいつかよ！

怒りで頭が逆に冴えてくる。そもそも俺は刀を振るう鬼殺隊士から一般人を守っただけで、責められる謂れは無い。

「大丈夫か？」

「大丈夫じゃない。お前は少し周りを見ろ」

村雲宗治、暴走女。やっている事は正しかったとしても、やり方が雑だ。

「む……？」

「心底不思議そうな顔をするな」

首を傾げて俺を見つめる村雲。

「一般人に刀を向けたり、呼吸を使ったり……危険過ぎるだろうが」

「むう……。だが手加減はしたぞ、誰も骨を折っていないハズだ。それに、鬼があ的小屋で食事を始めていたら全員死んでいた！」

一理ある、が呼吸はやり過ぎではないか？

「それに！お前に言われたくない！」

村雲は俺に指をさして高らかに言い放った。

「思い出したぞ、お前！最終選別の時に裸で全力疾走していた同期その二だろう！見ていて不愉快だったんだ!!」

エ”…………。

まさかの黒歴史で正論を叩き返された。

そうか、表情は変わって無かったけどやっぱり変態に見えてたんだ…………。俺の中のムカムカが萎んでいった。

なんとというか、すごい…………シヨック…………。

「構えろ！裸同期その二！」

「その呼び方は止めて」

「明日への道を諦めるな！裸同期！」

「止めて下さい」

「風になれ！裸!!」

「俺が悪かったです。だからその呼び方は止めてください」

村雲は再び技を放ち、枯れ葉を巻き上げた。枯れ葉が動く鬼に張り付き、鬼の形が露になる。

「いいな！枯れ葉を私は巻き上げるから、お前はその鬼の形が分かった瞬間に頸を切れ！」

俺は刀を持って立ち上がろうとしたが、すぐに体を傾けてしまった。血を流しすぎた。

「傷が深いなら寝てろ！私が一人でやる！」

こんな奴に氣遣われる俺って…………やっぱ弱いわ。グスン。

(偶然です)

大変不愉快だ。

村雲は膝をついている裸同期を眺め、刀を握った。

守ってやったのに人に文句を言う、礼儀がなっていない、そもそも変態の癖に私に常識を説いてくる。それに足手まといだ。

だがしかし見捨てるのは忍びない。

村雲は同期を背にして風を起こした。

風が吹けば枯れ葉が舞い上がる、見えずとも実体を持っている鬼は枯れ葉に当たる。そうして姿を確認しろ——そう村雲に助言したのは生意気な鴉である。好きになれそうにないが、言っている事は尤もだ。

鬼は長い戦闘で大分消耗している。そして、今村雲の背には絶好の餌となる瀕死の人間がいる。そしてこの場所は町から離れている。

ならばやることは一つだ。

村雲を殺して、または掻い潜ってその人間を喰う。

「風の呼吸、肆ノ型・昇上砂塵乱！」

前に竜巻を起こして鬼の姿を確認する。かなり距離が近い。

「式ノ型、爪々・科戸風！」

前方へ四連の同時斬撃。鬼の手が現れ、地面に落ちる。

直ぐ様横に薙ぐが、頸には当たらない。

追撃に備えて再び風を起こす。どうやら鬼は村雲を殺す事を優先したようだった。

体を感じる。血管の細部まで意識して血を止めるんだ。

俺は目を瞑って集中した。

全集中の呼吸を用いた止血法。俺はそれを試していた。

俺が今動けなくなっているのは出血のせいである。このまま止め

なければ失血死の可能性が出てくる。それに村雲宗治だけに戦わせ
ては必ずガタが来るだろう。彼女も足を引きずっているのだから。

例え暴走女といえども、殺してやりたいほど恨んでいない。それに
守って貰っているのだ。俺が動ければ勝率が上がる。

起きろ、動け！自分を叱咤する。弱い事を嘆いても、俺が死ぬだけ
だ。

でも、できないんだけど……。

炭治郎みたくに体がホワアってしない。というか風の呼吸が煩す
ぎて集中できない。

煉獄さん！『集中』おでこピツ、ていうの俺にやってください！
俺の方が年上だあ……。

出血量を抑えられても止血ができない。動いたらすぐに集中が切
れそう。難しい。

村雲はよく戦っているが、どれも決め手にはならない。

俺も主人公補正が欲しい。心なしか勘違い補正がある気がするが、
正當に強くなりたい。

「ぐっ!!」
村雲が呻き声を上げた。枯れ葉は村雲を踏みつける様に上から降
る。

「村雲!!」

村雲は刀で上からの攻撃に歯を食い縛る。だが、鬼は村雲をそのま
ま攻め続けるのではなく、村雲の頭を飛び越えて俺の方に流れてき
た。

え……。

俺は血が流れるのも気にせず、刀を持ちながら伏せの態勢から仰向
けに体を転がした。刃に鬼の影を写すため、少し斜めに傾ける。

（ひとり）。

信じられぬ物を見た。

村雲は驚きに目を見開いた。そこには息を荒げて仰向けになる同期と鬼の頸。

鬼に襲われ喰われるかと思いきや、同期は体を翻して頸に刃を入れ、そのまま抜き取ったのだ。血鬼術が解け、姿を現した鬼は憤怒の形相を浮かべながら塵となる。

偶然か？これは。

寝返った瞬間に見えない鬼の頸を切るなんて事、狙ってできるわけがない。だが、村雲は見てしまったのだ。男が寝返りながら剣筋を調整する所を。

必然であるならば、それほどの腕前ということ。しかし、この同期は今まで倒れていただけで、強いとは思えない。

もしや……自身の身を囚にして、頸を切った？

それならば辻褄が合う。切り傷だらけなのは鬼を油断させ逃がさないため、そして鬼の行動を分析するため。首を晒すように伏せていたのは、鬼がまず首筋に噛みつくために顔を近づけると知っていたから。

そうして鬼を誘き寄せて頸を切った。

しかし自分の命をかけるには、大博打すぎる。

呆然としている村雲の耳に知らない声が響いた。

「凄いですね。寝返りのついでに頸を切るなんて」

「誰だッ！」

村雲は直ぐ様振り向き、鏢に手をかけた。全く風を掴めなかった。

「こんばんは、村雲宗治さん。私は雨柱、白津湯渦桃といいます。貴女は鬼殺隊の隊律をご存知でしょうか？」

「隊律……？」

白津湯は村雲を静かに見据えた。

「ご存知ありませんでしたか。鬼殺隊に所属する以上絶対に守るべき規則。無辜の民を守るための規範です。そして貴女が破ったもの……。貴女は昼間、一般人に剣を振るい、それを止めようとした彼にも攻撃しましたね？それは立派な隊律違反です」

「だがそこには鬼がいた。あの時行動を起こさねば逆に食べられていたかもしれない」

そうですか、白津湯は言葉を区切った。

「でも、少なくとも貴女が隊律を破った事は確かですから」

村雲は意識を手放した。

朝

「大丈夫ですか？出血多量で死にかけていた事、覚えてます？」

目を開けると眼鏡をかけ、いかにもインテリ風の男がいた。柔和な笑みを湛えて俺を上から覗きこんでいる。

視線を巡らせると、障子から光が透けているのが分かった。太陽だ。

俺は鬼と戦っていて、貧血になって、殺されそうになって……。わかんねえな。

「意識がまだ朦朧としているみたいですね。ゆっくりで良いですよ、自分の名前を言ってください」

「敬介……」

ふと頭に思い浮かんだ名前を口に出す。

「やっぱり混乱してますね。もう少し寝ていた方がいいかもしれません」

「あ……一門流です」

うっかり前世の名前を口走ってしまった。

「丁寧にも。私は水柱、加賀見道鏡といいます」

「み……水柱」

柱って感じがあまりしない。何か細かいし、年も三十くらいだろうか？

いや待てよ。なんで水柱なんか居るんだ。んん？

「ここは鬼殺隊の首領たる方、産屋敷輝哉さまの御邸宅です。貴方は先日の村雲隊員への証人として呼ばれました。裁判が始まる前にいくつかの質問に答えて頂けますか？」

「裁判、ですか？」

村雲といえば、思い付く事は一つしかない。

「はい、柱合裁判です。村雲隊員による暴力事件。それを直接見た貴方の口から伺いたい。鎧鴉達はよく見ていなかったそうなので」

おつうちちゃん、だからあんなこと言ったのか。確かに夕方は食事の為に俺から離れる。鬼を見かけた上で気絶した俺と周りの発言から

推測したんだろうな。

「あなた達はまだ若い。それに常中を会得していることから、才能もあります。私としては彼女を隊から追放したくありません。ただ……」

「反省してないんですね」

追放したらかえって周りに迷惑かけそう。だから困っているわけだ。

「いいえ、自分のしたことに対しては反省の態度を見せました。一晩たつて頭が冷えたみたいで。今は隊律をひたすら紙に写しているでしょう」

地味にすごいな、それ。

「ただ、貴方に会わせて欲しいと頼まれているのです。構いませんか？」

村雲宗治は沈んだ表情で隊律をひたすら書き写していた。持ちなれていない筆を持つ事も苦痛だったが、一門流というらしい同期の男が目覚まさないのが一番の理由だ。

村雲の横では白津湯という五つほど年上の女が違う書類を作成している。お館さまへの定期報告だと言っていた。ずっと考えていた。自分の行為の正当性について。

最初こそは迷いなんて欠片も無かった。鬼がいるかもしれない。別になんか、周りの人に迷惑をかけていた悪漢ども。

別にそんな人間、力づくでねじ伏せても良いではないか。そう思っていた。

『貴方一人ならそれで良いかもしれない。だけど鬼殺隊の隊服を着るからには、規律を守りなさい。ただでさえ私達は力があるのです。秩序がなければ鬼殺隊は鬼を殺す為になんでもする無法者集団と化してしまいます』

確かに、規律を守る事の意味は理解した。守る事に異論はない。でも何故一門流があそこまで怒ったのか村雲には理解出来なかったのだ。

やはり私が特殊な出で立ちだからだろうか——村雲は思索する。

村雲はまともな育ち方をしていない。母がいなかったから父に男のように育てられ、漁をしながら刀を振るった。

『たとえ私がいなくても生きれるよう、強くなれ』

父の口癖だった。村雲は父の教えを何より尊んでいたし、実際に強くなった。

でもこれが普通ではないことを村雲は知っている。

父が死の間際に残した後悔の言葉。『普通の女として育てていれば』、という言葉はもしかして村雲が父の思う通りに成長できていなかったからなのか。呼吸を教えた事を悔いていたのか。それとも私の力ではなく、それ以外に問題があったのか。

答えてくれる人間はいない。

人と関わる事が無かったから、人の目を気にするなんて事も無かった。

ただ父に言われた通りに生きた。

鬼は人を喰う、だから鬼を殺す。喰われたら、悲しいから。そんな人間を減らすため。

村雲は自身が人の為に鬼を殺していると思っていた。同時に人に悪行を働いている人間も鬼とほぼ同列に見ていた。さすがに殺しは不味いと分かっていたけれど。

何度考えても一門流の思考が理解出来ない。あれほどの技術を持つのに、命を擲つような行動をしたことも。

本人に直接聞いてみよう、と思った。

壁の向こうに小さな風が生まれる。

「村雲さん、一門隊士が目を覚ましましたよ。貴方に会うとの事です」

襖を開いて現れた男に、村雲は緊張しながら頷いた。

お前ら!! 派手に不評だった村雲事件に一段落つくぞ
!

村雲宗治が緊張した面持ちで部屋に入ってきた。明るい場所から顔がよく見える。俺は上半身を起こした。

「まず、最初に謝罪をしたい。私の隊律違反に巻き込み、ここに連れてきてしまい申し訳なかった」

村雲が膝をつき、静かに頭を下げた。拍子抜けてしまう。マジで反省したのか……。

俺も一応命を救われたのだから、顔を上げるように言う。村雲は黙って言われた通りにした。

「お前に会いたいと思ったのは、どうしても聞きたい事があつたからだ。何故私があのだ場破りどもに刀を抜いた時、あんなに怒つたんだ？あの場合には鬼がいた上、道場破りどもは悪人だった。規律を犯していた、という理由だけではないのだろうか？」

村雲は眉を潜めている。

こいつ、本当に分からないんだ。俺がどうして怒つたのか。

「私は亡き父の教えの通り、生きてきた。鬼殺隊に入ったのも父に言われたからだ。幼い頃から呼吸を教えられ、人とは違う生活を営んできた。鬼は人を苦しめるから殺さなければいけない。ならば人を苦しめる人は鬼と同列の存在ではないのか？そう思っていたんだ」

確かに筋は通っている。でも、そこには決定的な間違いがある。

「だから道場破りどもを叩いた事も後悔していなかった……。だが、お前は怒った。なぜなんだ？私とお前の違いは何なんだ？」

今、村雲は心の底から心情を吐露している。ならば俺もふざけた事は言えない。なるべく村雲が納得出来るように話さなければならぬ。

「俺は『人を喰わない鬼』がいたら、殺さないと思う。そして、何人も人を殺す人間がいたら、殺すと思う」

空気が揺れた。鬼殺隊の本拠地たるこの場所で言うのは、相当な馬鹿なんだろう。部屋の隅に佇んでいる柱二人の気配が変わった。

村雲は伏せがちだった目を大きくした。

「なぜなら俺の戦う理由が守る為だからだ。家族、友人、幸せに暮らす人々、その人たちを脅かすものを俺は殺したい」

「お前が鬼を殺す理由は分かった。では道場破りどもは？あいつらは確かに人々を脅かしていた」

「それはまだあいつらに許しの余地が会ったからだ。人間は誰でも間違いを犯す。でも、反省してやり直せる生き物だ。あの道場破りどもだって泣いて詫びてたよ」

本当に何でか分からなかったけど。

「それにあいつらは確かに迷惑だったけど、一線を越えてはいなかった。まだやり直せるならば、しかるべき贖罪をもって許すべきだ」

「許し……」

口で説明するのは難しいな。でも多分こういうこと。

「お前の父はどうしてお前に普通とは違う生活を送らせたんだ？」

村雲は黙っていた。しばしの間、静寂が訪れる。

「私には『風を感じる力』がある。具体的に言くと、鬼の血から鬼の場所を辿ったり、悪いモノとかを感じとれる」

……風ってそういう特殊能力だったんか。だから鬼の場所が分かったのね。

でもそういう事なら納得だ。村雲父が村雲に鬼狩りをやらせた理由。

「お前の父は、きっとその能力で人を助けて欲しいと思ったんだ」

村雲父の判断が正しかったかは分からない。普通なら鬼狩りになるというのはめでたい事ではないし、逆に親がそれを望む何てことはおかしい。

でも村雲は父が亡くなった時点で鬼狩りを止める事もできたんだ。それでも続けているのは彼女自身の意志だ。

彼女は息を吐いてふわりと笑った。

「心の違いなんだな。なんとなく分かった気がする。ありがとう」
分かってくれたみたいだ。ほっとする。

「だから昨日の時も、私を助ける為にわざと危険な賭けにでたんだな。
隊律違反を犯した私を守るために」

え?!

「わざと自分を無防備にする事で鬼の攻撃を誘い込み、更に頸を切る。
見事だった」

「あの鬼は村雲が倒したんだろう?」

「何を言う。私のしたことなど些細なもの。お前が寝返りながら頸を
切ったんじゃないか!」

ほっ……?!

「体に染み込んだような動き。綺麗な一太刀でした」

え、ええ……マジで……!?

俺の守護霊に勘違い補正パイセンが本当に憑いてたりしない!?本
当に要らないんだけど!命助かった事には感謝するけど!

——流は新しい型を生み出したんだ!(狭霧山フラッシュユバック)

何かこの勘違いペースだと、強い鬼にバカスカ当たりそう……。嫌
だ、ムリ。

後ろにいた白津湯さんが真顔で批評する横で、俺の口から魂がふわ
ふわ飛んでった。

水柱就任編

放課後お八つタイム 前編

「今日は服を着ているんだね。良かった」

開口一番、そう言われた。

「初めまして、流。私は産屋敷輝哉。体の調子はどうかな？」

ブブブブヴァレテルウウウウ!!!最終選別ノ事ヴァレテルウウウ!!!

「は、じめまして、お館様……」

なんでお館様が前にいるんだろう。なんで俺は柱に囲まれてお菓子食べてるんだろう。

もう帰っていい?泣くぞ?

村雲宗治の処分は雨柱の白津湯さんが『継子にします。監視しながら鬼殺隊に貢献できる人間に育てます』という鶴の一声で決まった。

『白津湯君にも思う所があったのでしよう』

とは俺に伝えに来てくれた水柱、加賀見さんの言である。実は白津湯さんも昔ヤンチャしてたのかな。元ヤン的な。いや、ないな。

柱合裁判は緊急であったから柱は四人しか集まらなかったみたいだ。で、いつも柱が集まった後はお八つ会をしているんだとよ。え?なんでお前がそんなのに参加しているのかって?

人数少ないからお前も来いのなノリで誘われたんだよ!お館様が、直々に!!

これで断れるヤツいる?いたら俺そいつのこと勇者って呼べるわ。異常なりスペクトを受けているお館様である。断れば即時に情報は共有され、ことあるごとに『あいつお館様の誘い断ったんだって。ナニサマ?』ついでに『そういえばアイツ最終選別の時の変態じゃん

！キツショ！』とか言われること間違いなし。選択の余地は無いのである。

ちなみに村雲はまだ写経中である。白津湯さんも一緒だ。

もう部屋入った瞬間意識が飛びそうになったからね。広い部屋いた男二人のせいで。

片方は特徴的な色の髪に眉毛のおじさん。もう片方はひたすら念仏を唱えている、お兄さん。

俺知ってるぞ、この人達。

「良かった。まだお館様はいらしていないようですね。紹介します、一門君。こちらは炎柱の煉獄槇寿郎さんと岩柱の悲鳴嶼行冥さんです」

「あの、俺ングツ……一門流です。よろしくお願いします……」

あつぶねええ!! 『帰っていいですか?』て言いそうになった。

呼吸が乱れる。落ち着け、落ち着け俺。今からお館様を含めた男五人で菓子を食べるんだぞ。どんな拷問だよ。

なんでここに居るの? 的な視線が突き刺さる。

「煉獄さん、悲鳴嶼さん。お館様のご意向で一門君も今日のお八会に参加する事になりました」

まさかの連絡無しだったんですか!?! この鬼畜眼鏡柱がっ!!

「そうか!」

「よろしく頼む……」

あれ、煉獄父思ってたのと違うな……。意外とマトモなメンバーか? 大人ばかりだし。これ、大丈夫何じゃね?

そう思っていた時期が俺にもありました。

男四人で会話が弾むと思う? ひたすら気まずい空気が流れるよね!

加賀見さんは俺に話しかけて来るけど、俺質問されたら答える位のコミュ力しか発揮できなかったわ。というか逆になんで水柱なのに

コミュニケーションあるんだろ。変なの。
それで半刻の後のお館様inである。

——もう無理。早くお家に帰りたい、切実に。

「元氣そうで良かった。回復が早いんだね。同い年なんだからそんな
畏まらなくてもいいんだよ?」

「いいえ……」

畏まるに決まってるだろバーロー!柱の前でお館様に気軽に接す
るとか、まだ十二鬼月とお話する方がマシなレベルだぞ。

「いきなり呼び出してすまないね。本当は君に用事があったんだ」
お館様は表情を変えた。緊張が高まるのを感じる。

「流、君は一門の者として先祖の記憶を受け継いでいるね?」

も、もうやだあ……。流おうち帰る!!

放課後お八つタイム 後編

「いきなり言われて驚かせてしまったかな？」

産屋敷輝哉は明らかに動揺している一門流を見て自身の推測に確信を得た。最終選別の時から一門家について水柱の加賀見道鏡と共に調査を重ね、この結論に至ったのだ。間違えている訳が無い。

隠している本人には悪いが、一門流の存在はいずれ鬼殺隊にとっても重要なものとなるだろう。いまいる柱の中だけでも、確認をする必要があると感じた。

何も言わない一門流の代わりに、輝哉は言葉を重ねる。

「私と道鏡はこの一ヶ月、一門家について調べさせて貰ったよ。もちろん、『記憶による呼吸の伝承』について」

一門家は代々水柱を輩出していた名門であったが、それももう半世紀以上前の事。それ以降、一門家からは柱はおろか鬼殺隊士になるものだって一人も居なかった。実際に一門家は鬼殺から手を引き普通の道場となる、と産屋敷家に保管されている書簡に残っていた。

だから最終選別時、一門流という名前を見つけた事に興味を持ったのだ。水を意識した名前をつけるのは一門家代々のならわしである。

「最終選別の時、流はあえて素肌を晒して挑んだようだね。これは君の家に伝わる『気空一体』の修行かな？」

一門家が鬼殺から退いた時、せめてものお詫びにと代々伝わってきた呼吸の指南書、歴代の手記が産屋敷家に寄贈された。『気空一体』とはその内の一つである。

その昔、雨乞いの神事を行い、水の神を祀っていた一門家。呼吸にしても自然を感じ、自らもその一部として溶け込ませる技が一門家独自の修行法として成立したらしい。

しかし産屋敷家に指南書があるのだ。徹底的に鬼殺への道を閉ざした一門家であるから流が知ることなど出来るわけが無いのである。

これがひとつの理由。

「次に、君の育手である元水柱の左近次にも話を聞いた」

一門流は陸ノ型以降の型を使えない。

それは、『記憶による呼吸の伝承』を継承したものの最大の特徴ともいえる。

先祖の記憶を継承した一門家の者は水の呼吸に対して柱になるほどの高い適正を持つにも関わらず、型が全て使えない事例が多い。記憶が目覚めた瞬間、記憶にある以外の型が習得出来なくなってしまうのだ。数少ない拾ノ型を使えた継承者は元から拾ノ型を習得している、即ち記憶が目覚めるのが遅かった人間のみである。

陸ノ型以降を使えない、というのは呼吸の使い手でもかなり初期、初代もしくは二代目の水柱の記憶であると推測できた。

「そして日輪刀の色」

深い藍色を示す彼の日輪刀は水の呼吸でもかなり異色だ。

元来、水の呼吸に適正のある者の刀は薄く青みがかった様に色が変わ化する。黒刀にも近いといえる藍色は刀鍛冶の里で、『最後の一門家の水柱の日輪刀と同じ色である』と証明する人間がいた。一門流の刀を打った鋼山銘鉄である。

ここまで説明した所で輝哉は言葉を区切った。この場にいる全員が一門流という人を見つめる。

「俺は、そんな大層な人間ではありません」

だがしかし、一門流から出たのは否定の言葉。全員が目を見つめる。

ここまで証拠を並べられて否定する彼に輝哉は疑問を感じる。そこで産屋敷輝哉は一門流がまだ癸の隊士であることに思い出す。

輝哉は小さく笑いを溢した。水柱も同じ考えに至ったようだ。薄く笑っている。

「君は謙虚な子だね。流」

輝哉は流という少年の事を忘れていた。彼自身は水柱でなく、まだ入隊したばかりの子どもだ。

流は自分自身が未熟である事を十分に理解しているのである。彼

は、どんなに凄い自分の才にも驕れず高みを目指す人間であるのだ。
その事を輝哉は嬉しく思う。

「期待してるよ」

輝哉は流の肩に手を置いた。

いやだから『記憶による呼吸の伝承』って何だよ!?

まず一つ目の説明がおかしいでしょうが!

『気空一体』? なんやねん! ソレ!

うちのご先祖様は皆真冬に裸で訓練してたんですか? 普通に考えてキモいだろ! 誰か止めようとしなかったの?

そんなんで自然と一体って……宗教かよ!! 真理の会得でもすんのかよ!!

フウ………。普通に違いすぎて途中記憶が飛んでた。落ち着け。落ち着け。

さすがの俺もこれはまずいと思って勇気を振り絞り、お館様に異論を唱えたが。普通に笑って流された。

これ絶対言葉通じて無いよね。

「新参者の私にはよく分からなかったが……鬼殺隊に将来有望な隊士が入るのは良いこと……。精進するとい……南無」

悲鳴嶼さん思い切り困惑してんじやねーか。お館様めっちゃドヤ顔だったけど言っている事全部間違えているからな。

「俺の家に伝わる炎柱の手記にも、一門家については言及されていたな。かなり古いが……。たしか、『一門家に伝わる水の呼吸は少し違う』だったか?」

あの、先祖が凄いのはよく分かったんで、もう新しい情報出さないでくれます？

「それは、興味がありますね。是非とも見せて頂きたい」

ほら見たことか！現役水柱がやれやれオーラ醸し出してんじやねえか!!

「すいません。できません」

俺は速攻で否定する。こうすれば先ほど俺の言った言葉の意味が……。

「なるほど。体がまだついていけないのですね。君は成長期、無茶をするのはよろしくない」

全然伝わってないよコレ!?!一門家に伝わる型って、俺型稽古したけど全部頭から吹っ飛んだわ。すぐに家に帰って露葉ちゃんに教えて貰おう。

「そういえば一門君、私の継子になりませんか？」

そうやってご飯感覚で継子に勧誘するなあ!!

そこで止まれば風なのに……

結局俺は水柱の継子となった。

まずあの空気で断れないという前提の下だが、継子となることで得られる利益を考えた上での結果である。

強くなれる。柱と一緒に任務に行くので単独任務じゃなくなる。昇進がはやくなる、そして給料が上がる。この三つである。

お館様のヤヴァイ勘違いによつて難しい任務がぶつこまれそうなのがする。と察した俺は取り敢えず生き残る為に強くなるのが急務なのである。誤解を解く、それが出来たらどんなに楽だろうか。でも無理である。解いたら解いたで『じゃあなんでお前裸になったん?』と聞かれたらまさにジ・エンド。つらすぎ。

単独任務じゃないのも俺の生存率上昇に繋がっている。柱に入る任務はおそらく難しいものが多いだろうが、一人であたるより断然マシだ。一人で挑んだら死にかけたの本当にトラウマだ。

そして最後の給料について。もちろん家族への仕送りの為である。道場は心配が無くなったが、やはり妹達には楽をさせたい。まだ師範代の露葉ちゃんの家を継いでどうにかなりそうだが、攸花ちゃんには学を修めさせたい。女性の立場が基本的に低い時代ではあるが、教養があるのと無いのでは全く違う。あの子は真面目だし、環境さえあれば絶対に大物になるぜ。

兄バカとか言わないで。

「では一門君、打ち込み千回の後、踏み込み素振りを五千回。そうしたら屋敷の周りを三十周してください」

原作において『継子のいる柱が少ないのは稽古が厳しすぎて皆逃げてしまうから』と言及されていたが、別にそこまででは無いというのが俺の感想だ。水柱の加賀見さんは見た目がインテリだからかわりと常識人である。逆になんで俺以外に継子がいないのか不思議。

「食事をしたら常中の訓練です。君はまだ精度が低いので、体の隅々

まで意識する練習をします。腕の筋肉を一本一本感じながら型の練習です。不意打ちで私が叩きますので避けて下さい。くれぐれも気を抜かないよう」

木刀で叩いてくれる優しさに涙である。

狭霧山でだと全て真剣を使い、気を抜けば首を切られるような鱗滝流稽古を積んでいたのだ。あれ本当に怖かった。いつ死ぬのかと思つて毎日枕を濡らしたものだ。

そして継子になること早一年。

俺は拾壱ノ型『風(仮)』を完成させたのである。

加賀見さんに拾壱ノ型の原理と効果をかくかくしかじかと説明したところ、色々と改良を加えて練習させてくれた。どうやら雨柱さんも元は加賀見さんの継子であつたらしく、『雨の呼吸』を監修したのも加賀見さんらしい。

伍ノ型までしか使えない俺は『流流舞い』くらいしか回避技が無かつたからこれはかなりの進化である。

「立っているだけでは追撃を許してしまいます。相手との距離を調整できた方が良いのでは？」

「いっそのこと雷の呼吸の足さばきを応用して、敵の懐に入るとか。君なら出来ますよ」

「なんとなく炎の呼吸の奥義に似てますねえ……」

そうして俺は間合い全てを切り裂きながら雷の如く一気に距離をつめ、相手の首を腰に力を溜めて叩き切る技を作り出したのだ——！

これを見た加賀見さんは、

『なんか当初の予定と全く違った技になつてしまいました。強いのでよしとしましょう(笑)』

と言つていた。

(笑) じゃねえよ!!!

どころへんが風!? 風の意味分かってる!?

海上での無風状態の事を言うんだよ! 無風どころか暴風が吹き荒れてるんだけど!?

もはや風ではなく嵐! という感じになってしまったこの技を加賀見さんは拾式ノ型『炎雷』と名付けた。もうこれ水の呼吸じゃないよ。雷と炎の複合型だよ。ごめん義勇。お前なら本当の『風』を作り出せると信じている。

そういえば義勇と鏑兎は最終選別を無事に突破したらしい。お祝いに実家の道場で使ってる竹刀袋を贈った。どうやら死傷者は一人も居なかったようで、さすがあの二人である。

俺も頑張らないと! 主に命と金のため。

そうして地味に階級が『甲』まで上がった時の事。

俺に恐らくは十二鬼月と思われる鬼の討伐任務が入ったのだ。命から逃げ帰った隊士によると、相手は下弦の弐。ちなみに加賀見さんは体調不良でパスである。

う、う……うそーん。

水柱とは

そろそろ次代の水柱を選ばなければ。

加賀見がそう思ったのは、柱同士の手合わせで雨柱——白津湯渦桃に負け越したからである。

幼少期から面倒を見て、次代水柱の積もりで育てようとしたところ、何故か新しい呼吸を生み出して雨柱となった弟子。もちろん柱となるに相応しい力を持つとはいえ、対人戦が滅法苦手である彼女に勝てなくなった事に加賀見は自身の衰えを感じていた。

加賀見は己が柱の中では高齢である事も含め、引退を考えていた。そうなると次代の水柱を誰にするかという話になる。必ずしも柱が引退する時は次代の柱を指名しなければいけない、というわけでは無いのだが、現産屋敷家当主が若い以上、経験のある己が指名したほうが良いだろうという考えである。

ところが基準を満たす水の呼吸の隊士はいるものの、どれも白津湯に比べると今一つ劣る。水柱は鬼殺隊内でも炎と並んでいつの時代も存在していた。伝統を加賀見の代で止めてしまうのはあまりに忍びない。

さて、どうしようか？

そう悩みあぐねていた時に一門流と会ったのである。

最終選別にて藤襲山の鬼を宇髄天元と共に全滅させ、三月に行う予定だった最終選別を潰した少年。まだ若いのが、一際目だった新人であることは確かである。お館様に調査を命じられた際に、彼ならばと思うのも当然といえよう。

とりあえず一年指導をし、見込み無しと感じたら指名せずに引退すればよい。そういうわけで加賀見は一門流を継子にしたのである。

血統は文句なし。中身が伴っているかが心配であったが、努力家な気質であったようで一門流は予想以上に力をつけていった。彼の育手は元水柱であったというから、修行にも似通ったところがあつたのかも知れない。彼が理論派であつたことも加賀見との稽古の相性が良かった要因であろう。

新しく生み出した『炎雷』も正直、水の呼吸と言っているのかは不思議だが、強力であることに違いは無い。

今回の任務、一門が十二鬼月を討伐出来たのなら加賀見は次代水柱に彼を推し、後腐れなく引退する所存である。

だが、一つ疑問に思うとすれば……

「どうして伍ノ型までしか使えない彼が新しい型を生み出せたのでしょうか……？」

甚だ不思議である。

とりあえず初代水柱は凄かったので炎の呼吸も雷の呼吸も使えて、新しい型を作る事など造作もない人間だったのだろう。と加賀見は納得した。

実際、水の呼吸を作ったのはその初代であるのだから。

「ンンンンンンフゴオ!!」

「うるさっ!!」

くしゃみが出てしまった。誰か俺の噂でもしてんのかな。

宇髄が嫌な顔をする。抑えようとしたけど無理だったんだ許して。

「風邪なんかひいてないだろうな？体調管理はしっかりしとけよ」

「大丈夫……」

下弦の式討伐戦は宇髄との共同任務であった。安心。いや、最初はそう思っていたんだけど。

宇髄もこの一年で階級を『甲』まで上げており、俺とは違った方法で技の錬度を高めていたようだ。最終選別で『良い訓練になる』とか言う人間だ。実戦で学ぶのが得意なんだろう。

「いやまあしかし、派手に二人きりだな！本隊の奴らがどっか行っちゃまった」

宇髄が不思議そうに周りを見回す。

なんと俺達は今、討伐隊の本隊から外れて二人きりになってしまっ

たのだ——!!

「……」

俺は今、ひどく落ち込んでいる。

先輩『鬼は北西の滝に構えている！走って向かうぞ！』

宇髓『よつしや派手にいくぜ！』

俺『え、宇髓ちよつと待つて一人にしないで!?!』

宇髓はとても足が速い。俺は死にももの狂いでついていく。自然と俺達は先行する事になる。

そして目的の滝が見えて後ろを振り向くと、そこには誰もいなかったのだ。

要するに走るのが速すぎて俺しかついてきて無かったんですね！オワタ。

二人きりで十二鬼月と戦うの？マ？せめて待機して仲間がくるのを待とうぜ。

だが現実はその甘くない。宇髓どうだうだ話している内に鬼が出てきてしまったのである。

「鬼殺隊か……一人残らず俺の血肉にしてやろう」

ゆつたりと滝から出てきたおじさん眼球には『下弑』の文字。俺はこのおじさんを知ってる。無惨様にパワハラされて退場した鬼だ。

おじさんは俺の顔を見ると一際愉快そうに笑った。俺からしてみれば（察し）である。

「その顔と刀！貴様、一門の人間だな？覚えているとも！」

あーもう分かりました！予想できるし。どうせあれだろ？『記憶による云々』だろ？

「四代前の水柱が精神の混濁で自壊していく様は実に滑稽だった！先

祖の記憶を継ぐなど、なんとも業の深い事よ!!」

「え……?」

流、それ水の呼吸やない。霹靂一閃や……。

『記憶による呼吸の伝承』ってそんなデメリットあるの?!

一門家が鬼殺から身を引いた理由がわかった気がする。身内が精神崩壊したらそれはつらいだろう。

でもよく考えたら俺関係ないし。そんなに驚く事でもないかも……。

宇髄が不安そうな様子でこちらを伺う。俺は「大丈夫だ」と小さく呟いた。宇髄には事前に文でとんでもなく勘違いされていることを打ち明けているのである。俺の言葉は正確に伝わっているはずだ。

「フフツ！驚いてるな！」

下弦の式はとても上機嫌である。おじさんには俺が呆然としているように見えているのか。というかなんで早く攻撃して来ないんだろう。小物臭がすごいな。

でも所詮は無惨のパワハラ被害者だし、大したことないんだろう。よし！

大丈夫だ！俺は強い！水柱の継子になって、階級を『甲』まで上げた！

「二門、呼吸は整えたな。俺が攪乱するからお前が頸を切れ」

宇髄が鬼に聞こえないくらいの声で俺に作戦を伝える。見たこともないとはいえ、一族の仇だ。俺に頸を切らせてくれるようだ。

先手必勝。鬼が油断している今が絶好の機会である。

——一瞬で、終わらせる。

「行くぜ！」

宇髄の合図に合わせて俺は走った。お互いが反対方向から鬼を囲うようになる。

鬼が目線で追いかけるのは俺の方、それでも宇髄が先に攻撃をしかけて視線を反らさせる。派手に爆発をおこして二人の姿が煙に包まれた。

「小癩な!!」

鬼が叫ぶと地面から泥の手が生まれる。宇髓は呑み込まれそうになるが、それも爆発で弾き飛ばした。

宇髓は切るのではなく爆発させるのが主であるから、泥の攻撃とは相性がよい。

泥の手は俺にも襲いかかるが、俺は全て避けた。地面が泥まみれになり、非常に動きにくい。泥は切っても刀はすり抜けるばかりで、防御する事ができない。避ける事に専念するため、一度刀を鞘に納める。

俺は地面に足をつけることを止め、木に着地しながら頸を斬る算段をしていた。

泥が刀をすり抜ける以上、『炎雷』では処理できない可能性がある。なぜならあれは空間の飽和切りで防御をするからだ。全てすり抜けてしまつては意味がない。

俺と下弦の式、その一直線上に泥が塞がらず、視界が晴れる瞬間を見つける。

いや、見つけてから飛び込むのでは遅い。予測するのだ。

「水の呼吸——」

足の筋肉を一本一本意識する。

宇髓が大量の火薬玉を取り出して投げるのを確認する。

今だ!!

「拾式ノ型 炎雷」

一気に踏み込み、鬼へ向かって跳ぶ。俺に気付いた鬼が直ぐ様泥の壁を出す、俺は視界が一色に埋め尽くされるのにも構わず、居合切りの要領で刀を振り抜いた。

確かな感触。

崩れていく泥の壁に飲み込まれながら、俺は目を閉じて薄く笑った。

やっぱり小物だったぜ……。

「お前……それは水の呼吸じゃなくて雷の呼吸だろ。どう見ても地味な『霹靂一閃』にしか見えなかつたぞ。まあ頸を斬れたからいいが……」

後に宇髄は困惑気味にそう語ったという。

下弦の式討伐の一週間後……。

加賀見銅鏡の水柱引退と、一門流の新たな就任が鴉達によって伝えられた。十六歳というのは異例の若さである。

「天元さまも、柱まであと一歩ですね!」

「あれはほぼ一門が倒したようなもんだからな。俺も派手に下弦を倒すとするか!」

とある忍び夫婦は奮起し。

「む、流石ですな」

「入って一年……異例の早さですね。貴女も励みなさい」
とある女師弟は感心し。

「義勇、俺は流に継子にしてもらえるよう、これから水柱邸に向かう。お前も来るか?」

とある少年は更なる高みを目指した。

「いや……」

富岡義勇は兄弟子から貰った刀袋を撫でた。そこには『為すべき事を為せ』と書いてある。

「俺は、別にやる事がある」

錆兎は義勇の端から見たら何とも言えない顔に男の覚悟を感じ取った。であれば、もはや言葉を重ねる事は不要。

親友は、別々の道を歩み始める。

竈門炭治郎立志編

炭治郎は唐突に覚醒す

い、今起こった事をありのままに話すぜ！

いつも通り錆兎の熱い視線と謎のリスペクトを受けながら任務を終え、気分で雪山で走り回る謎の訓練をしていたら、キツネ属性のある錆兎君がどこかへ行ってしまった！遭難したらとんでもないと、俺も錆兎を探すために山の深い所に入ったら、俺も遭難してしまった！！取りあえず太陽を目印にしようと空を見るも、曇っててよく見えな
い！

やる事が無くてやはり走り回ったら、俺は竈門炭治郎が禰豆子に喰われかけている所に遭遇したのである！！

何を言っているかよくわかんねーと思うだろうが、俺もよく分からん！

とりあえずこういう時どうすれば良いの？誰か教えて！！

え？ロールプレイ！？

富岡義勇と同じ事をしろ？

え、あいつただの天然だよ？勘違い拗らせまくったあげくに胡蝶さんにぶっ飛ばされた様な男だよ？

あー原作ね！原作富岡義勇と同じ事をすればいいのね！

よし分かった！頑張るぞ！

——数分後。

どうしてこうなった。

「彌豆子……堪えろ！堪えてくれえ……！鬼なんかには、なるな!!」

竈門炭治郎は鬼になってしまった妹に必死で抵抗しながら、涙を流した。

炭治郎が居ない間に彌豆子以外の家族は全員死に、家は血の匂いに溢れていた。唯一残った妹は鬼になり、今まさに炭治郎を喰い殺そうとしている。

長男である俺が皆を守らなければ行けなかったのに、俺は誰も守れなかった。

何度も、何度も今は亡き家族へ謝る。

彌豆子の力が更に大きくなる。もうだめか……、炭治郎は目蓋を伏せようとして、しかし頬に当たる冷たい雫に眼を大きく開いた。

「……ウウツ、ウウツ……!」

「彌豆子……!」

彌豆子が泣いていたのだ。

（そうだ、何を諦めかけているんだ俺は！俺が居なくなったら彌豆子が一人になってしまう!!俺は——）

「俺は鬼殺隊。鬼を狩る仕事をしている……」

いつの間にか知らない男が側に立っていた。この人は……誰だ？

呆然としてみると、彌豆子の力が抜けた。彌豆子が炭治郎ではなく、その男に襲いかかったのだ。

「ね、彌豆子……」

鬼となった妹を止めようと手を伸ばすが、遅い。焦る炭治郎を横目に男は体を翻して彌豆子の腹を蹴った。

「ガアツ!」

苦しそうな声を漏らして彌豆子は吹き飛ばされる。常人の脚力を越えた蹴りに、炭治郎は驚くよりも恐怖した。

「お前の妹は鬼になった。鬼になったものは家族も例外なく喰らう。」

だから俺はお前の妹を殺す」

何の表情も浮かべず、ただ機械的に話す男に炭治郎は不気味さを感じた。匂いもぐちゃぐちゃで、まるで考えていることが分からない。

禰豆子が再び走って襲いかかる。炭治郎はがむしやらに禰豆子の足にしがみつくのと、無理やりその体を押さえつけた。

「ま、待ってくれ！妹はまだ誰も殺していない!!」

禰豆子がもがく、炭治郎は無理やり抱きついて、話を続けた。

「家には禰豆子じゃない、知らない誰かの匂いがしたんだ！家族を殺……したのは、多分そいつだ!!」

「よく言う……今まさにじぶ……、おのれが喰われそうになっておい
て」

風が吹き抜ける。思わず炭治郎は目を細めた。

「ウガアツ!!」

「禰豆子!!」

炭治郎が少し目を離れた隙に、禰豆子は首筋に刀を突きつけられていた。

深い藍色の刀が、鈍く光る。

「禰豆子を離せ！」

炭治郎は叫んだ。

「……」

男は何も言わず、じつと炭治郎を見つめている。

「離せ！禰豆子を！禰豆子はまだ誰も殺していないんだ!!」

「鬼は……殺す。絶対に、殺す……」

しりすぼみながら紡がれるのは、深い怨念がこもった言葉。何かを後悔するような匂いが同時に鼻に入る。

炭治郎は男を、哀れに思った。

この人は、きつと、大切な人を鬼に殺されたんだ……。俺と自分を重ねて、心を凍らせてしまったんだ。

でも、男はまだ禰豆子を切りつけていない。きつと迷っているの

だ。

「このまま対話を続けければ、あるいは……。」

「どうか、妹を離してくれないでしょうか。俺が妹に誰も殺させません。人間に戻す方法も必ず見つけてみせます」

炭治郎は涙を拭き、声を震わさず、頭を下げた。

男から後悔と、困惑の匂いが強くなる。ぶるっ、と体を震わせると、炭治郎を見て叫んだ。

「……断る!!生殺与奪の権を他人に握らせるな!」

どうやら、男の望んでいた反応は違ったようだ。

男は刀を炭治郎に突きだした。

「俺がもう少し早く来ていればお前の家族は無事だったかもしれない!だが、一度過ぎた時は戻らない!」

明らかに怒っている風なのに、匂いは怒りではなく、別の感情に満ちている。

「何の力もないお前が鬼を人に戻す!?!仇を見つければ笑止千万!!!」

男は一度息をついて、視線を禰豆子に向けた。

「お前が今やるべきなのは、俺と話す事では無いだろう。俺を殺しても妹を奪い返す事だ」

炭治郎はようやく全てに合点がいった。

この人は、禰豆子を殺そうとしているのではない。俺を試そうとしているのだ——!!

手元の斧を強く握りしめる。

「お前の人生全てをにかけて、妹を取り返せ。さもなければ、俺は……!」
「止めろおお!!」

刀が高く振り上げられる。炭治郎は男のやろうとしている事を察して叫んだ。

反射的に石を投げ、行動を遮る。

(考えろー考えろーどうすればあの人を止められる!?)

斧を上投げる、自分の身を犠牲にして禰豆子を守る。いや、それでは男の風のような速さに付いていけない。

（『俺の人生全てをにかけて』……！そうだ！！）

炭治郎は父との思い出を想起した。

真冬の夜、大きな人喰い熊を一瞬で倒した父。そして、家に伝わるヒノカミ神楽。

ヒノカミ神楽は刀を用いて舞う。斧であってもそれは力になるはずだ。漠然だが、炭治郎は確信を持った。

例え相討ちになったとしても、禰豆子を守る！

炭治郎は、男に向かって走る。

口から燃え盛るような音がする。肺が焼けつくように痛い。それでも、動きは止めない。

「エ”……っ？」

炭治郎の振りかぶった斧を見て、男の動きが一瞬止まる。

そんな隙を見逃す炭治郎ではない。

「ヒノカミ神楽——円舞!!」

紅蓮を纏った一閃が、一門流を襲った——。

母のこえ

『彌豆子』

『お姉ちゃん』

『姉さん』

家族のこえが聞こえる。

みんな、どこへ行ってしまったんだろう。

わたしを置いて、どこへ……。

『お願い彌豆子！炭治郎を止めて！人殺しなんか、させないで！！』

おかあさん！

彌豆子は、思考の霞を払った。

「ヒノカミ神楽——円舞!!」

炎を纏った一撃が俺の目に映る。

炭治郎は必死の形相で、俺を睨んでいた。いいお兄ちゃんだ。

なんでヒノカミ神楽使えんのよコイツ……。

本来なら刀の柄で背中を叩きつける積もりだったが、もう遅い。

しかし俺に被さるようにして、少女が前に出た。

「だめ、だよお……お兄ちゃん」

「ね、ずこ……う？」

炭治郎の放った決死の一撃。それは男に届く事はなく、別のものを斬り裂いていた。

最愛の妹、禰豆子の体である。彼女の体には今、炭治郎の持つ斧が刺さっていた。

どうして、禰豆子がこんなことに？俺が、斬ったのか？

突然の圧迫に耐えられなくなった肺が出血し、口から血を吹き出す。

斧が手から滑り落ちて、雪に埋もれた。禰豆子の体も同じように崩れ落ちて、炭治郎にしなりかかる。

「おかあさんがね。人を殺しちゃ、いけないよお……」

「禰豆子！禰豆子!!」

意識を取り戻した禰豆子は、幼児のようにつたなく喋る。

だめだよ、と繰り返しながら禰豆子は目を閉じた。同時に体がしゆるしゆると音をたてて小さくなる。

「禰豆子！起きてくれ！死なないでくれえ!!」

炭治郎は顔中を濡らしながら、禰豆子の体を揺すった。禰豆子は見じろき一つせず、目を閉じている。

俺はなんてことをしてしまったんだ！斧で、人を殺そうとして、妹の身を斬った！

家族を守るどころか、家族を傷つけたんだ!!

「俺は、俺なんか……長男じゃない……」

震える手で斧を取る。それを首に当てようとして、炭治郎の意識が落ちた。

「本当にごめん」

自分クソさに腹が立つ。炭治郎の斧が肩に少し引っ掛かったが、この程度、二人の傷に比べたら軽いものだ。

俺の間拔けな行動が、二人を極限まで追い詰めてしまった。優しい炭治郎に妹を斬らせたのだ。許されるようなものではない。

だが、これで彼らを庇う理由ができた。

そんな思考が浮かんでしまった。クソが。

流は刀を握り直すと左真横に振った。確かな衝撃と共に、弾き返す。

「流!?なぜ鬼を庇う!」

「この鬼は俺の命の恩人だ。この少女が居なかつたら俺は死んでいた」

錆兎が白色の衣を翻して、眉を上げた。

「恩人……?もしか、その肩の傷は少年に?」

「妹を守ろうとして俺を斬ろうとしたんだ。でもこれは全て俺が招いた事だ。俺が、二人の心を引き裂いた……」

「そんな!流は鬼殺隊として当然のことをしたまでで」

流は首を振る。今さらそんな言い訳をするつもりは無い。

「この兄妹の命、俺が預かる。鬼殺隊といえども、殺させはしない」

腹でも何でも切つてやる。

俺が水柱というのならば、その責務は果たさなければいけない。

錆兎は暫しの間、思案した。

鬼殺隊士が鬼を庇うなど、前代未聞だ。柱であれば尚更。

だが、本当に鬼が流の恩人であるとしたら、それは最大限感謝すべき事であるに違いない。柱と継子という以前に、二人は兄弟という絆で繋がれているのだから。そして、流は嘘をつくような人間ではない。

錆兎は刀を鞘に納めた。

「とりあえず、これからどうするんだ？」

「義勇を狭霧山に呼ぶ。鬼である以上藤の家には運べないし、蝶屋敷は他に柱がいる。連絡を頼めるか？」

「相分かった」

「俺はお館様に連絡する。あの人なら分かってくれるだろう……。それと三日ほど担当地区を離れるから、代わりに頼む。真菰も呼ぶから」

「問題ない」

流は懐から傷薬と包帯を取りだし、二人の応急処置を始めた。

さらば富岡義勇、胡蝶しのぶにぶっ飛ばされるの巻

蝶屋敷。

——それは、鬼殺隊の医療施設である。藤の家とは違い常に医療に携わるものが駐屯し、負傷した隊士や巻き込まれた一般人たちの治療にあたっている。花柱 胡蝶カナエがお館様に頼み、花柱邸を改築してできた施設で看護師には鬼で身寄りを亡くした少女たちや一線から引いた元隊士などがある。

万年人手不足に悩まされているが、胡蝶姉妹が切り盛りすることで何とかやっていた。

その中で、鬼と全く関わったことの無い一門攸花が働いている、というのは少し異質であった。

蝶屋敷に勤めることになった切っ掛けは些細なもので、一年前、人手を募集している時に兄を通して誘いを受けただけである。もとから手先は器用であったし、姉と違って武術の才能が無いことに意気消沈していたというのもある。

しかし、看護師として働く事にやりがいを感じていたから攸花はこの選択を後悔などしていない。

後悔するとしたら、たまたま忘れ物をして部屋に取りに行く羽目になった今の自分と、兄の手紙を録に読まずに竹刀袋を渡した十三歳の自分である。

「俺は兄弟子の流に『為すべき事を為せ』という訓戒を受けた」

「……はい？」

日輪刀を入れた竹刀袋を前につき出す、兄の知り合い。名前は確か……富岡なんちゃら、とか。

相對するはしのぶさん。思い切り眉をよせて、腕を組んでいた。

「俺は剣術では親友と兄弟子に勝てないと分かっている。だから、畏

を練習した」

「あの、文脈が全く繋がってないんですけど、ふざけてます?」

激しく同意。

不信任感を隠しもしないしのぶの目に攸花は泣きそうになった。どうして私、ここに居合わせてしまったんだろう。

なまじ自分のせいであるから、無視出来ないのである。

というのも、『為すべき事を為せ』というのは実家の道場で門下生全員に配られる竹刀袋にある格言である。大量にあるので、別に兄がえて送った言葉とか、そんなことは決してない。

『よもや!竹刀袋の底が抜けてしまった!』

『あ、これあげますよ』

『かたじけない!』

交流試合のお客さんにまであげてしまえるような物である。

だが兄の手紙を途中まで読んで、適当に鴉にその場にあった竹刀袋を渡してしまったのは攸花であった。

実は、冗長で無駄に長い兄の手紙には、最後に『自分じゃ時間がなから俺のかわりに新しい刀袋を二本見繕っておいてくれ。お金は後で払うから』と書いてあったのである。

(まあ新品だし、大丈夫でしょ……)

全然大丈夫じゃなかった。とんでもない修羅場を生み出してしまった。

「しかし畏だけでは足止めはできても、滅する事はできない。これでは、誰かを守る為に戦えない」

「迷惑なので、早く用件を言ってくださいませんか?本当に迷惑なので」

しかもこれ、噂によると少なくとも二回はあったようなのである。三顧の礼を尽くすとは言いが、全くもつて逆効果だ。現にしのぶは最近すごい苛立っている。相手の階級が『甲』であるから手を出せないのだとか。

『なんであんな変人が柱の次に偉いのよ！信じられない！』とは、麵棒を叩きつけながらのしのぶの談である。

攸花の兄も行動が突飛だし、基本無口だから大概だが、それにしてもこの人は兄に輪をかけてその成分を強めたような性格だ。兄弟弟子で悪い所が似てしまったのだろうか。もう一人もこんな性格なのだろうか。

真菰がしつかりとした性格でよかった。

富岡？さんはしばし沈黙して、口を開いた。

「だから俺はお前が欲しい」

ブッフオ!!

攸花は吹き出した。

「ハア……？」

そして同時にしのぶの堪忍袋の緒がぶち切れる音も聞こえたような気がした。

しのぶは元来、姉と違って気が短く、自分の嫌いなものにはつきりと嫌いという性格である。でも彼女は真面目な性分であるから規則は守るし、我慢だってできる。

まあ、その我慢にも限界はあったのだが……。

胡蝶しのぶ、全力の縦拳。切る力はなくても、押す力は人一倍ある。彼女の拳はただ真っ直ぐに富岡の顔面へ吸い込まれていった。

「すごい……」

武術のたしなみがある攸花は、その一切の無駄なく放たれた拳に感嘆の声を漏らしてしまったのである。

『ようするに毒の作り方を知りたかった』

受け身をとったのにぶっ飛ばされた富岡を保護した攸花は、後に彼の真意を一時間かけて聞き出し、紙に分かりやすく書くよう指導する。

いちおう攸花監修の手紙によって真意を伝える事はできたのだが、

「イヤです」

しのぶは勿論笑顔で断った。だろうな。

「なんで？」

とても心外そうな富岡。「やはり三回では足りないのだろうか？」とボソボソ呟く。

「迷惑なので止めてください」と前置きをした上で攸花は一応理由を説明する。

「まず何の知識もない貴方に毒を渡すのは危険であること。そして、毒を使い過ぎると鬼が免疫をつけてしまうからです」

しのぶの言葉をそっくりそのまま伝える攸花。でも後半は普通の人には分からないだろうなと思い、説明を加える。

「しのぶさんが毒の調合を常に変えている事をご存知ですか？何故なら同じ毒を使い過ぎると鬼に毒が効かなくなるからです。毒に対する免疫をつけると言います」

「免疫……」

「鬼は自身の細胞を変化させる力があるので。しのぶさんは毒を切り替える事で、鬼に対応させないようになっています。そしてこれが富岡さんに毒を渡さない理由でもあります。貴方に渡せばその毒が通用しなくなる可能性が高い。理解して頂けたでしょうか？」

（まあ理由の九割がたは印象が最悪だったからだと思うけど……）

富岡は罫に毒を仕込む事で自分がいなくても、鬼の出現場所近くの人間への被害を減らしたいらしい。一応藤の花の煮汁などで毒を作る努力はしたようだった。

いい人ではあるのだろう、たぶん。だが敢えて攸花は言う。

「それに、貴方に毒を渡してもしのぶさんに何の利益も無いじゃないですか……。医療の知識もないし、別に何か手伝ってくれるわけでも無いし」

「確かに」

富岡の表情が変わる。ようやく自分の行動の無意味さが分かったようだ。素直だなと攸花は思う。

——その時、攸花の頭に何かが降りてきた。

この人、上手く言いくるめられれば蝶屋敷で働かせられるんじゃない……？

『今から医療の勉強して、働いてくれれば私がしのぶさんに紹介状

を書いてあげますよ』とか言えば、機能回復訓練とかに駆り出せるんじゃない……?」

もし仮に紹介状書くはめになったとしても、しのぶさんに最終決定権はあるだけだし。

蝶屋敷は万年人手不足であり、攸花も疲れていた。だからこのよう
な、いつもなら即刻破棄する案を思い付いてしまったのである。

うっかり竹刀袋を渡してしまった申し訳なさ、しのぶの愚痴を数日間聞いたストレス、その他諸々が積み重なり、攸花はうっかり口に出してしまう。

「もしここで働いて、医療関連の知識も付けてくれるなら、しのぶさんに毒の調合を教えて貰えるよう、紹介状を書いてあげますよ?」

「本当か!? ありがとう!!」

暗かった表情を一気に明るくして食いつく富岡。さっきまでムスツとしていたのに……と、いきなりの温度差に驚く攸花。

これがこの青年の素である。

一門流へのリスクトから、彼の真似をするという珍行動をしていたこの青年は、実は明るい性格なのに、表情を消してツワモノ感を出すことが癖になってしまっていた。思考が天然である。

そういう所だからな富岡義勇。

そして彼を見れば、一門流が普段どのような人間であるか分かるというものである。この、外面富岡義勇めっ!

結果的に言うと、努力家な富岡は任務をこなしながらも蝶屋敷にて

医療の腕を磨き、一門攸花に紹介状を書いて貰える事になる。

胡蝶カナエのとりなしがあつたこともあり、しのぶは渋々教える事を了承したのだった。

そして一年後。

「富岡さん？また無断でどこか行くつもりですか？」

蝶屋敷の門にて、そそくさと道具を持って出ていこうとする富岡の前に現れる胡蝶しのぶ。

富岡は眉をひそめた。

「まずい……」

「何がまずいんですか？言ってみてください」

黙秘権を発動する富岡。

「富岡さん？私、言いましたよね？今日は任務があるので機能回復訓練の相手をお願いします、って。そうしたら貴方は『分かった』と言いましたよね？なのにこっそり何処へ行くこうとしているんですか？」

富岡は狭霧山へ向かおうとしていた。

もちろん理由はある。半刻前に親友から来た手紙には『すぐに狭霧山に来てほしい。急患がいる。そしてこの事は誰にも言うな』と書いてあつたのだ。

だがしのぶは約束を破る人間を心の底から軽蔑する。そして破つた人間（主に富岡）に罰を与える。

具体的に言うとな数カ月間、蝶屋敷の食卓から鮭大根が消えて鮪ぶりだいこん大根が出てくるようになる。富岡はこの鮪大根の刑が何よりも苦手だった。なぜなら食卓に鮪大根が上がる度に鮭大根がない悲しみと、自分の過ちが思い返されるからだ。

しかも今は冬、鮭の旬である。

——鮭が匂であるのに、鮭が食べられない！なんたる屈辱か!!

いつもだったらこの時点で諦めている。だが、今回は人命がかかっているのだ。

決して鮭大根をお昼にこっそり食べに行こうとかその程度の話ではない。

「はあ……だんまりですか。富岡さん、そ——」

「俺は嫌われていない」

「まだ何も言ってますけど……」

このまま硬直状態が続けばしのぶの精神攻撃が来る。

富岡は覚悟を決めた。

「御免——!!」

しのぶの横を強硬突破しようとする。

「通しませんよ!」

だが胡蝶しのぶも今では『甲』の隊士。素早さでは富岡を勝る。

この勝負、いつもであれば胡蝶しのぶに軍配が上がっていたであろう。しかし、富岡義勇も無策ではない。

「水の呼吸、拾参ノ型——みずかがみ水鏡」

狭霧山にて作り出した自分だけの型。それを今、富岡義勇は使った。

「何ですって!?!」

自身の手が、富岡をすり抜けた事に驚愕の声をあげたしのぶ。

それもそのはず、『水鏡』とは水面に映るが如く、富岡義勇の姿を幻視させる技なのだ。直接的な攻撃ではなくとも、相手の不意を突くには非常に有効である。

本当の富岡はしのぶの横を抜け、すでに姿を消している。

それでもしのぶは悔し紛れに叫んだ。

「いいんですね！富岡さん!? 鱒大根で匂を越えても！覚悟はあるんでしょうね!!」

「くっ！」

富岡は唇を噛む。しのぶの声は普通に聞こえていた。

☆鮭大根を捨てた末に、富岡義勇は何を見るのか——!? (さらば富岡義勇、胡蝶しのぶにぶっ飛ばされるの巻。完！)

本家

「その男の子とは話をしたんですか？」

「いや俺がいる時は目を覚まさなかつた。今は意識を取り戻したらしい」

真菰は包帯を巻いた肩を慣らすように回す兄弟子を見た。彼は相変わらず表情が少なく、もう過ぎた事としているようだ。でも昨日共に任務をこなした錆兎は、今までで一番取り乱していたと言っていたから真菰に分からないだけで、実は違うのかも知れない。

兄弟子とはいえ共に修行をしたこともなかつたので、真菰としては『親友の兄』というように感じる。

「それに、自分の妹を殺そうとした人間が近くにいたら怖いだらう」

真菰は流が鬼を匿ったと聞いた時、「あの人ならやりそうだな」と思った。任務では容赦なく鬼を斬る柱にふさわしい人物ではあるが、彼が人を守る為に戦っている事は錆兎と義勇からよく聞かされたし、家族のような付き合いをしている彼の妹達も、庭の藤を眺めながらそう言っていた。

真菰としては鬼は家族の仇であり、断じて許せるものではないが、その兄には同情する。お館様も容認しているのだから騒ぎ立てることもでもない、と結論付けていた。

「妹を斬ってしまった事にひどく追い詰められているらしい。きつかけになった俺が言えた義理ではないが、気にしてやって欲しい。俺達で、一番人付き合いが上手いのは真菰だから」

その言いように真菰は思わず笑ってしまう。

一門流という人はその特殊な在り方から、遠巻きにされてしまう事が多い。柱の中や、兄弟弟子の間ではあまり気にされないが、彼と同時に隠になったものなどは『裸柱』などと身も蓋もない呼び方をするものもいた。錆兎が何かして全く聞かなくなっただけでも。

「はい、もちろん。修行も付けましょっか？」

「まだ鬼殺隊に入ると決まったわけでは無いが、もしそうであれば、才能はある」

聞く話によると、未完成とはいえ呼吸を使ったらしい。呼吸の概念も知らず、使うというのはある種の天才だ。水柱たる彼が断定するのだから間違いない。

「その少年はどのような心を持ち、どのような拾陸ノ型を生み出すのか……将来が楽しみですね」

真菰は暗い夜空を見上げて微笑んだ。名前も知らない少年の未来を思つて。

「ア……ウン、ソウダネ」

じゅう……ろく……？いやいやそんなバナナ。真菰つてたまに抽象的過ぎてよく分かんない事を言うし、何かの比喻だろう。

一門流は聞き間違いだと思ひ、適当に流した。真菰が新しい型を生み出す前提で話してるのも聞かなかつた事にした。

「命に別状はない」

「本当にありがとうございます……富岡さん。感謝をしてもしきれません……」

「俺は俺のすべき事をしたまでだ」

炭治郎は床に頭を付けて富岡義勇に感謝を述べた。ここ数日、つきつきりで自分と禰豆子の世話をしてくれたのだ。炭治郎は肺を痛めて声が掠れているものの、だいぶ良くなった。

だが、五日経っても、彌豆子はまだ目を覚まさない。

「鬼というのは回復力が高い」

炭治郎は雲取山の出来事を思い出して、顔を歪めた。血の匂いと共に壊れた幸せ。二度と戻る事はないのだ。

そして俺は――、

「何か言いたい事があるなら言え。感情を言葉にするだけでも意味がある」

「富岡さん……」

富岡の目は炭治郎を真っ直ぐに見つめていた。炭治郎は、匂いで心配してくれているのだと思う。

「俺が、駄目な長男だから。昔から彌豆子には苦勞をかけて……。本当は、町にいる子みたいに綺麗な着物を着させて、腹いっぱい食べさせてやりたかったんです」

炭治郎の瞳から涙が溢れ出す。

「でも、彌豆子は優しいから、下の子達の面倒をいつも見てくれて、暇さえあれば刺繍をして……家計の足しになるようになって……」

嗚咽まじりに炭治郎は感情を吐露する。富岡は黙って聞き役に徹していた。

「ごめん、ごめんなあ、彌豆子……。駄目な兄ちゃんです……」

炭治郎は全てを吐き出し、ただひたすらに泣いた。

いつの間にか眠っていた炭治郎が目を開けると、空は白け、元気な鳥の音が響いていた。

「起きたか」

富岡が壁に背をかけて立っている。炭治郎は慌てて体を起こした。「泣いたなら、もううずくまるのは止めろ。時を巻いて戻す術はない。お前は前を見るべきだ」

富岡は懐から紙を出して炭治郎に渡した。

「お前には二つの道がある。一つは家に戻り、今までの生活を続ける道。もう一つは、鬼殺隊に入る道だ」

紙には産屋敷という名義で小切手が挟んであった。子供一人なら五年は暮らせる額だ。炭治郎は目を剥く。

「今までの生活を続けるなら、お前の妹にはここにいてもらう。一度は正気になったとはいえ、二度目がある保証はない。会いに来るぶんには構わないが、二度と一緒に暮らせないと思え。その小切手は鬼の被害にあつたものに配られる」

「鬼殺隊とは……？」

「鬼殺隊は字の通り、鬼を殺す組織だ。俺もそこに属している。鬼を滅する為に全員が修練を重ね、選別を越えて鬼殺隊に入る。非常に殉職率が高く、普通の生活とは程遠いが——、」

富岡は一旦そこで言葉を切った。

「家族の仇をとれるかもしれない。そして、鬼ならお前の妹を人間に戻す方法を知っているかもしれない」

炭治郎は驚きに息を止めた。

「禰豆子を人に戻す——、そうすれば禰豆子は俺を許してくれるだろうか。」

「お前は弱い。修行も厳しくなるだろう……もしかしたら志半ばで死ぬかもしれない。それでも」

「富岡さん」

炭治郎の心は決まった。例えどんなに苦しくても、禰豆子の苦しみには勝らない。禰豆子の苦しみを背負う事は出来なくても、自分が苦しまずに逃げる事だけは出来なかった。

「心は決まったようだな」

富岡は笑った。

「俺は、鬼殺隊に入ります」

水の呼吸カウンセリング（鱗滝）

「炭治郎、今日はここまでだ。帰るぞ」

「はい」

鱗滝がいつものように訓練場に行くと、そこには全集中を維持しながらひたすらに素振りを続ける炭治郎の姿があった。この少年はいつも呼びに来るまで絶対に鍛練を止めない。

初めの内は言ってもなかなか止めず、苦労したものだが、一度脱水症状で気絶した時に反省して従うようになった。

修行熱心で鱗滝の言うことに従ってただ無心に体を鍛える炭治郎に、育手としては嬉しい反面、彼がどれだけ追い詰められているのを見せつけられているようで悲しくなる。

表情豊かで、明るい少年だというのに、炭治郎の笑いかたはまるで子供らしくない。この少年は笑う事、楽しむ事が罪であるかの様に申し訳なさそうに笑顔を浮かべるのだ。

「炭治郎。何度も言うが、自分を無理に追い詰めるのは止める。生き急いでも録な事にはならん」

「俺は別に無理をしていませんよ、鱗滝さん」

炭治郎の匂いは嘘をついていない。心からの本心だ。

「何もしないのがつらいか……?」

「ええ、まあ」

少し炭治郎は顔を伏せた。

「寝ている禰豆子を見ると、いつもあの事を思い出してしまうんです。一門さんを殺そうとした事、禰豆子が身を呈して俺の心を守ってくれた事を。本当はしっかり見なきゃいけないのに、それが出来なくて……」

「……逃げる事は罪ではない。また戻って来るのなら、それは悲しみ

でも出来なくなるよりよっぽど価値のある行動だ」

炭治郎は、ありがとうございませすと小さく呟いて稽古場の脇にある岩を見た。

その岩には一本の切れ目があり、綺麗にそこから二つに割れている。断面には苔がむしっていて、鱗滝は懐かしく思った。

「その岩は最終選別に行くとき、お前の兄弟子が斬ったものだ」

「最終選別……鬼殺隊の入隊試験ですか？」

「ああ、そうだ。藤が一年中狂い咲いている山で七日間生きた者だけが鬼殺隊に入れる……。鬼が閉じ込められているその場所で、毎回何人も人間が挑戦し、散っていく」

「とても、厳しいんですね」

炭治郎は顔を曇らせた。岩肌にそっと触れた。

「炭治郎、それを斬った人間は生きている。錆兎という男だ。義勇と同一年の、あいつの親友だ」

「富岡さんの」

「正義感の強い、優しい男だ。すぐに流の後ろを義勇を引つ張って付いていく。初めは見向きもしなかったのに、毎日勝負を挑んでは負けていたな」

鱗滝はくつくつと喉を鳴らした。炭治郎は意外そうにその様子を見る。

「流も勝負を挑まれば必ず応えていた。お前は知らないだろうが、あの子は年下に甘い。一度も止めろとは言わなかった。真剣で襲いかかっているのに、変な所で肝の据わった奴だった」

「し、真剣ですか……？」

「ああ。錆兎も義勇も流が強いことを良く理解していたからか、全く手加減をしていなかったな。二人で稽古をするときにはいつも木刀を使っていたのに」

炭治郎の顔が強ばる。流石に稽古で真剣勝負をするのは怖い。

「安心しろ。お前に同じ事をやらせるつもりはない。流がおかしかったただけだ」

本人が聞いたら全力で『んなわけねーだろ!』と叫びそうな事を鱗滝は平然という。

炭治郎はほっと息をついた。しかし、自分が楽をしようとしていることに気付き、首を振る。

「いえ、鱗滝さん！俺にも流さんという人と同じ修行を付けてくださいー！」

実を言うと炭治郎、件の『流さん』がトラウマの原因であることを知らない。

『お前が会ったのは、水柱の一門様だ』

なぜか富岡、水柱の位の高さを表現するために様をつける。だが、炭焼き屋の少年に『水柱』とか言っても普通伝わらない。

だから炭治郎は一門流の事を『ミズバシライチモン』なる名前の人物であると勘違いしているのだ。

誰か早く訂正してください。

「流と同じ修行を……?」

「はい！同じように修行を付けて欲しいんです！」

「だが、あれは相当危険だぞ?」

「またもや流が聞いたら卒倒しそうな事を言う鱗滝。」

「でも、付けて欲しいんです！」

炭治郎は粘った。物理的にも精神的にも硬い頭の持ち主である。

次の日になっても、その次の日になっても、ひたすらお願いし続けた。

「儂が教えられる事を全て吸収できたら考えてやる……」

「はい！」

鱗滝根負け。

炭治郎は達成感から、久し振りに心から笑った。

九ヶ月経過

「もうお前に教える事はない」

鱗滝さんに師事して、九ヶ月が経った。禰豆子はまだ目覚めないけど、俺は毎日禰豆子が起きた時の為に日記をつけている。

兄弟子の流さんから紙を贈られたのだ。いつか会えたらお礼を言おうと思う。

「最終選別への条件はこの岩を斬ることだ」

鱗滝さんは少し山の奥に入り、そこにあつた岩を指差して言った。錆兎さんが斬った岩よりも、心なしか大きい気がする。

俺は真菰さんが叩き込んでくれた呼吸を意識しながら、刀を振るつた。

『炭治郎はこれから岩を斬るよう言われると思うけど、実は私たちが最終選別に行く条件は違うんだ。岩を切ったら教えて上げるね』

今日は真菰さんでない人が指導に来てくれるらしい。富岡さんだろうか。

なんとなしに人の匂いを追って山頂の稽古場に向かう。そこには狐面を腰にさげた穴色の髪の人があった。

「岩は斬ったな?」

「はい!」

その人は木刀を手にとると、構えた。

「俺は錆兎。今日から月に数回、お前の指導をここにこへ来る」

この人が錆兎さんなのか……。匂いで錆兎さんが富岡さんや真菰さんよりも強い事を知る。

「よろしくお願ひします!」

「最終選別への条件は『新しい型を作ること』従来の型を応用させたものでも構わん。お前が必要だと感じたものを作れ。俺はその手伝いをする」

「手伝い、ですか？」

「そうだ。自分で考えて編み出すものだから、俺は何も言わない。俺がする事は一つ！」

錆兎さんが木刀を振ると、離れている俺の方まで風が来る。

「お前をひたすら攻撃する事だ！お前はそのなかで自分に足りないものを見つけて！お前だけの、拾陸ノ型を!!」

錆兎さんとの稽古が始まった。

「錆兎がいない!!」

イヨツシャアアア!!!!

俺は全力でガツツポーズを取った。

いつも後ろにいる錆兎が狭霧山でいないから、今日は思う存分水柱邸でゴロゴロできる。

よし！午前中に日課だけ済ませて宇髓の家に遊びに行こう！そこでお昼食べたら帰って夜まで寝よう！

おつうちちゃん、ヨロピ!!

宇髓の家に手紙を贈る。

いつもは家にいる専業主婦の母ちゃんが、休日に用事で居ないときの気分である。ゲームたくさんしちゃうぞ、みたいな。

刀を持ち、庭に出て素振りをする。

気分が良いからいつもより倍速で振るえる気がした。 風素振り。

「とうっ!!」

だがしかし、俺の浮き浮き気分は素振り開始三分で崩れ去った。

塀を飛び越えて山吹色の着物が翻る。

「奇遇だな、流！いい鮭がとれたんだ！一緒に食べよう！」

「おま、人の家まで来て『奇遇だな』はないでしょう」

竜巻、台風、暴風女、村雲宗治である——!!

「フ、うっかりだ。ついでにツヤツヤなドングリやろう。糸を通して首飾りにすると良い」

「なにこれ」

「たまたま寄った山で『山の王』をかたる二足歩行の猪を見つけてな。熊からウリ坊を守ったお礼に貰った。御守りになるぞ!」

村雲は首から下げたドングリを見せてきた。

「私は『海の王』として貝殻を渡した。気に入ってくれたようだったぞ!」

「ヨカッタネ」

二足歩行の猪、めっちゃ心当たりあるんだけど。

「そういえば鮭だ! 私は蒸し焼きが食べたい!」

蒸し焼きね、美味しいよね。

「鮭大根以外考えられない」

あー鮭大根も良いよね。

「ここは派手にかぶと焼きだろ!!」

かぶと焼き、作れるかな……?」

「おい待てなんでお前らがいるんだ」

なぜか後ろに宇髓と富岡とついでに白津湯さんがいた。

「私が呼んだ!」

うん、知ってた。

結局家で鮭パーティーをして、皆が帰った後に狭霧山から戻った錆兎が悔しそうな顔をしていた。

「柱三人を呼んでの手合わせ、さすがは流だ。見たかった……!」
どこら辺がさすがなの?

ちなみに俺は料理をしてたから、手合わせに参加していない。

錆兔には今度やるとき呼んでやるよと言ったが、その時はもう二度と来ない。

「伝令イー……雨柱、白津湯渦桃！上弦ノ弍トノ戦イデ死亡!!ソノ継子ノ村雲宗治ト花柱、胡蝶カナエ重傷！」

二週間後、白津湯渦桃の訃報が鴉によって伝えられたからだ。

真菰さんと炭治郎

錆兎さんの稽古は厳しかった。

何回も木刀で叩きつけられ、気絶した。何回も怒鳴られた。でも、得るものもあつたのだ。

——隙の糸。

俺は鼻がいいから目よりも匂いで周りを嗅ぎ分ける方が早いということに気づいたのだ。

その糸は相手の隙、その一瞬だけ表れる。たぶん糸が斬れれば俺は相手に攻撃を入れられる。錆兎さんは速すぎて体が追いつかないけど。

でも、糸が見えると同時に欠点も分かつたのだ。

「手を抜くな！俺を殺す気で掛かってこい！」

俺は、人を斬れない！！

例え斬っていないなくても、相手に刀が届きそうになってしまう、そう思うだけで動きが鈍るのだ。そして、そんな隙を許す錆兎さんではない。

もちろん原因は分かっている。禰豆子を斬ってしまった事だ。強い後悔が、俺の動きを止める。刀を振るえなくする。

殺してしまうかもしれない——、その恐怖が心の底ですつと燻っていて。

「何度も言うが俺は強い。俺はお前ごときに殺されない」

錆兎さんが地面に伏した俺を起こす。

「そんなこと、分かっているんです……！でも、体が動かないんだ！！」俺は泣いた。自分の未熟さに。

禰豆子がずっと苦しんでいるというのに、俺は全然前に進めない。何時までも過去に囚われ続けて、ちつとも強くなれない。

禰豆子を守ると決めたんだろう、竈門炭治郎！立ち上がれ！

何度己を叱咤しても、俺の体は動かない。

「しばらく、稽古は止めにする」

錆兎さんが立ち上がった。

「そんなつー」

「お前がその心を変えられない限り、この稽古は時間の無駄だ」

錆兎さんは、いつもの厳しい表情ではなく、悲しみを滲ませていた。

「なぜあの人がお前の斧を避けようとしなかったのか、よく考えろ」

あの人のこと……。

「真菰に来させるから、お前が自分の心を克服できたと思ったら真菰を通じて俺を呼べ」

錆兎さんが背を向ける。無地の羽織は、錆兎さんの心の潔白さを示すようだ。

「優しさと臆病は違うぞ、炭治郎」

「でね、炭治郎。わたしの親友がうっかりして、錆兎と義勇に……」

暗いままの炭治郎に、真菰は表情を曇らせた。

先日、錆兎から稽古中断を言い渡されてから炭治郎はずっとこの調子だ。一年以上経ってやっと明るくなったと思ったのに、逆戻りしてしまった。

こんな調子では新しい型を作る事もできない。

正直、今の炭治郎は実力だけで言えば最終選別なら楽に突破できる。しかし精神面で大きな問題を抱えていた。

鬼を目の前にした時、炭治郎が鬼を斬れるかどうか、それは実際にやってみないと分からないのだ。

真菰がいくら慰めたって意味はない。なぜならこれは炭治郎の間

題なのだから。

逆に、助言をするならば炭治郎を知らない人間の方が良いのではないか？

真菰はそう思い始めていた。

「そういうえば、炭治郎にずっと見せたいものがあつたんだ！炭治郎は熱いの我慢できる？」

「炭焼きをしていたので、熱いのは大丈夫ですけど……」

「じゃあ二週間後に一緒に遠出しようね。戦国時代より前から続いている雨乞いのための『剣舞』を近くで見せて貰おう。水の呼吸の原型になつた、すごい舞なんだ！」

一門古流武術道場、その師範が代々踊る剣舞がある。

八月の下旬に毎年あるそれは、奈良時代より伝わる雨乞いの舞であり、その儀式は阿賀根山の山頂にやぐらを組んで行われる。

数年ほど前まではひっそりとしたものだったが、近年は麓で露店ができるなど、町全体で祭りのような雰囲気になるのだとか。

俺は真菰さんから聞いた話を反復していた。

「炭治郎、食べたいものがあつたら言つてね。買つてあげるよ」「ありがとう、っごいます……」

あたり一面が提灯の赤色に照らされる様子は綺麗で、川に見たことない形の船が浮かんでいるのを見るのも新鮮だ。

だが、いかんせん人が多すぎる。

真菰さんは慣れているのか、上機嫌に色々なものを買っているが、俺は疲れ果ててふらふらだった。

「炭治郎、もしかして体調悪いの？舞は深夜に行くから今の内に仮眠

をとつといた方がいいかもね」

「気を遣わないで、大丈夫です……」

「なに言ってるの」

真菰さんに連れられて、大通りから少し外れる。そこには数本の木がひっそりと生えてて、俺は木にもたれかかった。

「わたしも昔ここに住んでたからね、こういう秘密の場所とか詳しいんだ。少し休もうか」

笹にくるまれたおにぎりを手渡される。俺は水筒を傾けながら、おにぎりを受け取った。

水が喉を通る感覚が心地良い。おにぎりをほおぼって、少し元気が出てくる。

「わたしは道場の門下生だから、本当はお手伝いに行かなきゃいけないんだけど……炭治郎、体調はどう？」

「げ、元気です！真菰さんは俺に構わず行ってください！」

俺は慌てて否定する。真菰さんに非常に申し訳ない。

「うーん。一人で置いてくのも心配だしなあ……」

首を捻る真菰さん。どうしよう。

「おや、真菰さんですか？」

真菰さんに話しかけたのは眼鏡をかけた細長い男の人。優しい匂いがする。

「加賀見さん！お久しぶりです」

「お久しぶりです。君も舞を見に来たんですね」

「はい。門下生なので」

真菰さんと知り合いのようだ。あたふたして二人を見ていると、男の人と目が合う。

「そちらの少年は？」

「わたしの弟弟子です。竈門炭治郎といいます」

「はじめまして！」

俺が頭を下げると男の人はクスクスと笑った。

「はじめまして、加賀見銅鏡といます」

「加賀見さんは現役時代に『水柱』だったすごい人なんだよ」

ミズバシラってなんだろう？

『柱』っていうのはね、鬼殺隊に九人しかいない最高位の階級なんだ。水の呼吸を使う人を水柱って言うんだ」

「え、じゃあミズバシラのイチモン様も、『柱』の一人だったんですか？」

真菰さんの笑みが硬直した。

「一門君の知り合いですか？」

加賀見さんがずいっと近づいてくる。

「そういうのではなくて、俺は、あの人を……き」

「わわわ、炭治郎、わたし早くお手伝いに行かなきゃ！炭治郎ももちろん来るよね?!迷子になっちゃうもんね！」

「いえいえ真菰さん、彼は相当顔色が悪いですよ？時間になったら私がかわりに連れていきましよう」

俺は、一門様と親しいであろうこの人に、真実を言うべきなのだろうか？

「それこそ加賀見さんに申し訳ないです！炭治郎、行こう！」

いや、この考えこそが逃げだ。俺は、逃げてはいけないんだ。

責められるような事をしてしまったのならば、しかるべき責めを受けなければいけない！

「いえ、真菰さん！俺はここで休みます！」

「ええ!？」

「絶対に休みます！加賀見さんと一緒に休みます！」

真菰さんは、困惑の匂いをさせながらも、俺の手を引くのを止めた。

俺の耳に口を近づけると、ぼそりと呟く。

(あの時の事は絶対に話しちゃだめだからね)

「すみません！」

「加賀見さん、炭治郎のことをよろしくお願いします」

「はい。引き受けました」

真菰さんはぺこりと会釈して、人混みに消えてしまった。

「で、炭治郎君」

「はいー!」

どうしよう、真菰さんに口止めされてしまった。

せっかく加賀見さんと話せるようになったのに……。いや、約束は守らないと。

「一門君と何があっただんですか?」

「なんでもないでつひゅ!!」

「君は分かりやすいですねえ……。で、何があっただんですか?」

なぜ分かったんだ!?これが鬼殺隊の最強格!!

後日、一門流に手紙が届く。

「う、うそーん……」

流は手紙を開き、そう呟いた。

感謝

「一門君から、妹さんを庇ったんですね？」

「違いまっひゅ！」

「その妹さんは、もしかして鬼ですか？」

「違いまっひゅ！」

「あ、分かりました。鬼になった妹さんを守るため、一門君に斬りかかってしまったんですね」

「……………」

「どうしてバレたんだ!？」

「加賀見さんは質問しているだけなのに！」

「凶星ですか……。ついでにもうひとつ。妹さんは、まだ生きていますか？」

「彌豆子は、生きています。生きています……」。

「大丈夫ですよ、炭治郎君。別に言いふらしたりしませんから」

「視界が滲んだ。加賀見さんからは、嘘の匂いがしない。」

「生きてます、生きてますけど……。一門様を庇って俺が斬って以来、目を覚まさないんです。もう一年以上経つのに……」

「一門君が、庇われた……?」

「加賀見さんが、初めて笑顔以外の表情を見せた。」

「麓から点火を初めて下さい！くれぐれも火事には気をつけて！」

「倅花ちゃんがビシバシと指示をしていき、舞の準備をしていく。松明を持った男たちはみんな汗を流して走っていった。」

「へえー、火を焚くんだ。」

「十年前くらいはこんな派手じゃなかったと思うんだけど。すごく熱い。」

「何度見ても圧巻だな！この様子は！」

主に横にいる人間のせいだ。

「露葉殿の舞は『行雲流水』という言葉が正にふさわしい！決まった形を持たず、五つの型を半刻ほどの舞のうちにとのように入れていくのが毎年変わる！しかし彼女自身に迷いは見られず、剣術の全てを尽くして舞う姿は年を追う毎に洗練されている！これは唯人には出来ない事だ！」

「そうだな」

煉獄杏寿郎、鬼殺隊の炎柱。どこを見ているのかいまいちよくわからない。

俺は煉獄の方に顔を向けずに答えた。

へえー、毎回変わるんだ。

十年前くらいはこんなに派手な舞じゃなかったと思うんだけど、すごいね俺の妹。

「俺との手合わせの時も、その足運びは非常に捉えにくく、『水』がすり抜けていくような剣技に何度感服したことか！指南書だけでは得られない物を、俺は彼女から教わったといつても過言ではない！」

「そうだな」

へえー、煉獄に稽古をつけたんだ。

炎柱になつちやうような才能の固まりに稽古をつけたんだ。すごいね俺の妹。

すごいなー、すごいなー……………。

ちよつとこいつ言ってる意味が分かんないんだけど!!

露葉ちゃんヤバくない!?人間止めてない!?なんでただの田舎道場の師範が呼吸使ったりしてんの!?どういうこと!

俺さつきから『そうだな』しか言っていないんだけど！『そうだな』
じゃなくて『そうなの!?!』て叫びたいわボケエ!!

「さすがは一門殿の妹君！」

その一門殿の予想のはるか上に行く優秀さ！

攸花ちゃんが『双子なのに、私には剣の才能が無い……』なんて言っ
ていたが、こんな人間が何人も居たらたまったもんじゃねえよ！

もはや神に愛されてるレベルだわ！

「その顔……一門殿にとって、露葉殿はまだまだというわけか！始ま
りの呼吸の記憶を持つ貴方にとって、あれほどの才能も驚くに値しな
いとーやはり俺もまだ未熟！精進せねばだな！」

「精進せねば……」

「む！自らを戒めていたのか！これは失礼！」

露葉ちゃんに一体何が起こったんだよ。

露葉ちゃんの方が実は強いとか！アリエール!!

と、とりあえず……負けないように俺も頑張ろう……。

「兄として、不甲斐なし……」

「露葉殿の友として、不甲斐なし！」

あのさ、さつきから気になってたんだけど、君たちどこで知り合っ
たの？

「どうしても、斬ることに躊躇いを感じてしまうと」

「はい……」

結局、俺は加賀見さんに全てを話してしまった。加賀見さんはとて
も話を聞くのが上手い人だ。

ついでに自分の悩みも打ち明ける。

「助言。というよりも実例と言いましようか？ 私は君によく似た子を知っています」

加賀見さんは何かを懐かしむように、空を見上げた。

「その子がかつて、実の親に虐待されていました。姉として何度も兄弟を庇い、日銭を稼いで、ボロボロになりながら生きていました。私が彼女を見つけた時も、酷い有り様だった」

加賀見さんは眼鏡を外した。

「それでも小さい子は、どんな簡単なことでも死んでしまう。一番下の弟は蹴られて死に、妹はいつの間にか居なくなっていた、と言っていました。最後に残ったのは四つ下の妹だけだったそうです。そうして、ある日、その妹が無理やり連れて行かれる様を見て……実の親を、その手で刺し殺したのです」

加賀見さんは一度言葉を切った。俺は不意に涙が流れてきた。加賀見さんから、酷い、悲しみの匂いがしたから。

「私は偶然その場に居合わせました。彼女の妹は逃げてどこかへ行ってしまった。彼女は呆然と、親の死体を眺めていました。私はすぐに彼女を連れて保護しました。一年間は全く喋りませんでした……これを聞いたのも、五年後の事でした」

その人は、俺のあり得たかもしれない未来だったんだ。禰豆子が身を呈して止めてくれた未来。

もしあの時、俺が一門様を殺していたら、俺はどうなっていたんだろう。人を殺すというのは、そういう事なんだ。

「行き場を失った彼女に、私は呼吸を教えました。『自分の命をかけて、誰かを守るのなら』といって、鬼殺隊士になることを望んだからです。でもやっぱり彼女は手合わせとなるとどうしても動きが止まってしまう。今の炭治郎君と同じですね」

「俺と、同じ……」

「私はそれを見て、『ならば鬼狩りになるな』と言いました。実を言うと、彼女には普通の人生を送ってもらいたかった。でも、彼女は次の日から変わりました。心を深く閉ざして、過去の事を全て忘れたので

す。全てを忘れる事で自分の過去を無かった事にした……。あれほど自分の発言を後悔した時はありませんでした」

過去を忘れる。その子は、どのような気持ちでその選択をしたのだろうか。

加賀見さんはふつと笑って立ち上がった。

「その後彼女はめきめきと力をつけていき、弟子をとったら過去も振りきれたみたいで何とかなりました。めでたしめでたしです！」

「ええ!？」

話はあっさり終わってしまった。

なんとというか、すごく、雑だ!

「これは実際にあつた事であつて、炭治郎君にこういう風にしてほしいとかではありません」

加賀見さんは困惑している俺の額に指を当てた。

「ただ、一つ言えるのは、『自分を後ろめたく思う必要はない』という事です。真菰さんも鱗滝さんも、君が幸せになる事を願っています。一門君だってそうです。そうでなければ鬼を庇うなんて事はしません。君は彼らに対して感謝こそすれ、気負う必要は無いのです」

「でも、俺が禰豆子を斬つた事は紛れもない事実です!それを後悔しないなんてっ」

「君はもう十分に後悔して、苦しんだのでしょう?なら、そろそろ前向きなさい。禰豆子さんは君を守るために、君に幸せになつてほしいから、人を庇つた。他でもない君自身が彼女の行動を誤解してはいけません」

『幸せかどうかは自分で決める。大切なのは、今、なんだよ、お兄ちゃん』

『前を向こう。一緒に頑張ろうよ。戦おう』

『謝ったりしないで。お兄ちゃんなら分かってよ。わたしの気持ちを分かってよ』

「逃げるな。竈門炭治郎」

心の霧を、一気に晴らされるような、そんな感じがした。

彌豆子、ごめんな。こんな兄ちゃんです。

でも、俺は彌豆子と一緒に居たいんだ。彌豆子とまた、笑って、青空を見たいんだ。

「彌豆子は、俺を許してくれるでしょうか……？」

「それを聞くのは私ではないでしょう」

山のしたから徐々に火が上がっていくのが見える。綺麗だ。

「行きましようか、炭治郎君」

俺は加賀見さんに手を引かれて立った。

「加賀見さん、ありがとうございます」

「どういたしまして」

彌豆子が起きたら、まず謝ろう。そして。

そして、彌豆子に伝えよう。

俺の気持ち、俺の出会った人、彌豆子が寝ている間に起こった全ての事を。

感謝を。

へタレ柱

「あー！わたしも見たかったわ！露葉ちゃんの舞!!」

甘露寺蜜璃は腕をジタバタさせて、刀を振るった。

彼女の特別製の日輪刀は大きくしなり、鬼を切り裂く。

「だが、今年は流も行くからな。柱が夜中に三人も抜けるわけにはいかない!」

「それもそうだけど……」

蜜璃は今日だけの助っ人、村雲宗春を見た。

蜜璃は煉獄に代わり、臨時で炎柱の担当地域を巡回してたのだ。いつもの二倍になってしまいが、その為に非番の隊士が駆り出されたのである。

「わたしだって、今日はやることがあったんだぞ」

後輩への土産にカブトムシを捕まえる気満々だった村雲は、少し不機嫌だった。

腰にかごを引つ提げ、背中に虫取網をしよいながら刀を振るう村雲に、蜜璃はキュンとする。

(春さん、口調は格好よくて見た目は綺麗なのに中身が天然なの、すごくかわいいわ!)

「でもでも、見たかったものは見たかったのー!!」

煌々と燃え盛る炎の中、その人は居た。

ドン、と一定間隔で打たれる拍子にあわせ、その人は滑るように動きだす。

一点の狂いもなく刀が振られ、その人の頭にある鈴が、しやらんと音をたてた。

舞は止まらない、そのまま流れるように続いていく。

あれは、肆ノ型。打ち潮の原型か……？

炭治郎は目を凝らして、舞を見続ける。すごく複雑な舞だ。そして、美しい。

ヒノカミ神楽は、同じ型を延々と続ける物だったから、迫力はあっても芸術性はあまりなかった。

同じ剣舞でも、違う。

この舞は進むごとに動きが洗練されていく。剣術を学んでいたからこそ分かる違いだ。一年前の炭治郎には分からなかっただろう。

まるで別人になっていているかのようだ、と炭治郎は思った。匂いも変化していく事に驚く。

弐ノ型、壺ノ型。

順繰りに舞の中で振るわれるそれは、もしかしたら鱗滝さんよりも冴えている。

参ノ型、流流舞い――。

水飛沫が上がった。

剣先から生まれた水が軌道を描いて、川のように繋がっていく。

静かにしなければいけない、と思いつつも炭治郎は感嘆に息を吐いた。

『炭治郎君、水の呼吸を学ぶ者として、今から見る舞は非常に参考になります。頭に焼き付けなさい』

炭治郎は加賀見に言われた事を思い出す。

この舞から得られる物は全て得る。炭治郎は動き、筋肉の弛緩、呼吸の仕方まで、全てを観察する。

水の呼吸 伍ノ型、干天の慈雨。

これだけは、今と何も変わらない。

その人は刀を水平に滑らすと、静かに鞘に納めて、祭壇に礼をした。やぐらから降りるときに再び礼をすると、門下生の人たちと共に、山を下っていく。

その姿が見えなくなると、あたりの緊張がほどけていく。

「す、すごかったです！すごく綺麗で、一太刀をとつても全部シュンシュンって！なのに全然音は鳴らないし、水も見えるし！」

炭治郎は興奮そのままに加賀見に語った。加賀見はそんな炭治郎を微笑みながら相づちを打つ。

「俺、新しい型を作れるような気がします！早く狭霧山に帰って刀を振りたいです！」

「はい。頑張つて下さいね、炭治郎君。でもまだ帰るのは早いですよ。加賀見は右に人差し指を向けて、少し声を潜める。

「実は、一門君がそこに居るんです」

「え!?あ、本当だ!!」

炭治郎は驚いて大声を出す。その大声に反射的に振り返った流は、炭治郎とぼつちり目を合わせた。

流は炭治郎を認識した瞬間、全身の筋肉を総動員させて、その場から逃走した。

「あれ、消えた!?!」

「一門君……」

炭治郎が一瞬で消えた流を探してキョロキョロしている横で加賀見は額に手を当てた。

(ゲエ!!炭治郎や!ムリ、俺の心が死んでしまう!!!)

そんなことは思っていない。

炭治郎は俺が相当のトラウマだろうから、近づくのは止めておこう。

全速力で森を駆け抜けながら、俺は家を目指した。別に、ビビってるわけじゃないし。俺、ヘタレじゃないし。

いや、いま気にすべきなのは炭治郎じゃない。露葉ちゃんの事だ。

もしも『記憶による呼吸の伝承』が実在するとすれば、露葉ちゃん
は、絶対にそれだ。

確信を持てる程に、彼女の舞は素晴らしかった。

とりあえず、本人に話を聞こう。

下弦の弑が言った通りなら、ちよつとあの人が変わったようになる舞は心配だし。

いやーそれにしても、俺の立場なさすぎワロタ!!

一門家が予想以上にベリーハードだった件について。

俺が来たことを伝えると、攸花ちゃんは何も言わずに俺を部屋に通した。

そこには疲れてぐったりした露葉ちゃんがいた。

「兄さん、来たんですね……」

「露葉」

露葉ちゃんは力なく笑んで、俺を向かいに座らせる。

「分かってますよ、兄さんの言いたいことは。わたしは露葉です。他の誰でもありません」

「知ってたのか？」

「はい。お祖父様から全て聞きました」

やっぱりお祖父様は全て知ってたらしい。よく考えたら、一門家の記録を全て処分したのもあの人だ。当然だろう。

「兄さんは気づいてたんですね……。ずっと昔から」

「いや、違うけど」

露葉ちゃんは寂しそうに、ふ、と笑って首を振った。

「誤魔化さなくても大丈夫です。兄さんが何も言わずに家出をした理由だって、わたしは知っています。一門家の業を一人で背負うためでしょう？わたしは昔から臆病だったから……」

あの、露葉さん。一門家の業ってなんすか？

「一門の名を持つ鬼狩りは必ず上弦の壺に殺される。彼は——巖勝殿は、それほどまでにわたし達を恨んで……」

さらっと妹の口から上弦の壺の本名出たぞオイ。どういうことやねん。

なんちゆうベリーハードな業やそれ。ほんまワケわからんわ。誰か説明してや。

「知っているでしょう？巖勝殿が、鬼になった時の事。初代様はそれを止められなかった事をずっと悔やんでいた……だから、子孫にそれを託した」

「そうなのか」

子孫に託すものがえげつなさ過ぎるだろ初代様！

あと露葉ちゃん、お前も知ってんだろ的なノリで話さないでくれる!? ぜんっぜん知らんから！

「でも、兄さん……わたし、鬼が怖いです。記憶にある上弦の壱に、どうやっても勝てる気がしなくて……！」

「まあ上弦の壱だし……」

まず鬼のナンバーツーを相手に戦う事を想定してるのがヤバイよ。初心者がいきなりエベレストに挑むくらいの心構えになってるよ。

「兄さんが何も言わずに家出をした理由にだって後から気付きました。わたしを置いて一人で上弦の壱に挑むため」

「だ、」

誰がそんな自殺行為するかボケエ!!

「日輪刀を持った兄さんを見て、今まであやふやだった記憶もはつきりしました。でもやっぱり怖くて……不甲斐ない妹で、ごめんなきいっ！」

露葉ちゃんはとうとう泣き出してしまった。

俺は全くもって彼女の言っている事が分からない。黒死牟が生理的に無理らしい事しか分からない。

それでもフォローは入れねば。

「謝罪する必要はない。一門家の使命など考えず、俺が選んだ道だ」

実際は押し付けられた、だが。

とりあえず露葉ちゃんはそのままでいいんだよーと遠回しに伝える。

「鬼は絶対に俺の代で根絶する。お前は、普通に生きていいんだ。押し付けられた自分じゃなくていい」

俺の代で（炭治郎が）根絶する。

露葉ちゃんも大切な妹だし。とりあえず鬼退治が全力で嫌なのは分かった。俺も上弦の壱と戦う運命知ってたら全力で逃げてたわ。

「兄さん……。ありがとう」

露葉ちゃんは泣くのを止めると、俺に頭を下げた。そしてそのまま畳に頭をつけて動かなくなった。疲れてるんだろうけど、この体勢で寝るか？フツ。

「ようやく……。男の顔になったな、炭治郎」

炭治郎は錆兎に向かって刀を構えた。錆兎も、今日は真剣を握っている。

彼らを見守るのは真菰に義勇、それと加賀見だ。

「勝負の合図はこの硬貨が落ちたとき。二人とも準備は良いな？」

義勇が硬貨を上弾く。それが回転して、地面に落ちたと同時、炭治郎は動いた。

舞の動きは、水の呼吸の真髄だ。

全てに繋がる体の動かし方、それを炭治郎はわずかながらにも習得した。

刀を上段に構える。

『お前の人生全てをかけて、妹を取り返せ！』

炎が燃えるような音が炭治郎の口から漏れる。

「水の呼吸 拾陸ノ型——火車!!」

「水の呼吸 参ノ型——流流舞い!!」

炎を纏った一閃を、そのまま錆兎に振り下ろす。錆兎も同時に技を出した。

「ハアアアア!!!」

炭治郎は流流舞いによって流されそうになる力を、必死に押し止めて、錆兎の刀を押す。

あと少しで届く！

炭治郎がそう確信した時、錆兎が笑う。

「腹ががら空きだ、炭治郎」

「え!？」

炭治郎は錆兎に蹴られて地面に転がった。

「動きが制限される弱点はあるが、いい技だ。水の呼吸にはない力強さがある。認めよう、炭治郎！」

錆兎は炭治郎の手を取り、体を起こす。

「炭治郎の水の呼吸は、水の激しさ、畏れにあるんだね」

『『炎雷』と似たものを感じた』

「さすが一門君の弟子というか、いえ、何でもありません」

炭治郎は感極まって泣き出した。

「皆さん、本当にありがとうございます！これで、俺はやっと前に進めるっ！」

「最終選別まで二週間、まだやることはあるよ。頑張っつてね、炭治郎」
真菰は炭治郎の頭を撫でた。

義勇は大きく頷いて、辞書のような厚さの紙束を出した。

「師範殿がカナヲの為に作った最終選別の手引き書は、こっそり写して持ってきた。まずこれを読み込め。そうしたら流から受け継いでる地図も渡す。最終選別は過酷だ。用心はするに越したことはない」
「はいー」

「ついでに罾の作り方も教える。誰かを助けた時や、寝るときに絶対

に必要になる」

「はい！頑張ります！」

加賀見が義勇の言葉を聞いて何ともいえない表情になっている事に気づく人間はこの場にいなかった。

炭治郎は悪くありません。彼は素直なだけです。

「よし、頑張るぞ」

炭治郎は気合いを入れて、藤襲山に入る。

とうとうこの時が来た。最終選別、この山で七日間生き残れば鬼殺隊に入れる。

義勇さんから最終選別のいろはを教わった。食事の確保に応急処置の仕方、時間の使い方。

『最終選別もまた一つの鍛練となる。常に己の高みを目指せ。そして自分のするべきことを見つけろ。無茶はするな』

義勇さんは意外によく喋る事を知った。

黒髪と白髪のそっくりな少女たちが最終選別の説明をしている中、炭治郎は目を閉じて嗅覚に意識を集中させる。

最終選別は二人以上で行動する事が望ましい。義勇さんは錆兎さんと、真菰さんはその場で知り合った姉妹と共に行動したそうだ。

俺も始まる前に見つけなければ。

選ぶ、というのも烏滸がましいが、なるべく強い人を選んだ方が安全ではある。答えてくれるかは分からないけど、話しかける意味はありそうだ。

鼻を研ぎ澄ませ、感情を嗅ぎ分けていく。

強い人というのは自分の鍛練を信じ、落ち着いている人の事だ。

——無理無理無理怖い怖い死ぬ死ぬ死ぬ……。

不動心、不動心だ。炭治郎！

——例えここで生き残っても死ぬ。一人で死ぬ。もう無理ですよ俺は。

あの桃色の袴の子、強そうだ！

——ああ、俺って今日が命日なんだろうな……。どうせ俺が死んでも誰も悲しまないんだろうな。

炭治郎はくわつと目を開けた。

説明が終わると同時、すぐ横に居た少年の襟元を掴んだ。

「どうしてお前はそんなに恥をさらすんだ！最終選別にどうして来たんだー！」

「ヒイイ!!いきなり酷い事言われた！」

「帰れないのか!?帰る場所が無いのか!？」

「本当は来たく無かったよオ！でも育手のじいちゃんにビンタされて来るしかなかったんだよ！俺は死にたくないけど、がえったらごろされるうう!!」

「なら俺と一緒に来い！お前を守ってやるから！もう泣くな！」

炭治郎は怒鳴った。このままだと本当に少年が死んでしまう気がしたのだ。

「ハアア?!?!お前優しすぎでしょ！ありがとうございます!!!」

瞬時に泣き止んだ少年、名を我妻善逸という。

とりあえず山の中に入り、周りを警戒しながら歩く二人。鬼が一体だけ来たが、炭治郎が切り伏せた。

善逸が炭治郎の背中を指差す。

「炭治郎、そのでかい箱には何が入ってるの？」

「これか？そろそろ目的地だから、そこに着いたら見せてあげるよ」

につこりと笑う炭治郎。地図を片手に、大きな荷物を持って歩く様

子はまるで登山者だ。

第一印象がヤバかったが、普通に明るい奴だと善逸は認識を改める。

数分ほど歩いた所で日が上り、川べりで二人は腰をおろした。

炭治郎はうきうきとした様子で荷物を広げる。

「最終選別に向けて、沢山準備してきたんだ！火打石に水筒、包帯——」

どんとと箱から取りだし並べていく。それなら善逸も持っている。

「そして鍋に、米、たくあん——」

善逸は驚いて見ていた。

「義勇さんに貰った罨作り用の工具、最終選別の手引き書——」

善逸は驚きを通りこして真顔になった。

炭治郎が一層幸せそうな顔で黒い玉を取り出す。

「会ったことは無いけど、流さんに貰った花火だ！最終日の朝に打ち上げよう!!」

「炭治郎、スゴいね……」

善逸は乾いた声で笑った。

炭治郎のすごさは止まらない。

兄弟子ではなく宇髄天元と同じように昼日中に鬼を殺しに行き（善逸は三回気絶した）

兄弟子ではなく宇髄天元と同じように夜中に火を焚いて鬼を誘き寄せた上で罨にはめ、後ろから頸を切り。（善逸は五回気絶した）

兄弟子ではなく宇髄天元と同じように服を脱いで自然と一体化しようとし（善逸は普通に気絶した）

そんなんで哀しそうな顔で

「鬼はかわいいそんな生き物だ……」

とのたまう炭治郎に、善逸は本気でビビった。

(あれだけ積極的に鬼を殺しにかかっというて、どういふ事だよ……!!
ヤバイよこいつ!!)

炭治郎と善逸が頑張ったおかげで、最終選別の死者は数人だった。
でもやはり入隊を諦めた人が多かったので、五人しか入らなかった。

彌豆子

「流さん。これ、きれいだねえ」

「あげるよ」

「ありがとう!」

俺は彌豆子にツヤツツヤなドングリの首飾りを渡した。彌豆子は嬉しそうに笑ってドングリを眺めている。

やっば、彌豆子めちやめちや可愛いわ!!!!

俺はドングリをくれた村雲に人生で初めて感謝した。

露葉と攸花も立派な大人になってしまったし、彌豆子の可愛さが染みる。目に入れてもたぶん痛くないぜ。

俺はそもそも友好がある女性が村雲と真菰しかいない上、村雲はもはや野生動物みたいな感じだし、可愛さが足りないのだ。周囲に。

「お兄ちゃん、無事かな……?」

「安心しろ。大丈夫だ」

物憂げに首を傾げる彌豆子かわええええ!!!!

俺が今日ここに来たのは、炭治郎に会うためである。今日は最終選別の最終日、順調に行けば夜までには戻ってくる筈だ。

加賀見さんから十通目の催促の手紙が来て、とうとう覚悟を決めた俺は狭霧山に久しぶりに帰ってきたのである。

彌豆子がヒョコツと起きていたので、一緒に遊んでいた。最初はびられるかと思っただが、普通に笑って話しかけてくれた。天使や。

「ごめんな。ひどい事言っただけ」

「ううん。大丈夫だよ!」

ホワアア!! 尊死!!

癒しである。このかわいい笑顔の為ならハラキリ宣言できますわ。普通に喋ってる事には驚いたが、精神年齢はやはり少し低めだ。人間の頃の彼女なら年上の俺に敬語を使っただろうが、それは無く、使ってる言葉も幼い。まあ起きて元気になっている様子だから満足だけれども。

炭治郎はまだ帰ってこないだろうから、まだまだ禰豆子を独り占めだ。フへへ。

「お兄ちゃん!!」

「フベラッ!」

縁側で足をぶらぶらさせていた禰豆子が唐突に立ち上がり、扉を開いて外に出ていく。

「禰豆子！起きたのか!？」

「お兄ちゃん!」

そこには抱き合つて再会を喜ぶ兄弟の姿があつた。

「禰豆子、本当にごめんな。俺があの時、ちゃんとしていればお前は傷つく事も無かつたんだ！本当にごめんな!」

「いいのお兄ちゃん。わたしはお兄ちゃんが元気になってくれて嬉しいよ。もう謝らなくていいんだよ」

禰豆子が優しく炭治郎を撫でる。

炭治郎は顔をぐちゃぐちゃにしながら「ありがとう」と繰り返していた。

「禰豆子……こんな俺でも一緒に居てくれるか？必ず人間に戻してやるから、お兄ちゃんでもいいか……?」

「もちろんだよ！わたしのお兄ちゃんはお兄ちゃんだけだもん!」

太陽のような微笑み。俺は、正気に戻った。

俺、ヤバかつたわ。ロリコンになつてたわ。変態以外のなにもの

も無かった。

禰豆子を離れた炭治郎が今度はスライディング土下座を決めて俺の方に来る。

「一門様ア!!すいませんでした!ありがとうございます!」

炭治郎の輝かしい目が俺の心を抉る。

「あなたのような優しい人に会えて俺たちは本当に恵まれていました!加賀見さんから聞いたんです!鬼を庇うのは常人じゃできない事だ、って!」

いや確かにその通りだけども、元はと言えば俺が悪かったというか。

「本当にありがとうございます!」

地面に額がのめり込んでいる炭治郎。

俺はとても居たたまれなくなった。

「どうして困惑してるんですか?」

クソツ、これだから鼻の良いガキは……!」

「あ、俺は竈門炭治郎といいます!はじめまして!」

「とりあえず顔を上げろ」

全力で体を起こす炭治郎。なんか異常に元気。そして上半身裸である。どういうことや。今は冬だぞ。

一旦仕切り直す為に俺は咳払いをした。

一門流、水柱モードオン!

「よくやった、炭治郎。最終選別を越えたという事はお前も鬼殺隊士になったという事だ。常にそれを心がけろ」

「はい!」

「本来、鬼を連れるというのはご法度だ。これからお前は様々な困難に会うだろう。鬼からはもちろん、他の鬼殺隊士に命を狙われるかも知れない。だがお前は絶対に人を傷つけるなよ。禰豆子が人を襲わないことと共に、お前たちが鬼殺隊に有用であることを証明しなければ、決して受け入れられる事は無いと思え」

「はい！」

「鬼を人に戻す方法というのは全く分かっていない。なぜならいまだかつて鬼を人に戻す試みをした者はいないからだ。お前たちは周りから拒絶されるだろう。覚悟は出来ているな？」

「もちろんです！」

「これは餞別だ、大切に使い。健闘を祈る」

「ありがとうございます！」

俺は黒の刀袋を渡した。裏地もしっかり模様入りの、結構高いやつである。

事前に台本を考えて覚えてきたかいがあつた。すらすら言えた。

しかし微妙な間が空いてしまったので、疑問をぶつける事にした。

「あのさ、何で服着てないの……？」

「鑄兔さんがおっしゃったんです。兄弟子の流さんという方が『気空一体』という特殊な訓練をしていた、と。俺も弟子として、鑄兔さんや義勇さんと同じようにしました！」

「……………」

どっから漏れたんだその情報はアアアア!!!!

俺の黒歴史が知らぬ間に伝わっているウウ！誰だ!?誰が漏らしたんだ!?

!!
インテリロンゲメガネだな！加賀見道鏡だな！あいつに違いはない

「一門様は流さんを知っていますよね！どんな方なんですか？」

うん？もしやコイツ、俺がその流さんと気づいていない……？よし、黒歴史の正体が知られない為に、俺が流さんであることは伏せておこうじゃないか。

でも、変な勘違いをさせないためにも断片的に事実を述べておこう。

「流は、大したことのない男だ」

加賀見道鏡、一体どうしてやろうか。フッフ……。俺は加賀見邸に全速力で向かった。

『流は、大したことのない男だ』

あれは、どういう意味だったんだろう……。

あの時の一門様からは大きな怒りの匂いがした。もしかしたら流さんと一門様は仲が悪かったのかもしれない。

あの時から二週間が経った。

禰豆子は四日に一回程起きて、それ以外はずっと寝るような生活を続けている。

鱗滝さんから、今日はお客さんが来るから家で待機していなさいと言われた。刀は朝に貰ったけど、それとは別に人が来るらしい。

夕方になって、禰豆子が目を覚ました。まだお客さんは来ない。心配だなあ……。

もしかしたら山の麓で迷っているかもしれない、と鱗滝さんが小屋から出ていった。少し不安になって、俺は禰豆子の手を握る。

「アタタ……、ここで合ってるのかしら？ごめんくださいーい！」
外から女の人の声がした。

「あ、今行きますー！」

扉を開くと、鬼殺隊の隊服に蝶のような羽織を着た人が立っていた。月に照らされたその姿は今まで見たどの女性よりも美しい。

「あなたが竈門炭治郎君？はじめまして、わたしは胡蝶カナエです。階級は『甲』。お館様の指示で、しばらくあなた達のお目付け役になり

ます」

手に階級の文字を浮かび上がらせると、俺に見せてくれる。

「遅れちゃってごめんさい。妹がなかなか家から出してくれなくて」

胡蝶さんはそう言うと、少し困ったように笑って俺に手を差し伸べた。

那田蜘蛛山から柱合裁判編 寝坊柱

「臭い」

そう言つて少年は眉を顰めた。

長い黒髪を結び上げ、黒曜石のような瞳で物憂げにこちらを眺める様子は絵になる。

顎は小さく、幼いながらも確りと意思の宿った目、居るだけで空気が変わるような美少年だ。

「具体的に言つと、酒臭い」

「ごめんなさい、現実逃避してました。」

俺の横であからさまに不機嫌さを醸し出しているのは時透有一郎。生きている時透兄である。ついでに霞柱である。

原作の弟に負けない天才っぷりを見せつけ、霞柱に登り詰めた。超ツンデレ少年。

「宇髄にいきなり飲まされた」

「言い訳？任務もあるんだから、自分の体調管理くらいしっかりしなよ」

ぐう……。

これは俺の健康を心配してくれてるだけなんだ。絶対そうだ。

「微妙に重心がずれてるよ。二日酔い？死んでも知らないから」

二日酔いつす。

『一門！いい酒が手に入ったぞ！派手に飲むぜ！』

『オボヴァア!!』

昔酒を飲んだ時、酒癖がとても悪い事を宇髄に聞かされ飲み過ぎには注意していたのだが、昨日は何故かほぼ無理やり飲まされたのである。

アルハラですよ！お酒は美味しかったです。

今は明日行われる柱合会議のため、各地に散らばっている柱達が集まってきている最中である。

そこで有一郎君に止められたのだ。

「そういえば、次々隊士が帰って来なくなる山の話やさつき聞いたよ。蟲柱が行くと思うけど、一門はどうなの？」

「まだ何も聞いていないな」

「もし行くことになったら代わるよ、死なれても困るし。それにしても、隊士が数十人も死んでいるのに、お館様は判断が遅すぎだ」

有一郎君、柱では珍しいお館様アンチなのである。

アンチすぎて彼が柱になる際は結構反対されていた。弟の無一郎でも良いじゃないかと柱合会議が揉めた。

お館様本人が頑として譲らなかつたので、彼になつたが。

それに有一郎君の言うことは一理あるから、柱達も嫌そうな顔をするだけで批判はしない。

「夜までには回復していると思うから、大丈夫だよ」

「あつそ」

有一郎君はぷんと顔を横にしてしまった。

かわい……いや、俺はシヨタコンじゃない。

「この感じ……十二鬼月かも知れませぬね」

胡蝶カナエは走りながら、共に山頂を目指す時透有一郎に声をかけた。横には錆兎がいる。

一門流は体調不良の為、有一郎が代わりに行く事になったようだ。

「たぶんね」

「わたしは負傷者の手当てをしながら移動しようと思います。霞柱様はわたしに構わず、先に行ってください」

カナエは常中が使えない為、一年前に比べて動きが格段に悪くなっている。二人がカナエに合わせてゆっくり走っている事に、カナエは気づいていた。

有一郎はしばし思案したのち、鑄兎に声をかけた。

「鑄兎、先に行こう」

「了解」

風を起こして姿を消した二人に、カナエは苦笑する。

「本当に常中が使えないのは苦勞するわね。炭治郎君と禰豆子ちゃんは無事かしら……」

一門流、起床。

え、ちよつと待って？

夜になってただけど、鑄兎もどっか行つちやつただけど？

「おつうちちゃん……」

「鑄兎ハオ前ガ寝テイル間ニ『那田蜘蛛山』ニ行ツタゾ。癸ノ隊士モ数名入山シタヨウダカラ、炭治郎モイルカモナ」

炭治郎と禰豆子が覺醒したりするやつだよね？二人とも殺されかけてた所を水柱が颯爽と助けに行くやつだよね？

「禰豆子大丈夫か？」

「普通ノ鬼殺隊士ハ殺ソウトスルナ」

あれー、これやばいやつやん。

寝坊しちやつたよ水柱。

「四半刻前ニ出タカラ、マダ追イツク、カモシレナイ……」

俺は布団をはねのけ、刀をひっ掴んで外へ転がり出た。

「オバカ！ソツチハ反対ダ!!」

やつちまつたアアアア
!!!!

人か鬼か

炭治郎は冷静さを保ったまま、下弦の伍、累の繰り出す糸の攻撃を捌き続けていた。

『強い鬼に会った時はむやみやたらに攻撃せず、時間を確認しながら機を伺え』。錆兎さんの教えを守れ！落ち着いて、呼吸を長く保つんだ)

糸が斬れないなら、糸を斬らずに敵に近づく方法を模索すればいい。

炭治郎は焦らず、ただひたすらに隙を狙っていた。

彌豆子のいる箱は、木の裏に置いてある。

「仲間を待ってるの？無駄だよ、この山には他にも僕の家族がいるんだから」

炭治郎は先ほど見た様子から、目の前の鬼が最も強いと推測する。ならば他の鬼に、炭治郎より強い錆兎や義勇、カナエのような一般隊士が負ける筈がない。

油断はしない。しかし、炭治郎はこの戦いに勝機を見いだしていた。

上記三人がもはや柱レベルの強さである事を炭治郎は知らない。

累は全く折れない炭治郎に痺れを切らした。あやとりをするように、手を広げて見せる。

「もうお遊びはお仕舞いだ。血鬼術——殺目籠」

(水の呼吸、漆ノ型 雫波紋突き!!)

炭治郎は全方位から迫る攻撃に水の呼吸最速の突きでもって対抗する。自分を囲う紅い籠に穴を開け、脱出した。

二年間の修行が役に立っている事を感じながら、全集中の呼吸を維持し続ける。

しかし目の前にいるのは十二鬼月の一人。余裕をもって次の攻撃

を繰り出した。

「もつと硬い糸がいいの？ほら」

「ぐっ！」

前より硬く、速い糸が炭治郎の頬を削ぐ。炭治郎は匂いで攻撃を察知しながら、本能的にそれを避けようとするも、傷が増えていくのを防げなかった。

炭治郎は油断などしていない、累が力を出していないなただけである。

「君は頑張った方だよ。でも、僕には勝てない」

一際鋭い糸に体をのけ反らせ、態勢を崩す炭治郎。自然ではない態勢に体が悲鳴をあげ、刀が手から滑り落ちる。

「しまっ……！」

——霞の呼吸、伍ノ型 霞雲の海。

炭治郎の視界を埋めていた紅い糸が白い霧に浚われ、消える。

高速で繰り出された細かい斬撃が、糸を全て切り裂いたのだった。

「下弦の……伍か。大した奴じゃないな。がっかり」

静かに姿を現したのは、炭治郎よりも更に幼い少年。霞柱、時透有一郎である。

「下がれ、邪魔だ」

「あのー君は……！」

有一郎は炭治郎を無視して累に斬りかかった。

「何度も僕を邪魔しやがって！しつこい！」

無数の糸が襲いかかる、がそれら全てを細切れにして有一郎は累に近づいた。

『何度も』って、違うけど……まあいつか。さよなら」

とん、と累の肩に有一郎が乗る。それだけのように炭治郎には見えなかった。しかし累の頭は消え、体だけが直立している。

有一郎は頸を切った上で、頭をちりじりに裂いたのだった。まばたき一つの合間に。

炭治郎は体が震えた。これは恐怖だ。

一瞬で鬼を滅殺した有一郎に、恐れを抱いたのだ。

「ど、うして……鬼の首を……?」

「鬼の最期なんて、ろくなもんじやない。全員口を揃えて恨み事だ。さっさと消えて欲しいんだよ」

心底不快そうな表情をする有一郎。鬼との戦いではひたすらに無表情であった分、炭治郎は少し安心した。

灰になりはじめ、累の体が倒れる。炭治郎は静かに立ち上がってその体に近寄ると、何かを求めるように揺れていた手を握った。

有一郎は炭治郎の行動に、更に機嫌を悪くする。

「鬼に情け? 頭おかしいんじゃないの?」

「この鬼からは、後悔の混じった悲しい匂いがします。人を食った事を悔やみ悲しむのなら、最期くらいはせめて、人と同じように接したい」

「鬼は大勢の人を殺した、絶望と憎しみに叩き落とした化け物だ。そんなのに人としての最期? 馬鹿げてる。地獄に落ちて当然だ」

有一郎は刀を振り上げた。炭治郎は有一郎の手にしがみつき、それを止めようとするが、累の体は二つに別れる。

「どうしてそんな事をするんですか!」

炭治郎の必死の叫びに、有一郎は唇を震わせた。

「ふざけるな!!」

有一郎の気迫に炭治郎は倒れる。

「こいつのせいで、鬼のせいで、どれだけの仲間が殺された!? 昨日まで笑ってた人が死んだ! 朝に挨拶した人が死んだ! 数秒前まで共に戦っていた人が死んだ! 全員が幸せに生きて、家族に囲まれていられるような人たちだった! 戯れ言を言うな!」

「言います！鬼は哀れな生き物だ、悲しい生き物だ！決してただの化け物なんかじゃない！」

炭治郎は負けじと声を張り上げる。

「化け物だ！人を嘲笑い、命を持って遊ぶどころが哀れで悲しい？殺された人、残された人の気持ちを考えてろ！」

「それでも！鬼は、人間だったんだから……。俺と同じ、人間だったんだから……」

炭治郎は涙を浮かべて、有一郎を見上げた。平静をとり戻した有一郎は、これ以上会話をする事の不毛さを知る。

「もういい。勝手に言ってる。俺は、鬼殺隊の駒として、責務を果たす」

有一郎は踵を返すと、木の裏にあつた箱を持ち上げた。それは、禰豆子の居る箱である。

「離して下さい！」

「この中にいる鬼は知り合い？お前、やっぱおかしいよ。鬼殺隊士が鬼を連れるなんて、前代未聞だ」

「妹です！でも鬼になってから二年間、人を食っていません！」

有一郎は答えずに、箱を開いた。禰豆子が重力に従い、地面に落ちる。

炭治郎はすぐさま禰豆子を庇った。有一郎を睨み付けて、刀を構えた。

「妹。そう、残念だ。同じ兄として、そこだけは同情するよ」

有一郎は炭治郎を蹴りあげると、禰豆子の頸を狙って刀の切っ先を突きつけた。

「止めろおお!!!」

炭治郎の叫び虚しく、霞が立ち上がった。

結局、守れなかった……。何もかも……。

炭治郎は、絶望に頭を伏せた。

鬼殺隊に入るといえるのは間違っていたのか？俺は、長男なのに、何も守れないのか？

彌豆子を人間に戻すというのは、所詮絵空事に過ぎなかったのか
……？

「男なら常に前を向け、炭治郎」

炭治郎は聞き覚えのある声に、顔を上げた。

夜でも目立つ白の羽織。一度見たら忘れない穴色の髪。

そして、水の呼吸の適性を示す、薄く青みがかった日輪刀――。

「まだ何も終わっていないぞ」

錆兎が、そこにいた。

ぎゆしの（物理）

——霞の呼吸、肆ノ型 移流斬り。

——水の呼吸、参ノ型 流流舞い。

有一郎が錆兎の横を抜け禰豆子に襲いかかろうとするのを、錆兎は流流舞いでもって封じる。

刀どうしがぶつかり合い、甲高い音をたてるのを、炭治郎は呆然と見つめていた。互いの一挙一動が速すぎて着いていけないのである。（これが、錆兎さんの力……！）

「炭治郎！禰豆子を連れて走れ！」

数合の打ち合いの隙間に錆兎は時透から視線を外さず炭治郎を一喝する。

炭治郎はようやく正気に戻ると、眠ったままの禰豆子を抱えて走り出した。

力と経験で優位の錆兎、相対するは才能と持ち前の速さを生かす有一郎。

二人の力量はほぼ互角。

「どけっ！」

「断るー！」

錆兎は有一郎を足止めしつつ、状況を打開する策を考じていた。

禰豆子についてはお館様から箝口令が下っている。鬼殺隊を混乱させない為だ。

恨みのあまり、鬼殺隊士には鬼を前にすると冷静さを保てない人間が多い。もしも炭治郎と禰豆子の存在が広まれば彼らの身が危険にさらされる。実際、今がそうだ。

知ってしまったからには事実を話すべきだが、不幸な事に錆兎の手元には禰豆子が認められている事を示すものが無かった。

なにより錆兎は有一郎より階級が低い。

本当に、流がこの場所に居ない事が悔やまれる。

「炭治郎！禰豆子！」

良かった生きてた！

俺は二人を見つけて側に寄った。炭治郎は俺を認識すると、足をもつらせて倒れそうになる。俺はすぐにその体を支え、傷をざつと確認した。

深い傷は無いが、出血が多い。貧血と疲労によって立っているのも辛かったのだろう。

「一門様！今、錆兎さんが俺を庇って、戦っていて……！」

「名前は分かるか？」

「俺と同じ年くらいで、白い刀の……」

有一郎君、本当に代わってくれたんだ。

「おつうちゃん！」

「ワカツタ」

一言で全てを察したおつうちゃんが飛んでいく。俺はこの二人を朝まで守らなければいけないので、とりあえず包帯を炭治郎に巻き付けていった。

「あ、ありがとうございます」

「気にするな。禰豆子は大丈夫か？」

「ずっと寝ているだけなので、大丈夫です！最近は起きてる時はすこぶる元気ですから！」

「良かった」

すこぶる元気な禰豆子、きつとかわいいな。にやけてしまう。

「あの、一門様。禰豆子は、他の鬼殺隊士に受け入れられるのでしょうか？鬼と対峙して、禰豆子が他の鬼と全く違う事を知りました。鬼殺隊には鬼に恨みが多い人がいると聞きます。俺たちは……」

「炭治郎」

俺はその言葉を遮った。有一郎君に襲われてかなり気が滅入って

いる。

本当にごめんなさい。

「俺が半年前に言った事を覚えているか？」

「はい。もちろん、他の鬼殺隊士が禰豆子を殺そうとする事に覚悟はしていました」

「炭治郎。俺や錆兎、義勇に真菰しか禰豆子を受け入れてくれる隊士はいなかったのか？」

炭治郎は少し詰まると、首を横に振った。

「いいえ、他に三人いました」

「それを誇れ。この短期間でよくやった。お前は自身の心で周りを変えたんだ」

炭治郎を激励する。炭治郎はとても優しいから、最初は禰豆子に否定的だった錆兎も、今では彼らを庇うほどに変わった。

「一門様……。俺、弱気になってました！すいません!!」

頬をぱんぱんと叩いて炭治郎は立ち上がる。

俺も笑って、その肩を叩いた。二気になって良かった。俺はやっぱ台本読みより普通に話した方が良いんだな。

禰豆子が目をさまし、俺の裾を引っ張る。

頭を撫でてあげると、嬉しそうに目を細めて「ありがとう」と言った。もはや言葉は不要である。

とはいえ。

背中に鋭い殺気を感じた俺はすぐさま刀を抜き、振り返った。

それはふわりと頭上を舞い、着地する。

「もう何なんですか、一門さん！鬼の頭を撫でたりして！そんなんだから私は貴方が嫌いなんです！というか頓珍漢な行動をする貴方の弟弟子含めて嫌いです！」

流の心にクリティカルヒット!!!

「え、俺もですか？」

炭治郎の心にもクリティカルヒット!!!!

「俺は、嫌われていない……………」

何気にしのぶに付いてきた義勇の心はバリアを張った！

「なにふざけたこと抜かしてるんですか富岡さん。わたし、貴方の事が嫌いですから。すぐ約束すっぽかすし、言葉が足りなさすぎて周りを怒らせるし、何度まわりが『あいつの言いたい事が分からない、訳してくれ』と泣きついてきたと思ってるんですか？」

義勇は倒れた。

——胡蝶しのぶ、勝利!!!

しのぶさんは禰豆子から庇うように義勇の前に陣取ると、眉を寄せながら話を続ける。

「この話はさておき、一門さん。どういう事ですか？鬼殺の妨害ですよ」

しのぶさんは柱の中でも有一郎君に次ぐ速さだ。正直、庇いながら戦うのは非常に分が悪い。

「炭治郎、後で合流する。とりあえず走れ」

「質問に答えませんか……、しようがないですね」

いや、今から答えようと……。

しのぶさんが禰豆子を刺そうとするのを、俺は弾いた。炭治郎はしのぶ殿の横を通り抜け、走っていく。

「一門さん。わたしに継子が二人いることをお忘れですか？」

ふらりと立ち上がる義勇。俺としのぶさんは同時に叫んだ。

「富岡さん！」

「義勇！」

「了解」

義勇は小さく返答すると、しのぶさんの背後から手を出した。彼女の細い首に腕を巻き付け、一気に絞めあげる。

いわゆる裸絞め、一度形を作られたら、よほどの体格差がなければ抵抗できない。

「あなた……後で、覚えて……なき、いよ……」

しのぶさんは驚きの表情を浮かべた後、気絶した。

「よし、決まった」

義勇は満足そうな表情でムフフと笑った。

いや、確かにしのぶさんを無力化するのが最適だけれども。そんなだけでも。

なんていえばいいんだろう。この感じ。

しのぶさん、ごめん。

「流！義勇！炭治郎は——」

錆兎が有一郎君と共に走って来る。

錆兎は義勇の腕の中で気絶しているしのぶさんを見て血相を変えた。

「義勇お前、それはちよつと……やり過ぎじゃないか……？」

有一郎君もドン引きした顔で呟く。

「継子なんだよね、一応」

合流していたカナエさんも真顔になった。

「富岡君……あなたいつか本当にしのぶに愛想尽かされるわよ？」

義勇は心外、といった表情を浮かべた。

炭治郎は、お館様の伝令が届くまで逃げ切りました。

すれ違い 前

柱合会議。

それはお館様と鬼殺隊最高位の隊士である柱が一同に集まり、鬼殺隊の方針について議論する、半年に一度行われる会議。

場所は秘匿されし鬼殺隊本部。

終わった後には柱同士の稽古や会食などがあり、いつもは（一部を除き）和気あいあいとしているのだが、今回は違った。

鬼を連れた隊士、竈門炭治郎の処遇について話しているからである。

「鬼を連れた隊士など言語道断！斬首する！」

「煉獄の言う通りだ。今この場で首を切ればいい」

まず最初に口を開いたのは炎柱の煉獄杏寿郎、蛇柱の伊黒小芭内もそれに賛同する。

「まあまあ、お館様が来るまでは保留にしましょう。それよりもわたしは竈門隊士に話を聞きたいです」

中立な意見を述べたのは蟲柱胡蝶しのぶ。

だが、内心は

（早く会議を終わらせて富岡の野郎をシメてやる!!）

と憎しみに燃えていた。

しのぶ的にも鬼は殺した方が良いと思っているが、姉のカナエに頼まれたので、嫌々この立場についてるのである。

「竈門君、怪我をしているところで申し訳ありませんが、話を聞かせて下さい。なぜ鬼を連れていたんですか？」

「はい！彌豆子は俺の妹で、鬼ですが、人間を食べた事がありません！俺は妹を人間に戻す為に鬼殺隊に入りました、必ず鬼殺隊の役に立つてみます！どうか認めて下さい！」

がばりと頭を下げる炭治郎。そこまで酷い怪我をしておらず、意識がはつきりしている上に、カナエと練習していたのだ。

「まあ」しのぶは非常に感心した。あの水柱と鮭大根バカの弟弟子であるのに、受け答えがしっかりしている。錆兎や真菰に近い性格

だ。いや彼らも変に言葉を濁すところがあるから、この少年が特別なだけだろう。

もう認めてもいいかも。お館様が容認していたってことは事実なのだから。

先ほどからのしのぶの頭にはさっさと帰って富岡を叩きのめす事しか浮かんでいない。

「信用しない信用しない。そもそも鬼は大嫌いだ」

木の上からネチネチと話す伊黒。

「でも伊黒さん、お館様は二年前から彼の事を知っていたみたい。今ここで何かするのは不味いと思うわ……」

すぐさま炭治郎に助け船を出したのは恋柱甘露寺蜜璃。

（この子、目がステキ！嘘は言っていないみたいだし、こんな子を殺してしまうのは可哀想だわ！）

蜜璃はやるときはやる女である。

柱の中でも若輩者とはいえ、勇気を出した。

伊黒はどもる。彼は蜜璃に弱かった。

「哀れな子供……殺してやらねば可哀想だ……」

「俺もそう思う！だが悲鳴嶼殿！甘露寺の言うことにも一理ある。お館様を待とう！」

「南無……」

なんとか丸く収まった柱達の会話。しかし、彼らはいまだ異常な緊張に包まれていた。

話に加わらず砂利の上に正座をしている一門流が、かつてない程の気の張りつめようで屋敷を見つめていたからだ。

お前なんか喋れよ。砂利の上に正座はさすがにきついだろう。と
いか何をそんなに警戒しているんだ。

柱一同そう思うも、一門流とはこういう男である事も知っていた。
自分の意思を悟らせず、周りと馴れ合わず、ただひたすらに鬼を滅

する男。

鬼の頸は目に見えない速さで斬り、失敗した任務は一度もない、古参の水柱。

彼とその継子で全てが完結してしまう為には他の柱との共同任務も非常に少なく、その人柄を知るものは殆どいない。

そして何より彼を語る上で外せないのは一門家に代々伝承する秘術の体現者であるということだ。

『記憶による呼吸の伝承』。噂によれば、歴代一門家水柱の記憶を持って産まれた人間だとか。眉唾ものであると誰もが最初は思うが、彼の佇まいを見ればそれが間違いではないのだと気づく。

育手に師事してから数カ月で並の隊士を上回る力量だったとか。

藤襲山の鬼を全滅させたとか。

七日間で新しい型を作り出したとか。

継子を取るときも厳しい試練を課し、それに合格したのは鱗滝錆兎しか居ない。その継子も柱と同等の力を有した、まさに次代の水柱に相応しいだろうという男だ。

非常に口数は少ないものの、お館様からの信頼は厚く、鬼殺隊の麒麟児時透兄弟を呼び込む任務についたのも彼だ。

もしや本当に何かあるのではないか……？

今まで一言も発しなかった音柱宇髄天元が一門に近づく。

「まづい」

一門は宇髄を見定めると、沈痛な面持ちになって呟いた。

「まづい」

俺はそろりと近寄ってきた宇髄に小声で告げた。

宇髄はそれを聞いて焦りの表情を浮かべる。

「やっぱりか、どれくらいだ？」

「上限は越えている……。もうすぐ来そうだ」

めっちゃトイレ行きたい！

昨日の夜からずっと行っていないなかったツケが今来てしまった。

柱が周りにいる緊張で一気にその、来ている。砂利が脛に食い込んでめっちゃめっちゃ痛い、俺は動けない。

全集中の呼吸でどうにか筋肉が縮小し過ぎないように抑えているが、とうに誤魔化せる上限を越えていた。

「本当に動けないのか？」

「どうにも出来ないな。周囲に柱がいなければ……！」

柱がいなければ、我慢せずにトイレ行けるのに！！

「こちらからできる事は何も無いぞ？」

「それはそうだが……。現状では……」

今からめっちゃプルプルしながら立って、屋敷の裏側まで行って廁に入るのは流石に難易度が高すぎる。

しかしこのまま漏らすのは最悪だ。やるしかないのか。

「無残に漏らすくらいなら……」

「はあ……。肩なら貸してやるよ」

俺はふらふらしながら立ち上がった。

「宇髄だけじゃない、俺も一門についてく！」

有一郎君が唐突に言い放った。

エ……………？

「まずい」

「上弦は越えている」

「どうにも出来ないな。周囲に柱がいなければ……！」

深く語られずとも、柱達はこれらの言葉で全てを察した。
最低でも上弦の鬼が近々現れるということ。

ずっと一門を鋭く見つめていた有一郎は、やはりかと息をついた。
有一郎が離れた数時間内に何があったかは知らないが、目前の鬼を
連れた隊士が鬼側からしても不都合な存在であり、狙われるのだろう
ということとは予想がつく。

一門をもつてして己以外の柱がいなければ倒せない鬼。歴代の柱
達が何人葬られたことか。

「それはそうだが、現状では……」

有一郎達は弱くない。しかしそれでも足りないというのは、記憶を
持つ為に始まりの呼吸の剣士達と比べてしまうのだろう。

まだ、足りないのか。

「無惨に漏らすくらいなら……」

それでも、鬼舞辻無惨に他の柱の情報を漏らすくらいなら、かつて
何度か上弦と戦い手の内がばれている自分が挑むのが良い。

そう言いたいのだろう。

有一郎は憤りを覚えた。

有一郎はそもそも自身を犠牲にしても周りを助けようとする人
間が大嫌いだ。

そんなことをさせない為、弟より才能が無いのを努力で補い、柱は
自分にしてくれと自分から頭を下げに行った。

全ては庇われない為、柱になって、誰よりも強くなれば、変われる
と思ったから。

「はあ……肩なら貸してやるよ」

宇髄が動く。

そうだ、相手が聞かないならこちらから押し付けければ良い。

「宇髄だけじゃない、俺も一門に着いてくー！」

一門は動きを止めて、目を丸くする。

有一郎の隣にいた煉獄も、笑って一步を踏み出した。

有一郎の心は他も同じとするところであった。

「ああ、一門！一人で背負いこむ必要は無いんだぞ！」

「そ、そうだわ、一門さん！一緒に行きましょう！ね！しのぶちゃんも」

「え、ああ、そうですね？」

「南無阿弥陀仏……お前とは付き合っても長い……力になろう」

「あまり俺たちを見くびるなよ」

次々に柱達が賛同する。

「一門、テメエ……！」

彌豆子の箱を持ってきていた不死川が、その箱をぼとりと地面に落とす。

「そういう事は先に言えやア！柱はお前だけじゃねえんだぞ！一人で行くな！」

今、確かに柱達の心は一つになっていた。

(え、全員厠に付いてくるの……？)

流と宇髓の心も確かに一つになっていた。

すれ違い 後

全員で連れションってこと……？

「いや、流石に女子は」

「そんなこと言わないで、一門さん！男女なんて関係ないでしょう!?!」
おおありだと思っただが。

流石に女子も混ぜて連れションは無いだろう。

「貴様、甘露寺は強い。彼女も柱だぞ。連れていかないなんて、頭がどうにかしているんじゃないか？」

いや、連れていく方がどうかしていると思う。

「全員で行くと決めたのだ！ならば例外などない！」

煉獄も、だと……？

男女で連れションするのは普通なのか？俺が変わってるのか？

周りからの視線が痛い。まるで俺が男女差別をしているみたいだ。
いや待てよ。

（もしかして、全員実は厠に行きたかったけど、勇気が無くて行けなかった……!?!）

それならば全てに納得が行く。

しかし、厠は一つしかないのだ。もしも並ぶ事になれば……

（絶対にツ、漏れる!!）

すまない！だが、俺が先に行かせて貰う！

「お前たちの覚悟は分かった。しかし、俺は一人で行かせて貰う」
（いや、お前何も分かってねえだろ。厠に行くのに覚悟するやつなんかお前くらいだよ）

宇髄は、冷静にそう宣った流に対して信じられないモノを見るよう

な目を向けた。

経験上、一門が派手に勘違いされている事をすぐさま理解した宇髓。いつもなら爆笑しながら見ているが、今回はまさかの巻き込みである。

うっかり真実が明かされようものなら一門と一緒に宇髓の株まで急降下だ。

「一門！テメエ、俺達を舐めてんのかア……？」

「すまないが、先に行かせて欲しい。時間がない」

「時間がない、とは。そこまで近づいているということか!？」

「ああ」

煉獄が眉を上げた。

普通に会話が通じている事に、宇髓は不安になる。もしかして俺が派手に勘違いしているだけなのか……？

しかし相変わらず一門の尻はプルプルと震えていた。忍び特有の観察力でわかる。あれはどう見ても抑えている。

「おい！一門！自分を犠牲にするな！」

「有一郎、お前が何を思っているかは理解している積もりだ」

絶対に理解出来ない。

普段の様子はどこへやら、必死の形相で一門を引き留める有一郎。さながら死地に向かう兵士にすがりつく人間だ。

「止める時透、これ以上の言葉は不要だ。一門、何かあったら必ず呼べ……」

涙を流しながら悲鳴嶼が道を開ける。一門はふつ、と笑って小さく頭を下げた。

「ありがとうございます。有一郎、心配するな。なに、直ぐに帰ってくるさ」

小股でそそくさと走っていく一門。

走れるのかよ。なら耐えてないでさっさと行けよ。

宇髓は一門を冷めた目で見送った。

「チツ！」

不死川がダン、と音をたてて木を拳で叩いた。その衝撃に木の上に居た伊黒が転がり落ち、甘露寺がさりげなくキャッチする。

「クソ野郎がつ！一人で行きやがつて！」

酷い言われようだが、実際用を足しに行つたので間違いではない。

「俺じゃ、上弦に手も足も出ねえつてかア!?!」

なるほど。宇髄のなかで、やっと話がまとまった。

つまり一門は一人で上弦の鬼に特攻していくと思われてたのだ。

いや、どんだけ勘違いされてんだよ。

俺氏、離脱成功！

廁の位置はすっかり頭に入っている。俺が今まで何度あの廁の世話になったか！

毎回柱合会議がある時は、あそこで用を足してから向かっていったんだ！道を違える事は絶対につ！ない!!

柱達もしぶしぶではあるが行かせてくれたし、今度からは我慢せず中途退室するのもアリかな。いや、さすがに恥ずかしいな。

鼻歌を歌いながら廁に入る。

薄暗くて狭い空間。臭いが、妙に心が落ち着く空間だ。

産屋敷邸で好きな場所ランキング堂々の一位である。

(※何が起きているかは察して下さい)

よし！今日も頑張るぞ！

天井に向かって手を挙げ、決意新たに俺は立ち上がった。

挙げた手に何かが当たり、目の前にぼとりと落ちる。

「キー……キー……」

それは眼球に足が生えた謎の物体。

俺が少し潰したせいで、血が流れていた。

「キメエエエツツツ!!!」

俺はそれを認識した瞬間に、刀を抜き、刺し殺した。

キメエエエツツツ——

キメエエエツツツ——

キメエエエツツツ……

産屋敷邸中に、一門流の悲鳴がこだまする。

『鬼滅』！一門からの合図か！皆、行くぞ！」

先に走り出したのは煉獄。全員がそれを追いかけた。

「一門、無事か!？」

鍵のかかっている厠の扉を無理やり開け、煉獄は中に入った。

そこにいたのは手を血に濡らし、地面に刀を突き刺している流。

顔を伏せて、刃の先を見つめている。

「おい、なんだそれは？」

伊黒は刃に貫かれてぼぼ形を失っている異形の物体を指さした。

「異形の鬼？いや、血鬼術か……。まさかこんな所にまで潜り込んでいるとは」

「目だ」

流はそのまま続けた。

「全て見ていたんだ。目だけで」

「なるほど」

煉獄は流があくまで一人で行く事に固執した理由を知る。

「確かに柱が揃って見られては、ここが鬼殺隊本部だと教えるようなものだったな」

煉獄は目を見張った。

なんということだ。全く存在に気が付けなかった。

一門は、柱合会議のあの場所から、これを察知したのか!?

「お館様に何かある前で良かった……。しかし、場所が鬼に割れたのも事実。早急に本部の移転を申し出よう……」

「それもあるが、上弦が近づいてんだろオ? 柱同士の稽古もした方がいいんじゃないか?」

「そうだね。今の俺達じゃ力不足だ。柱全員で同時にやるのは無理でも、特定の階級ごとに隊士を鍛えるかなにかして戦力の底上げをしよう」

「柱稽古ね!」

― 廁で始まる柱合会議。

大事な所を鬼にガン見されていたシヨックから意識が飛ぶ一門流。流の意識を必死に取り戻そうとする宇髄天元。

蝶屋敷の中で富岡義勇を合法的にぶちのめす算段が付き、薄ら笑いを浮かべる胡蝶しのぶ。

混沌とした状況で、会議は進む。

その頃、お館様は――。

柱合会議に柱が一人も来なかった事に、シヨックを受けていた!

「ひなき、にちか、分かっているよ。子ども達に、もう私の手は必要無いんだね」

「っ、お館様……!!」

「炭治郎、皆はいないようだから、君だけには伝えておこう。ひなき、文を見せてあげて」

縄をほどもらった炭治郎は、屋敷にあげてもらい、文を渡された。禰豆子も日陰なので、箱から出ている。

『もし竈門禰豆子が人を喰った際は、竈門炭治郎、鱗滝左近次、一門流が腹を斬ってお詫びします』

炭治郎は目から溢れてくるものを堪えて、お館様に頭を下げた。禰
豆子も、炭治郎と同じようにする。

なんて、暖かい人たちなのだろう。

鱗滝さん、錆兎さん、真菰さん、義勇さん、カナエさん。そして、一
門さん。

俺たちは、色んな人に支えられて生きてきたんだ。

一門さん。いや、流さんにあの時出会えて、本当に良かった。

「俺と禰豆子は、絶対に、鬼舞辻無惨を倒します！必ず！」

「期待してるよ」

「はいっ!!」

お館様は隠、と呼ばれる人たちを呼び、去っていった。

☆柱合会議、閉会!!

蝶屋敷修行編

水の呼吸だからね。しょうがないね。

お館様が体調を崩されたので、柱合会議は明日へ延期になった。鬼が潜伏していた事が明らかになり、緊急事態であるので悲鳴嶼さんだけは通されたが、他の人間は解散である。

鬼に毒を盛られたりしたのかと煉獄辺りがひどく心配していた。代理のあまね様は否定していたけど。

悲鳴嶼さんと先に帰ったしのぶさんを除いた七人で恒例の手合わせをし、死の恐怖を感じながらも二戦して家に帰る頃にはもう昼になっていた。

徹夜であったので、一眠りして炭治郎と禰豆子の様子を覗きに蝶屋敷へ向かうと。

「炭治郎……、止まるんじゃないぞ……」

「義勇さああああん!!!」

人差し指を前に出しながら廊下でうつ伏せに倒れている義勇がいた。

お館様が心に大きな傷を負った柱合会議の後。

「善逸も猪之助も無事で本当に良かった!」

「炭治郎は何でそんなに元気なんだよ……」

「弱クツテ、ゴメンネ……」

特に大きな怪我もしていなかった炭治郎は、善逸と猪之助との再会

を喜んでいた。

「善逸は鬼の毒にやられて手足が短くなっているし、猪之助は喉を痛めているけど、どちらも三週間あれば治ると思う」

「そうか、後遺症が無くて良かった！君は？」

「栗落花カナヲ」

「カナヲ、教えてくれてありがとう！俺に何かできる事はないかな？」
「何もしないでくれるのが一番かな」

カナヲはにっこり笑うと炭治郎の握手を無視して部屋から出ていく。

炭治郎は少し寂しさを覚えながらも、禰豆子の遊び相手をしながら時が経つのを待っていた。胡蝶しのぶへ、隠の人に挨拶をするように言われたからである。

ただ、今は蜘蛛山で負傷した隊士がたくさんいるから忙しいらしい。

お手伝いをしたい所だが、カナヲには断られてしまった。

禰豆子が眠ってしまったので、炭治郎もベットを借りて寝る。

再び起きた頃には夕方、そろそろ大丈夫かなと部屋を出たのである。

親切にも場所を教えて貰い、そこに向かう炭治郎が目にしたのは。

部屋の前の廊下で怒りを煮えたぎらせながら仁王立ちする女の人と、地面に伏している義勇。ひたすらそれを揺する錆兎だった。

「義勇、大丈夫だ！鮭大根と詰将棋がなくても男は生きていける！」

「無理だ、無理だ……。三途の川の向こうで手を振る姉さんが見える

……」

「戻ってこい！」

パァン！

錆兎のビンタが炸裂する。

「すごく痛い。今俺は頭にきている。なぜしのぶ殿は安直に俺から鮭大根を奪うのか。そもそもなぜこの世に鮭大根がなくても生きてい

ける人間がいるのか」

地面に伏せながらも淀みなく喋る義勇。

「そりやお前、人間だからだろう」

「水の呼吸の使い手は鮭大根で強くなれると証明されている。なぜなら俺が流に会いに行くとき必ず鮭大根が食卓に出てくるからだ。先生も一週間に一回は鮭大根を作ってくれた。錆兎も絶対に外食する時は鮭大根のある店を選ぶ」

「それは、本当ですか!？」

炭治郎はつい声をあげた。

「真菰もご飯を誘えば絶対に鮭大根のある店に行ってくれるし、村田も同じだ。俺たちに共通しているのは水の呼吸であるということ。つまり、鮭大根はすごい」

「俺、鮭大根食べたこと無いんですけど、どこに行けば食べられますか!？」

「水柱邸」

「それってどこらへんにありますか？正に水の呼吸って感じがします！」

「おい、水柱邸は料亭じゃないぞ」

逸れていく話。非常に心苦しいが、錆兎は男らしく今まで隠していた真実を教える事にした。

これ以上は義勇に毒だ。

「義勇、流はお前が来たときしか鮭大根を作らないんだ。流は親子丼が好きだからな」

「なん……だと？」

「俺は鮭大根が好物なんだ。真菰は菜の花のお浸し、村田は豚汁だな」

「……」
「ずっと隠していたんだ。お前があまりにも美味しそうに鮭大根を食べるものだから、みんなお前の為に鮭大根のある店を選んでいったんだ」

みんな遠慮して言えなかっただけである。義勇の為に黙っていたのに、あっさりばらしてしまう辺り、錆兎も水の呼吸だった。

物言わぬ骸と化した義勇。

炭治郎は駆け寄った。義勇を仰向けにする。

「ぎ、義勇さん」

「炭治郎……俺の頭がおかしいのか？」

幼少期のトラウマが再燃する義勇。

「パァン！」

「い、痛い」

錆兎は義勇の頬の、今度は反対側を叩いた。

「甘ったれるな義勇！現実を受け入れろ！鱒大根ではなく鮭大根が好きなお前は少数派なんだ！だがその事に対して鮭大根に落ち度は無いし、無論鱒大根にも落ち度は無い！今度鮭大根を侮辱するような事を言ってみろ。俺はお前と友達を止める！」

「錆兎……」

「義勇さん。俺はタラの芽が好きですけど、義勇さんの好きな鮭大根も食べてみたいです！」

「炭治郎……」

何やらいい感じの雰囲気醸し出している三人。

しかし、ここには胡蝶しのぶがいた。

「なあに言ってるんですか、富岡さん？今度ばかりはわたしもビタ一文譲る気はありませんから。姉さんに言っただけで無駄ですからね。事前に根回ししましたから」

「ゴフウ！」

普段通りの無表情で血を吐く義勇。炭治郎はあわてふためいた。

「ぎ、義勇さんは鮭大根が無いと生きていけないんです！芋虫だって、葉っぱが無いと生きていけないのと同じです！どうかお情けを……！」

炭治郎、兄弟子を芋虫と同列にする。

「富岡さんは人間ですよ」

「いいえ！普通の人間なら鮭大根程度で血を吐いたりしません！義勇さんは違います！」

炭治郎、ガチである。
流石の義勇も驚く。

「炭治郎、もういいんだ……」

義勇はふらふらと立ち上がると一歩、二歩と歩いた。しかし、しのぶの前で膝をつく。

「俺は、お前と彌豆子を信じている。だから、お前は胡蝶しのぶという壁に当たっても、絶対に諦めるな。大丈夫だ、お前な——」

「くどい!!」

「グッ」

しのぶは義勇の頭に踵落としを決めた。

一気に怒鳴り付け、足早に去っていく。

「止まるんじゃないぞ……」

「義勇さああああん!!!」

泣きすぎる炭治郎に錆兎は何とも言えない表情を浮かべた。

実を言うと、この茶番。初めてでは無いのである。

毎度毎度、鮭大根が禁止されるたびにしていたが、今回は全く事情を知らない炭治郎が見てしまい、劇が暴走してしまった。

炭治郎を引き剥がし、錆兎はこっそり耳打ちした。

「おい、義勇起きろ。今回ばかりは無理だ」

「……………」

「流は、」

「義勇?」

義勇は反応に困りすぎて却って能面になっている流を見た。

「流は、何が好物なんだ?」

いきなりの飛び火に戦く流。

流はお汁粉が好物である。何時もは錆兎の好物と思われる上、作るのが楽な親子丼ばかり食べているが、こっそり汁粉を食べに出掛け

たりしている。

でもいい年してお汁粉が好物とは、少し恥ずかしい。

「雑煮」

流はお汁粉を広義的に表現することにした。お汁粉だって小豆を煮たものである。

周りが静まりかえり、流は少し恥ずかしく思った。錆兎はもしかしたら俺がお汁粉好きであることを知っていたかもしれない。

炭治郎も元気そうなので、その場を去る。

「雑煮……」

「なん、だど？」

錆兎は呆然と呟いた。

笑顔で縄を持った水の呼吸唯一の常識人枠、真菰が流と入れ代わりに来る。

「近所迷惑は止めようね」

縄を義勇の体に巻き付けていく真菰。

「真菰は、何が好物なんだ？」

「鍋かな。皆で食べると美味しいよね」

「なん、だど？」

義勇を巻いた縄を、そのまま錆兎にも巻き付けていく真菰。

「炭治郎、蝶屋敷では静かにしないといけないからね」

「あ、はい」

炭治郎は素直に従った。

廊下の角から一門攸花がヒョイと顔を出す。

「まこもー！一段落したから富岡さん来なくて大丈夫！」

「うん。じゃあ吊るしておくね」

真菰はズリズリと野郎共を引っ張り去っていった。

「炭治郎はいい子にしているんだよ？」

炭治郎は鱗滝の弟子の中で一番強いのは、真菰であると確信した。

一門流がモテない理由

鬼殺隊に女性隊員は非常に少ない。

鬼を斬るといふのがただでさえ重労働なうえ、筋力がなければなすべなく殺されるからだ。呼吸を修める者が少なければ最終選別を突破できる者も少なく、高位の隊士であれば更に数が限られる。

そんな中で生き残る者が居れば、それは即ち剣術に特に秀でた者であるということ。そこらの男性隊士よりもよっぽど人間をやめているだろう。

でもやっぱり女子であるからお洒落や甘いものが好きだし、可愛いものを見ればときめき、三人寄れば恋愛の話になるのである。

蝶屋敷の縁側、ちよつとした用で胡蝶しのぶに会いに来た甘露寺蜜璃は羊羹を舌でじつくりと味わいながら、側にある濃い緑茶を口に含んだ。小豆の甘さが口の中でふわりとほどけ、お茶と一緒に喉を通る感触に顔を綻ばせる。

「んー！たまらないわ！」

「羊羹はいつ食べても美味しいわねー」

蜜璃の笑顔につられて笑うカナエ。忙しくて相手をできないしのぶに代わり、一緒に羊羹を食べていた。

カナヲもカナエの膝の上に座り、もぐもぐ口を動かしている。

「気に入ってくれたみたいで嬉しいな」

真菰は一心に食べるカナヲの頭を撫でて笑った。カナヲは不思議そうに顔を傾ける。

「任務がてら、銀座で買って来たんだ。いつも義勇がお世話になってるし」

「富岡君は良く働いてくれるわよ。致命的に空気が読めないだけで」
「花柱様にそう言って頂けると、同門の身として誇らしいです。村雲さんは、どう？羊羹を食べた事が無いと聞いたけど」

村雲は、人生初の羊羹に感動していた。箸を握りしめ、ぶんぶんと首を縦に振る。

「ソグ。すごく美味しい。こんな甘い食べ物がこの世にあつたなんて、驚きだ」

「春ちゃんはその甘いものが好きなのね！今度美味しい甘味処を教えてくださいわ」

「感謝するー！」

年齢差はあるものの、継子同士の二人は気が合った。

「にしても凄いわね。偶然でこんなに集まるなんて」

「同感です！わたしはしのぶちゃんに口紅を渡しに来ただけ、皆は？」

「羊羹を渡しがてら、攸花ちゃんに会いに」

「虫下しを貰いに」

周りが目を丸くするのを見た村雲は、照れくさそうに頭を掻いた。

「いや、いつもなら3日ぐらい気合いで耐えるんだが、今回は任務が重くなってな……」

そういうことじゃない。

「余分に貰っておきなさいね」

村雲が魚ばかり食べている事を知っているカナエは、一切驚かなかった。

「村雲さん、魚の生食は危ないですから、なるべく火を通して下さい」
診療を終えたしのぶが盆を持って加わった。盆の上には大福が乗っかっている。

「あれ？姉さん、羊羹なんてあつたっけ？」

「真菰ちゃんが持ってきてくれたのよ。富岡君がお世話になってるからって」

しのぶは口をへのじに曲げた。

「あの人は……ううん、真菰さんに言っても仕方がないわね。でもどうしよう、豆大福はいらなかった？」

「食べます。お腹すいちゃったのよね」

カナエは恥ずかしそうにもじもじしている蜜璃に視線を送る。そ

れに気づいたしのぶは笑んだ。

「皿にのせてしまったから、遠慮せずに食べてくださいな」

「嬉しいー！」

蜜璃は小皿を受けとると、柔らかい豆大福をそっと掴み、口に入れた。

薄皮を歯で破るとつぶあんが溢れ、口の中で一気に広がる。数回噛んで甘さが舌に馴染んできた所で塩味の豆がしよっぱさで甘さを打ち消す。

とても甘い、けれどもくどくない。蜜璃の体が多幸福感に満たされた。

「おいしいー！」

思わず頬に手を当てる。

「カナヲ、あーん」

カナエが大福を口に近づけると、カナヲはしばし大福を見つめ、ぱくりと口に含む。

「お餅は喉に詰まると大変だからね。しっかりと噛むのよ」

きつちり三十回噛んだ後に、カナヲはごくりと飲み込んだ。

「どう？おいしい？」

再び口到大福を近づけるカナエ。カナヲは何も言わずにもう一口食べる。

「やーん、かわいいー！」

蜜璃が身もだえする。真菰もうんうんと頷いた。

「ングッ！」

「村雲さん!？」

村雲が大福を喉に詰まらせ、別の意味で身もだえしていた。

「あのね、実は皆に聞きたい事があって……」

村雲を救出した後、真菰に誘われた一門攸花も加えて蜜璃が口を開いた。

「わたし、新しい呼吸を生み出そうと思っているの。炎の呼吸ももちろん使えるんだけど、わたしの全てを生かしきれないのよね」

「型の相談？道場を使います？」

「ううん！型は出来てるの。ただ、もっと知ればもっと良くなる気がして」

話の流れが掴めず首を傾げる一同に、蜜璃は覚悟を決めて言った。

『『恋の呼吸』の参考に、みんなの理想の男性を教えて欲しいです！』（恋の呼吸ってなんぞ？）

全員の心の声が木霊した。

「じゃあまずわたしから行くわね！」

ノリノリで話に乗るのはカナエ。

「わたしはやっぱ優しい人がいいわねー。年下に優しいとなおよし！しのぶとカナヲのお兄さんになるんだから！」

「優しさは重要ですよね！分かるわー！」

普通である。しのぶはほっと息をついた。

しかし、我が姉は優しいだけのダメ男につけこまれそうだと心配になる。まあ近づく前に排除すれば良いのだが。

「じゃあ次ね！攸花ちゃんはどうな人が好き？」

「え、わたしですか……？うーん、夢を追いかけている人が良いですね」

『『夢を追いかけている人』！素敵なお付き合いはした事があるの？』

攸花は少し苦い顔になって湯飲みを見つめた。明らかに黒歴史であることを示している。

「なぜか分からないんですけど、数日で向こうから離れていくんですよね……。怯えながら……」

「あらあら」

カナエは眉を下げ、口に手を当てた。ちらりと真菰の方を見ると、真菰はにこやかに笑ったままである。

「攸花ちゃんは悪くないよ、男の方がダメだったんだよ」

「真菰には何度も相談に乗って貰ってるのに、ごめんね。わたしってそんなに怖いのかなあ……」

「攸花ちゃんは素直で優しく、教養もある素晴らしい女の子だよ」

間髪入れずに答える真菰。

「真菰ちゃんは攸花ちゃんの事が本当に大切なのねー」

「……まあ、攸花さんが変な男に引つ掛からないのは良いことだわ」

カナエとしのぶは真菰が裏で手を引いてる事を察した。

蜜璃は興奮そのままに話を続ける。

「そういう真菰ちゃんは？」

「わたしはしっかりと知っている人がいいかな。周りに迷惑をかけず、分別をわきまえた、常識のある人」

周りに迷惑をかけ、分別をわきまえない、常識のない人の具体例がカナエとしのぶの頭に浮かんだ。

「錆兎か？」

投下される村雲爆弾。

何も条件を満たせていない男を挙げる。

「うん、あれは無いね」

真菰の笑みは変わらなかった。

「しのぶは？」

しのぶはギクリと肩を震わせた。恥ずかしいので無難な答えを作り、答えようとするも……。

「そういえば、昔しのぶが理想の男の子について語っていたのよねー。確か、」

「姉さん!!」

しのぶはカナエを恨んだ。嘘をついたら幼少期の忘れたい思い出

が掘り返されるといふことである。

言うわよ！言えばいいんでしょ！

半ば自棄に答える。

「理知的で、温厚な人物が良いです。物静かな人とか」

「いいわねー」

ほけほけとカナエが笑う。

「富岡か？」

再度投下される村雲爆弾。

蜜璃が「きゃー！」と声を挙げた。それ聞いちやう？といった感じで

真菰の笑いがニヤニヤになる。

「人の話を聞ける事が大前提ですツ!!」

「あらあら」

カナエは妹の可愛らしい様子に目を細めた。

「んー次！春ちゃん！」

「父上のような人がいい！強く、賢く、誇り高い人物。武術を極めていればなお良し！」

「まさに武士って感じね！いいわ！」

「弱きを助け、強きを挫く！辞世の句は『我が人生に一片の後悔なし！』民衆の手本となるような、志高い人間だ！」

かなりの時代錯誤である。

「それって一門さんですか？」

しのぶの反撃！

しかし、村雲は平然として宣った。

「いや、あれはないな。色恋に露ほども興味が無いと見える」

「どういうことですか、村雲さん？」

倭花は声を大にした。兄の恋愛事情は把握しておきたいのが妹というものである。

「雰囲気で分からないか？その、女に対して硬いというか……」

「ああ、なるほど」

カナエはうんうんと頷いた。

「あまり機会は無いけれど、話をする時も不用意に近づかないとか、距離をとるのよね。わたしの方が後輩なのに、『胡蝶さん』って呼ぶし。男性は基本呼び捨てなのにね。女の子が苦手なのかしら？」

「一門さんって、水柱様の事よね？そこそこ若い方だと思っただけけれど、結婚はなさってるの？」

「いいえ、まだです」

「でも妹である攸花さんは兎も角、真菰さんや村雲さんとは親しいですよね？」

しのぶは純粋な印象を投げかけた。

しかし真菰と村雲の二人はうーん、と首をひねる。

「わたしはそんな風に思っていないかな。そもそもあまり話さないんだよね。一門家でも狭霧山でもすれ違っていたから」

「わたしが話しかければ答えるが、向こうから話しかけてくることは稀だな」

会話に置いてきぼりの蜜璃が口を挟む。

「煉獄さんからだけれど、無口な方って聞いたわ」

「そうね、静かな方だわ。怒ってるのを見た事が無いし、カナヲにお菓子をあげたりしているから優しい方だと思うけど」

「蜜璃にも分かりやすく言うと、静かな錆兎といった所か」

「静かで表情の少ない錆兎かな」

蜜璃の頭に『男は……どんな壁でも、越えてみせなければ……』と無表情で呟く錆兎が浮かんだ。

「なんか……とても微妙だわ……」

「原型を留めてないわねー」

「そんなのただの富岡さんですよ。でも、何より一門さんを語る上で外せないのは『記憶による呼吸の伝承』ですね」

しのぶは手ぬぐいを出して、大福の白い粉がついているカナヲの口を拭った。カナヲはなされるがままに頭を揺らす。

「記憶による呼吸の伝承？」

「先代が極めた呼吸法を記憶ごと引き継ぐ、という一門家に代々伝わる術です。原理は全く分かりませんが」

「歴史あるお家だと、そんなものもあるのね！」

カナエは話を戻した。

「でもただ距離が遠いだけで、それ以外は違和感は無いわよ？女子が苦手なら、もっと顕著に出ても良いと思うけれど……」

「それだ」

真菰がぼつりと、しかしはつきりと呟いた。

「記憶の伝承があるから、女性にあまり近づかないようにしているんだ」

「それは、どういうことなの？」

真菰は人差し指を鼻に当て、思案しながら話を続ける。

「攸花ちゃん、流さんの性格は先代の記憶の影響がかなりあるよね？」

「うん。兄さんは昔から静かで、頭が良かったよ」

「わたしたちは『記憶による呼吸の伝承』を言葉のまま捉えて、呼吸だけを継いでいると思っていた。だけど実際は違うんだよ、呼吸以外にも伝承されているんだ。記憶を受け継いでいるんだから、いわゆる『先代』の知識や経験その他諸々も受け継いでるんだよ」

一旦言葉を区切る真菰。村雲は困惑を顕にする。

「まだ話が読めんな。どんな関係があるんだ？」

「記憶とは思いつい出とも言い換えられますよね？そして思い出は人間の人格形成に重大な意味を成すもの。そして今の流さんはそれを全て踏まえた上での性格なんです。その思い出にもしかしたら——」

しのぶが真菰の言葉を引き継ぐ。

「もしかしたら、恋愛関連の記憶もあるかもしれないってことですか？」

「はい。一門家が今まで続いているということは、先代にも奥方がいらっしやったということ。流さんはその方を一途に思い続けているのではないのでしょうか？」

迷探偵マコモ、爆誕!!

「なるほど！あれは亡き奥さんを思つての態度と言われれば分からなくもないわ！真菰ちゃんさすがね」

カナエはポンと手を叩いた。

「前世の奥さんを思い続けるなんて、ロマンティックねー！わたしもそのくらい一途な人と結婚したいわ！」

蜜璃はキュンとして、体をくねらせた。

しかし攸花はイマイチ納得がいかない。あれはただ単に口下手なだけな気がする。

「でも真菰、それは——」

「それは、そもそも女なのか？」

「へ？」

攸花の言葉を遮つて村雲が異議を唱えた。

「これはわたしの師範から聞いた話なのだが、一門は始まりの水の呼吸使い手の記憶を受け継いでいるらしい。戦国時代の人間だ」

全員が黙っていた。

「衆道じゃないのか？」

三度目の村雲爆弾。

「女に近づかないようにしているのではなく、男に近づきすぎなんじゃないか？」

まさに逆転の発想である。

ちなみに戦国時代において、衆道は珍しいものでも何でも無かつたのである。そういう事がタブー視されるようになったのは西洋文化が入つて来てからであり、日本では（以下略）

「え、じゃあ錆鬼とも……」

「富岡さんとも……」

真菰としのぶは震えた。

「そういう関係かも知れないわねー」

カナエは笑った。結局、そういう方が話として面白い。

蜜璃は硬直している。

そのなかで、一名、本当に震えている者が一人。

「お姉ちゃんが言ってた巖勝殿って、そういう関係の人だったの……？確かに一族ぐるみで付き合うなんて生半可な思いじゃないと思うけど……。え、え？」

流はりんごを剥く手を止め、ぶるりと肩を震わせて周りを見回した。

「どうした？」

錆兎がりんごを爪楊枝でさし、口に放り込んだ。しゃくしゃくと小気味良い音をたてて口を動かす。

「いや、俺も何か感じてしまった」

「流もか……、義勇はあんなに寒がっているし、風邪が流行りそうだな」

「錆兎も少し顔色が悪いぞ」

「なかなか、ぞわつと来たんだ」

折角水柱邸に来ているのに、布団にくるまっている義勇。

流はりんごを小さく切って義勇の口へ落とした。何も言わずに義勇はもぐもぐ食べる。

「大丈夫か？」

「非常に悪寒がするだけで、咳も喉の痛みもないから問題ない……」

「とりあえず葱を沢山食べろよ」

流は残りのりんごを口に入れ、夕飯の準備をするべく立ち上がった。いわずもがな、鮭大根である。

「どうした、黒死牟？」

「いえ……なんでもありません……」

☆お劳しや、兄上——！

証明

錆兎と義勇が吊るされている木を硝子越しに眺めながら、俺は物思いに沈んでいた。

彌豆子が朝だから普通に寝ていて悲しかったり、そもそも何しに来たんだっけ俺、とか考えなくも無かったが、目下の最重要事項は煉獄についてである。どうやって彼を生かすかだ。

煉獄は少しうるさいけど、人情に溢れた優しい男だ。俺は今だからあそこまで純粹に他人を思える人間に会った事がない。少しうるさいけど。

絶対に猗窩座なんぞに殺させるものか！

そう決意したのは二年前。いまだに完璧な対策が思いつかない。

嘘です。思っています。悲鳴嶼さんが無限列車に乗れば全部解決なんです。

目が見えないから下弦の壺の催眠術効かないし、透明な世界入れちやうし、猗窩座までだったらサシで倒せると思う。まじである人強いから。

問題は悲鳴嶼さんを列車にのせる話術が俺に無いことである。

悲鳴嶼さんは周りから歴代柱最強クラスに思われているため、本人の性格も相まって担当地域が非常に広い。つまりは忙しい。

列車のある場所は煉獄の担当場所に近い上に、煉獄も十分強いから、『念のため柱二人でいったらどうですか？』なんて言えば本人たちに却下されること確実なのである。

柱の共同任務は効率が悪いからね。ただし、しのぶさんは例外。

今の所一番実行可能なのは俺も煉獄にちやっかり着いていく事だ。錆兎と一緒に着いていけば、結構な戦力になると思う。

しかしその場合、無惨が慎重になって上弦を二人派遣してきたら確実に詰むのだ。無惨の頭無惨確率ガチャなんて絶対やりたくない。

おのれ猗窩座ア!!

だがまだあと数ヶ月はある。取りあえずはかまぼこ隊を叩き上げることか。そうだと俺こいつら鍛える為に来たんだ。

幸いにも人材は揃っている、錆兎に義勇、しのぶさんにカナエさん、真菰に村雲。炭治郎は弟子達に頼むとして、伊之助は風の派生だから村雲か？善逸は、俺でいっか。

指導には慣れてるぜ、何せ錆兎を育てたのは俺だからな！

六年前、柱になりたての頃に『俺今から百回技出すから、お前的まな全部風って？』と鳴柱からリンチを受けた経験が役立つ時がとうとう来たようだ。ちなみにそのせいで俺は雷の呼吸がトラウマになった。煉獄については宇髄にも相談してみたいと思う。適当に言葉を濁してだけど。

目を覚ました善逸が俺の事をじっと見ていたので、要件だけを伝えておく。

「俺は一門流。これからお前を鍛える」

「ながれ……。流さん？」

お、どうやら俺の事を知っているようだ。まあ俺水柱だし、地味に位高いし。

「もしかして、狭霧山の変態!？」

なんでやねん。

「待たせてしまいすみませんね、炭治郎君。改めまして、わたしは胡蝶しのぶ。胡蝶カナエの妹です」

「お構い無く！俺は竈門炭治郎で、こっちは妹の禰豆子です。ほら禰豆子、あいさつだ」

「んん……」

「禰豆子お……」

がばりと頭を下げる炭治郎。禰豆子にも促すが、禰豆子はしのぶに怯えて炭治郎の後ろに隠れた。炭治郎は困った風に禰豆子を見る。

「ごめんなさい、しのぶさん」

「仕方ありませんよ炭治郎君。わたしが禰豆子さんの命を狙った事は事実なのですから」

しのぶは笑って受け流すと、炭治郎と禰豆子の為に泡茶を出した。医務室には、換気の為に開け放った窓から男の澆刺とした声が響いてくる。

「話はすぐに終わると思いますが、一応」

「ありがとうございます」

湯飲みを受けとる炭治郎。禰豆子も手で受け取ろうとするが、その熱さにすぐ手を離す。しのぶはそれを見て、卓の上に湯飲みを置いた。

ゆらゆらと立ち上る湯気に、禰豆子の目が釘付けになる。

「かわいいのね、姉さんの言っていた通りだわ」

しのぶは憂いをおびた表情で小さく呟くと、表情を改め炭治郎に向き直る。

「炭治郎君、禰豆子さん。あなた達の保護はこの蟲柱が直々に承った任務です。ひとまずこの蝶屋敷にいる間はあなた達の絶対の安全をわたしが保障します。ええ、もちろん隊士からの安全も含めてです」

「ありがとうございます」

炭治郎はほっとした表情でしのぶに感謝を告げた。

「ですが残念ながら、これはただの善意ではありません。あなた達は

鬼舞辻無惨に遭遇し、命を狙われる何かがあること。それを利用して数代に渡って姿をくらし、ましている鬼舞辻無惨を見つける事が理由の一つであることも確かです。わたしも完全な味方、というわけではないの」

「いえ、それを教えてくれただけでもありがたいです」

「そして、姉と違って禰豆子さんと必要以上に親しくするつもりもありません。もしもの時に『情け』を覚えてしまったら柱の名折れですから。それも最初に言っておきます」

「はい。その時は俺も禰豆子の頸を切つて自刃するつもりです」

炭治郎は少しも躊躇わずに答えた。しのぶは炭治郎の瞳から確かな覚悟を感じとり、信頼に足る人物であると評価する。

「本来ならば炭治郎君の居ない隙にやろうと思つていたのですが……予定変更です。その覚悟、いかほどか試させて貰います」

しのぶが窓に寄り、顔を出すと、「応ッ！」と男が返事をした。

「ここ、蝶屋敷は鬼殺隊の医療施設として、日夜怪我人を受け入れています。今回のように、血鬼術の治療を行うこともあれば、四肢を欠損し、血にまみれた人間を運びこむこともある」

しのぶの鋭い視線に炭治郎は息を飲む。

「血の臭いに鬼は非常に敏感です。あなた達を守ることがわたしの任務ではありますが、わたしは柱以前に一人の人間としてこの看護師達と患者を守る義務があります」

しのぶは懐から鍵を取り出して、奥の小さい棚に差し込む。そこにあるのは大量の印がつけられた小瓶だ。中にあるのは赤い血液。

禰豆子の瞳孔が開き、爪が伸びる。

「なので証明してください。わたし……いいえ、鬼殺隊に対して、禰豆子さんが人を喰らわない鬼であるという事を」

「待たせたな、胡蝶！」

目の前のしのぶや流とはまた違った強者の匂いに、炭治郎は燃え盛る炎のようだと感じながら振り返った。

「あいにく、わたしだけでは信頼に足りないという話だったので。炎

柱の煉獄杏寿郎さんです。禰豆子さんがこの稀血に耐えられるか、見させてもらいます」

しのぶが皿に血を流し、禰豆子の前に置く。

「ガッ!!」

「禰豆子!!」

先程までとは売って変わった形相で皿へと向かう禰豆子。炭治郎はその手を掴もうとするが、別の手がそれを阻む。

「すまないな、少年！無理やり止めては意味が無いのだ！」

「なっ?! 禰豆子!! だめだ!」

しのぶはそれを真剣に見つめている。

皿まであと少しの所で禰豆子は、足を止めた。無理やり衝動を押さえつけるように歯を食いしばりながら、血を凝視し続ける禰豆子に、意外にも声を掛けたのはしのぶだった。

「禰豆子さん。姉さんの理想、姉さんの信じたあなたを、わたしにも信じさせて」

「ムー!」

禰豆子はすぐに身体を小さくすると、窓から毬のように転がりながら外へ出ていった。

「禰豆子!」

炭治郎も呆気に取られた煉獄の隙について拘束から抜け出し、外へ飛び出していく。

「ぷっ!」

しのぶは煉獄の表情を見て、堰を切ったように笑い出す。煉獄は眉

を寄せると、脱力して近くの椅子に腰かけた。

「胡蝶、君ははじめからあの鬼に厳しくするつもりなど無かったな？」

「十分厳しくしましたよ？わざわざ貴重な稀血まで使ったのですから」

煉獄は辺りを見回した。

「いつでも抜け出せるようにと開けたままの窓、静止する言葉。もし脱走して人を襲うなんて事をしたらどうするつもりだったのだ」

「でもその中庭には富岡さんと鱗滝さんがいたでしょう？」

「吊るされていたがな！それに極めつけはあの少年だ。常中はまだ未発達とはいえ、あの若さで呼吸をあそこまで使いこなせるのはなかなかではないか！」

「それに関してわたしも知りませんでしたよ。昨日会ったばかりなのですから……。ええ、でも煉獄さんの拘束から抜け出せるとは思っていませんでした。姉さんに指導されただけはありませんね」

カナエは常中を使えない隊士であるが、そのぶん瞬発力を高めた呼吸を一年かけて習得したのをしのぶは知っている。だからこそ、まだ隊士でいられるのだ。

「どうですか、煉獄さん？いろいろしたとはいえ、鬼の彼女が稀血の誘惑に打ち勝ったのは紛れもない事実です」

「むう……。彼女を完全に無害であると認めるにはまだ足りないが、俺は俺の見たことをお館様に伝えよう」

「よしなに」

しのぶは静かに頭を下げた。

戸口まで向かった煉獄だが、ふと思立ったようにふりかえる。

「胡蝶、なぜ君はあの鬼をそう素直に信じられる？君も鬼に因縁があるのだろうか？」

しのぶは少し逡巡した。家族を殺した鬼のこと、友を殺した鬼のこと、大切な姉を瀕死にした上弦の式が頭をよぎる。

それでも、

「それでも、わたしは姉さんの夢と一緒に見たいんです。やっとその

機会が来たんですよ？無意に潰すわけにはいきません」

しのぶはいたずらっぽく微笑んで、首を傾けた。

「それに、姉さんが『良い子』と言った鬼が悪いわけじゃないじゃないですか」

胡蝶カナエが嘘をつかないことをしのぶは知っている。

カナエが穏やかで誰にも優しいのは確かだが、彼女は絶対に気休めで嘘をついたりしないのだ。良いものは良いと言い、悪いものは悪いと言う。

カナエが持つ何よりも強いものはその精神力。

鬼殺隊内で物怖じせずに『鬼と分かりあいたい』などと主張することからも分かる。

判断なんて見誤るわけないのだ。

「そうか。確かに元花柱殿の言葉であれば信頼に足りるな……」

煉獄は風の吹き込む窓を見やると大きく頷いた。

「質問に答えてくれてありがとう！千寿郎もここに来てから笑顔が増えたし、君には感謝してもしきれない！」

「千寿郎君については攸花さんにお礼を」

「む、確かに！一門家には世話になってばかりだ！ではまた今度！」

杏寿郎が去るのを見届けた胡蝶は窓に手をつき、中庭を見下ろした。

柔らかい表情が一瞬で崩れ、硬直する。

「……何やってんのよ、あいつら」

そこには目を回して木刀を振り続ける千寿郎と、ぶらんぶらん吊らされたまま回避する男達の姿があった。

富岡先生

「新人を鍛えようと思う」

「いきなりだな」

数日単位でのお館様一家の引越しも無事終わり、俺と宇髄には明日の新邸で行われる柱合会議に備えて待機命令が出されていた。

錆兎含め丙以上の隊士は攪乱用に用意された複数の籠の護衛に動員されたため、この場には居ない。

かなり格の高い宿で、部屋には二人きりである。

「やっぱり新人育てなきゃダメだと思うんだよ。最近隊士が弱くなってるし」

「それには大賛成だが、錆兎を継子にしないために全力出してたヤツが言うか？そもそもお前ほぼ錆兎としか任務してないから関係無いだろ」

「……………」

マジレス乙。

「まあ隊士の質が落ちていくというのは確かだな」

「そうだ。ということで蝶屋敷にいる三人の隊士を育てたい」

「おう、頑張れ」

ホ？手伝ってくれないの？

「なんだよ、フクロウみたいな顔でこっち見んなよ。だいたい柱の中でお前が一番余裕あるんだからお前がやれよ」

「おい、俺の管理地域がどれだけ広いのか知ってるか？手伝ってくれよー」

「錆兎がいるから良いじゃねえか！あいつ強いだろ」

「俺はお前が説明するの面倒臭くなったときに『まあ、一門流が言ってたからな』で誤魔化してるの知ってるんだぞー！」

「知ってたのかよー！でもお前だって『宇髄が言っていたんだ、間違いない』て勝手に言ってるだろー！」

『宇髄が言っていたんだ、間違いない』は俺にとって万能な言葉であ

る。例えば、

『一門、それは本当か？ 確証はあるのか？』

『宇髓が言っていたんだ、間違いない』

『忍びが言っていたということは、既に調査済みということか。なるほど』

のような感じで某ネチネチ柱の追及をかわせたりできるのである。

「……………まあいいだろう」

「なんでそんなに偉そうなんだよ。というかどうして俺なんだ？ 雷の呼吸でもいるのか？」

「霹靂一閃だけを極めたヤツが一人…………」

「首の骨折られないように気をつけるよ。とりあえず俺は他にやることがあるから、頑張れ。それと例の件だが…………」

例の件ってなんだっけ。俺は姿勢を正した。

蝶屋敷にて。

「善逸さん！ 喚いてないで早く飲んでください！」

「イヤだよおお!! 苦い苦い苦すぎるよコレエ！」

くさい湯呑みを前に、仁王立ちで眉を上げる神崎アオイと泣きじやくる我妻善逸がいた。

「我慢して飲まなくては治るものも治りませんよ！ ホラ！」

「無理なものは無理なお！」

アオイが無理やり湯呑みを口元に近づければ、善逸はイヤイヤと首をふる。

ほとほと困り果ててしまうアオイ。それを退けて一人の影が現れ

る。

「どけ」

それは死んだ目で立つ白衣を纏った男。

男はアオイから湯呑みをふんだくるとそのまま勢いを殺さずに湯呑みで善逸を殴り飛ばした。

「つべこべ言わずに飲めえ!!!」

「とみお」かぜんせい!!」

胡蝶しのぶによるメタメタ計画によって五徹目、イライラゲージマックスの富岡義勇である。

「アオイ……、後は、頼んだ……」

しかしその拳に全力を出し尽くした富岡はそのままベッドに倒れこみ、力果てたのだった。

「とりあえずお仕置きは終わりねー」

どこからともなく現れた胡蝶カナエは栗落花カナヲを引き連れて富岡を担いだ。

「アオイ、お疲れさま。休憩よ。お昼ご飯あるから、しっかり食べてね」

「あ、ええ……はい。ありがとうございます」

突然過ぎる出来事に硬直していたアオイだが、すぐに気を入れ換えてパタパタと走る。

「カナヲ、運ぶの手伝ってくれる？あと、炭治郎君の鍛練につき合っただけ……」

「はい」

カナヲは腕に抱えていたおじいちゃんカラスを自らの頭に乗せて、カナエの反対側から富岡の腕を肩にかけた。

「ギユウ……、大丈夫か？」

カナヲはおじいちゃんがいちおう富岡義勇の鎧鴉であったことを思い出す。

「だ、大丈夫」

慣れないながらもおじいちゃんを安心させるように声を出したカナヲを見て、カナエは笑みを深くするのだった。